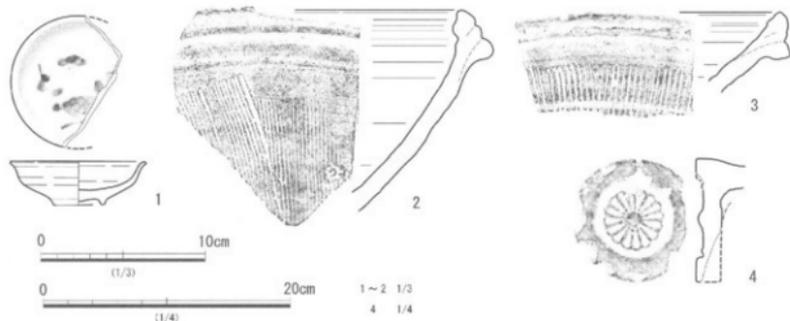


内法の直径約90cmを測り、掘方に直接設置されており、基礎構造はない。井戸内の底には3~15cm大の円礫が敷き詰められている。石組みはこの木製井戸枠に直接乗せられている。石組みは20~50cm大の花崗岩割石石材を標高0.1mから2.6mまで、約2.4mの高さに積んでいる。本来は当時の生活面の高さまで積まれていたものとみられるが、廃棄時に上部の石材ははずされているようである。土層断面では、作業面を確保ながら3~5段の石材が背後に3~5cm大の円礫を充填しつつ積まれているようすが観察できる。なお、標高1.0m付近の境に、下は20~30cm程度の石材、上は40~50cm程度のやや大振りな石材が多い。また、掘方上にはSP271、SP272を検出している。SP271は底に柱の礎板とみられる平たい花崗岩石材を伴う柱痕跡で、検出面から約80cm、標高2.1m付近まで掘り込まれている。掘方がかなり広く、SE255の掘方と同時に埋められているように思われる。SP272は深さ30cm程度の小さな柱痕跡で掘方は認められない。この2基以外には同様の柱痕跡は検出できなかったが、SP271とSE255の掘方埋土との関係などからSE255に伴う上層構造などの柱穴である可能性がある。

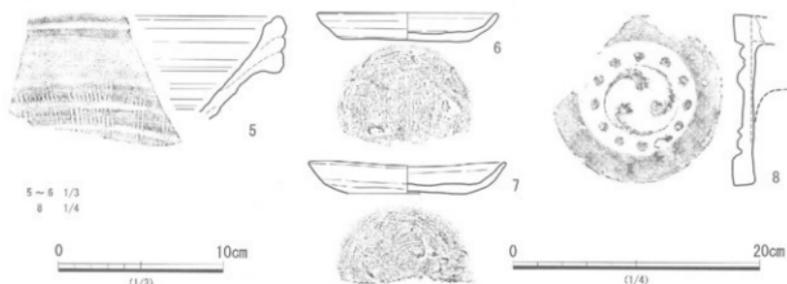
出土遺物は多くない。ただし、井戸内の下層には木質遺物、特に箸が多量に廃棄されていた。掘方内からの出土遺物は、近世遺構面3の遺構などから出土している伊達や澤、肥前陶器を含んでおり、大半は井戸掘削時に下層の遺構から混入したものと考えられる。第111図に掘方出土のものをあげている。備前焼播鉢(2・3)は体部外面がナデ(ロシロ目)でありヘラケズリはなく、口縁部にはゴマがかかる。4は菊丸瓦で、色調は灰白色、文様は菊文である。また、図示していないが、関西系の炮烙の破片が含まれる。以上のように、掘方出土の遺物は、明らかに下層から混入したものを除くと、十七世紀後半頃の様相が強いように思われる。

第112図~第114図に井戸内出土のものをあげている。5は非常に赤みの強い胎土の播鉢で関西系のも



品名	種類	器種・器位	測量(GRP)	形状・構造的特徴	胎土層の特徴	色調
1	備前焼	播鉢	内径 9.9 外径 12.7	高約4.5cm。内面に花文文。	胎土層は 黄褐色(100%)	胎土層は黄褐色(100%)
2	備前焼	骨	内径 0.8(0.4)	1/30程度厚の骨片。内面に幅約1.5cm程度の縦下目によるおろし目。口縁部外側に自然筋。	胎土層は下層の赤土を多く含む(黄褐色)	内面は赤褐色(100%)、外面は赤褐色~黄褐色(100%)、口縁部は赤褐色(100%)
3	備前焼	播鉢	内径 0.8(0.4)	1/30程度厚の骨片。内面に幅約1.5cm程度の縦下目によるおろし目。口縁部外側に自然筋。	胎土層は下層の赤土を多く含む(黄褐色)	内面は赤褐色(100%)、外面は赤褐色~黄褐色(100%)、口縁部は赤褐色(100%)
4	備前焼	瓦	内径 0.8(0.4)	1/30程度厚の骨片。内面に幅約1.5cm程度の縦下目によるおろし目。口縁部外側に自然筋。	胎土層は下層の赤土を多く含む(黄褐色)	内面は赤褐色(100%)、外面は赤褐色~黄褐色(100%)、口縁部は赤褐色(100%)
5	備前焼	播鉢	内径 0.8(0.4)	1/30程度厚の骨片。内面に幅約1.5cm程度の縦下目によるおろし目。口縁部外側に自然筋。	胎土層は下層の赤土を多く含む(黄褐色)	内面は赤褐色(100%)、外面は赤褐色~黄褐色(100%)、口縁部は赤褐色(100%)

第111図 SE255 出土遺物1(井戸掘方)(1/3・1/4)



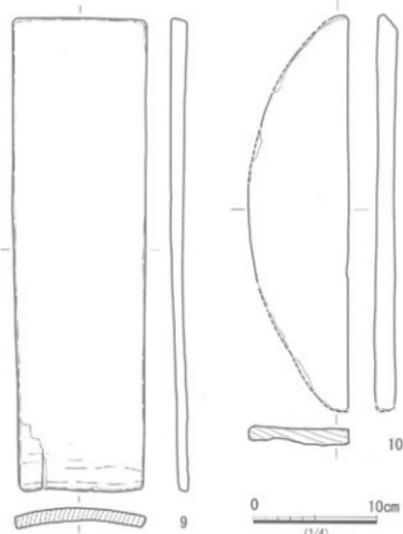
No.	種類	器種・部位	寸法 (cm)	形態・技法等の特徴	出土層の特徴	位置
5	木製土器	磁器・部位	径 10.0	1/4断面の破片。内側面ともヨコナギ。	1層(1)直下のSP250を多く含む。(表層)直下	1層(1)直下のSP250
6	木製土器	小笠(1)側面	径 10.0 高さ 1.0	1/4断面の破片。内外面ともヨコナギ。底面に縦目。口縁部に横目。	1層(1)直下のSP250をわずかに含む。(表層)直下	1層(1)直下のSP250
7	木製土器	小笠(1)側面	径 10.0 高さ 1.0	1/4断面の破片。内外面ともヨコナギ。底面に縦目。内側の口縁部に横目。	1層(1)直下のSP250をわずかに含む。(表層)直下	1層(1)直下のSP250
8	木製	筒状瓦 式3	外径 11.0 内径 9.0	右巻き山型文。横溝は、瓦当内側ナギ。	1層(1)直下のSP250をほぼ含む。(表層)直下	1層(1)直下のSP250

第112図 SE255 出土遺物 2(井戸内) (1/3・1/4)

のと思われる。木製遺物には木札、曲物の部材、箸などがある。9、10は桶の部材である。直径が40cmほどとなる桶で、同一個体の部材である可能性が高い。11は厚さ5mm程度のかんまりしっかりした木札で、表面に「古田源兵衛」の名前と年齢かと思われる「十七」、裏面に「か」と墨書されている。岡山藩藩学では、出欠の確認や修学の意味表示に名札を使用していたといひ、SP250 出土のもの(第103図52・53)を含めこうした名札である可能性がある。12は薄手の木札で、表面に「真弘力村」、裏面に「三文」の墨書がある。付け札の類であろう。13、14は曲物の底板である。13には「正 # □□目」と内容量を示すとみられる墨書がある。

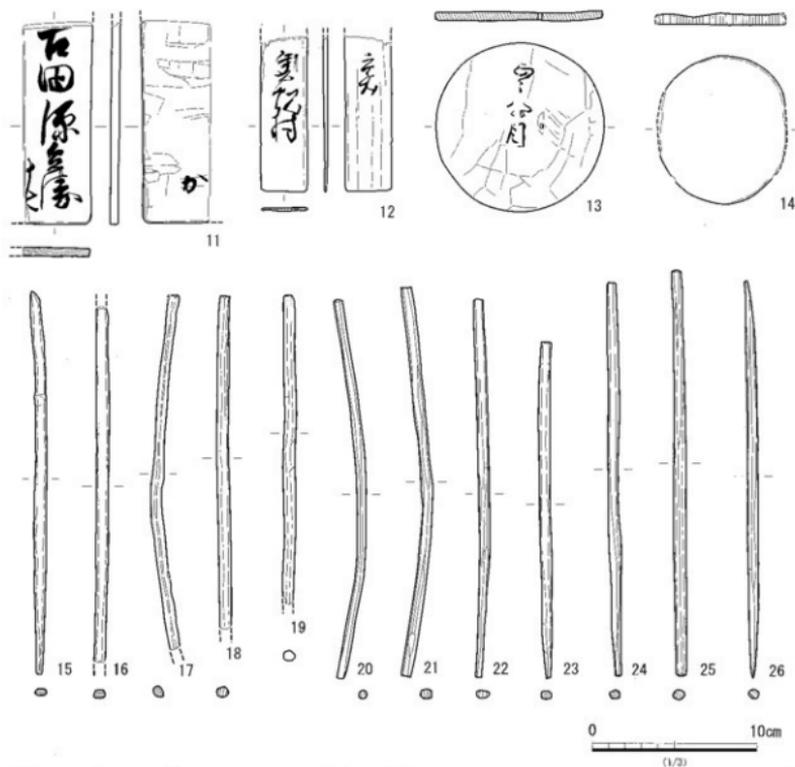
15～26は白木の箸である。図示したものの以外にも多量に出土している。完形のものはないが、太さはおおむね0.6～0.8cmで、長さは20cm前後の短いものと、24～25cmほどの長いものがあるようである。端部の加工も、基部から先端までほぼ同じ太さのもの(20・21・24・25)、先端を細くするもの(15・22・23)、両端を細くするもの(26)がある。

なお、出土遺物には時期を判断しうるのがほとんどないが、掘方出土遺物の年代観や十八世紀初頭以前は通路となっている部分であること、十八世紀後半以降に位置づけられるSP251に切られていることから、十八世紀前半～中頃に掘削されたものとみられる。廃絶



No.	種類	器種・部位	寸法 (cm)	形態・技法等の特徴	備考
9	木製土器	筒状瓦(側面)	長さ 38.0 径 10.0 高さ 1.0	右巻き山型文の破片。下縁部に横目。	
10	木製土器	筒状瓦(側面)	長さ 38.0 径 10.0 高さ 1.0	右巻き山型文の破片。	

第113図 SE255 出土遺物 3(井戸内) (1/4)



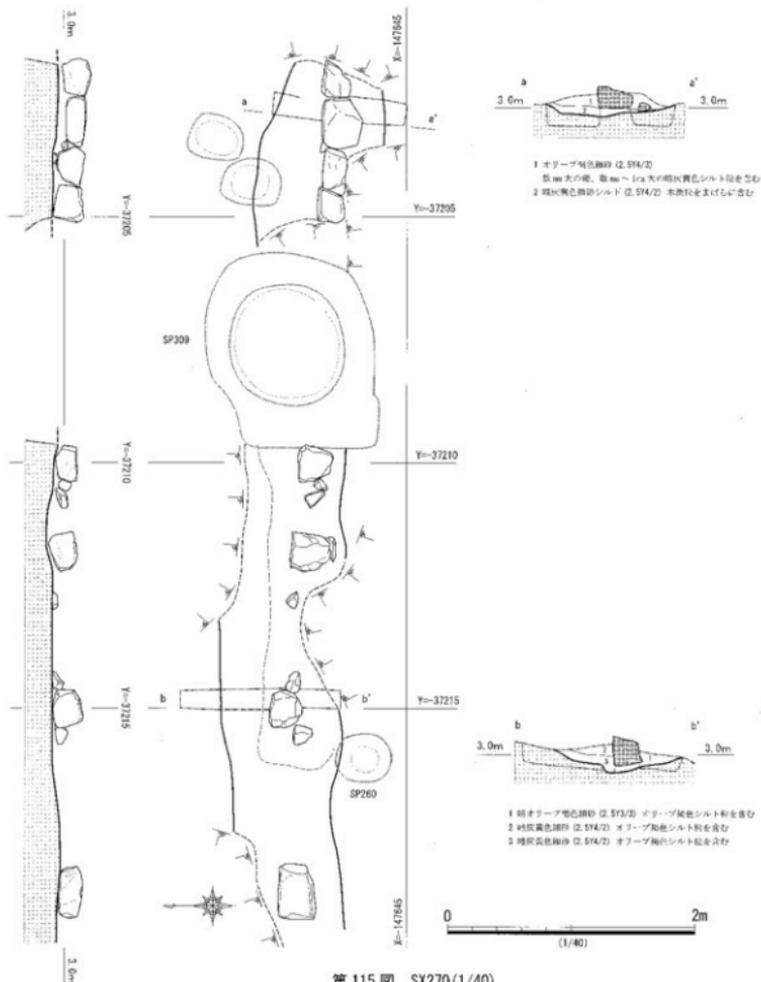
No	種類	素材・部位	法量(m)	形制・用途等の特徴	備考
21	木製品	木札	残存長 22.1 / 残存幅 0.3 / 厚さ 0.6	母正面のある板状。表面に「室町御願書」(十七)、裏に「あ」の墨書。	室町生徒の証札か
12	木製品	木札	残存長 7.5 / 幅 2.8 / 厚さ 0.9	表面に「貫伝」付。裏に「三文」の墨書。	
13	木製品	曲物部材(板)	全長 10.3 / 厚さ 0.6	ほぼ円形の曲げ物板状。裏面に「定丸」・「口」の墨書。	
14	木製品	曲物部材(板)	全長 9.0 / 幅 1.7 / 厚さ 0.7	略円形の曲げ物板状。	
15	木製品	白木箸	長さ 22.3 / 太さ 0.7	先端を細くする白木箸。	
16	木製品	白木箸	残存長 21.8 / 太さ 0.7	先端を細くする白木箸。	
17	木製品	白木箸	残存長 21.9 / 太さ 0.7	先端を細くする白木箸。	
18	木製品	白木箸	残存長 21.9 / 太さ 0.8	先端を細くする白木箸。	
19	木製品	白木箸	長さ 22.3 / 太さ 0.6	両端ともほぼ同じ太さの白木箸。	
20	木製品	白木箸	長さ 21.0 / 太さ 0.7	両端ともほぼ同じ太さの白木箸。	
21	木製品	白木箸	長さ 22.8 / 太さ 0.7	先端を細くする白木箸。	
22	木製品	白木箸	長さ 20.7 / 太さ 0.7	先端を細くする白木箸。	
23	木製品	白木箸	長さ 21.2 / 太さ 0.7	両端ともほぼ同じ太さの白木箸。	
24	木製品	白木箸	長さ 21.9 / 太さ 0.5	両端ともほぼ同じ太さの白木箸。	
25	木製品	白木箸	長さ 21.4 / 太さ 0.6	両端とも細くする白木箸。	
26	木製品	白木箸			

第 114 図 SE255 出土遺物 4(井戸内) (1/3)

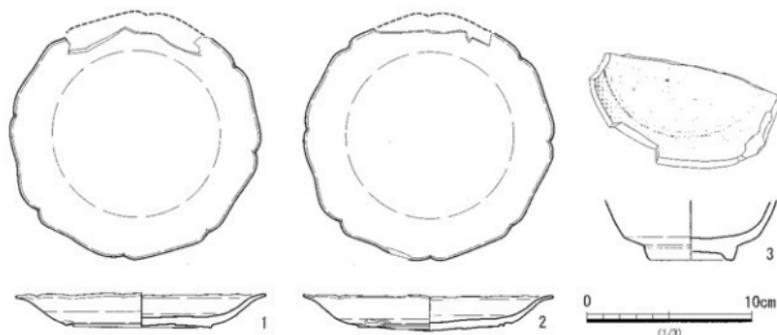
時期を限定するのはさらに難しいが、井戸内出土遺物のうち関西系の播鉢は十八世紀末以降に増加するといわれており、廃絶時期の一端を示す可能性が高い。

## SX270

SX270はX=-147645ライン付近、Y=-37207付近から-37214付近にわたり検出した石列である。石材の残りは悪く、特に西半部は石材が点在している状況だが、30～40cm大の花崗岩割石石材が北側に面をそろえて並べられている。溝状の掘方に設置されているようで、底面は標高2.85mから2.95m、石材の上面で標高3.1mから3.15mを測る。当時の生活面が標高3.2mから3.3m程度とすると、これらの石材はすべて地表下に隠れてしまうため、もとはもう何段か積み重ね、土塀などの基礎部分となっていたものとみられる。



第115図 SX270(1/40)

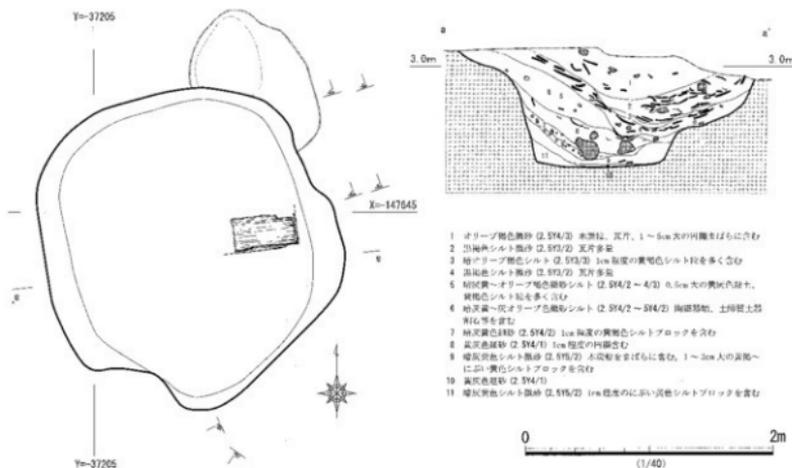


No.	種類	器種・部位	法量(Cm)	形状・強度等の特徴	胎土等の特徴	色調
1	肥前磁器	皿	直径 高さ 15.1 2.1	蛇の目高台の輪状花形皿。胎土原料別生粉割合、外面高台部より内面に大きなハリス支え痕。	(胎土)陶石 (胎土)砂	(胎土)赤褐色・灰白(DK/F) (胎土)灰白(DK/F)
2	肥前磁器	皿	直径 高さ 15.6 2.3	蛇の目高台の輪状花形皿。胎土量目部分地味赤。外面高台部より内面に大きなハリス支え痕。	(胎土)陶石 (胎土)灰石	(胎土)赤褐色・灰白(DK/F) (胎土)灰白(DK/F)
3	肥前染付磁器	椀	高台径 5.1	特徴不明に属するもの。高台と胎土別生粉割合、胎土に陶石多。	(胎土)陶石 (胎土)灰石	(胎土)赤褐色・灰白(DK/F)・F・DK/F (胎土)灰白(DK/F)

第116図 SX270出土遺物(1/3)

出土遺物は少ないが、掘方内、特に破却時の埋土と思われる部分から出土したものが多い。1、2は肥前磁器の花形皿で、蛇の目高台をもつ。高台量付部分を釉剥ぎしているにもかかわらず、外面高台脇の三方所に大きなハリ支え痕を持つ。3は肥前染付磁器の椀で、天目形もしくは筒形碗と思われる。高台に砂が付着しており、砂目積みであることがわかる。蛇の目高台や砂目積みなど十七世紀中頃までの製品にみられる特徴を備えている。

SX270は出土物の特徴から藩学が縮小する以前、十七世紀後半代の遺構とみられる。寛文期とされる藩学絵図ではこの付近に東西に長い建物が記載されており、北側の屋敷地との間に塀とみられる線が描かれている。位置からみてこの塀に相当するものである可能性が高い。

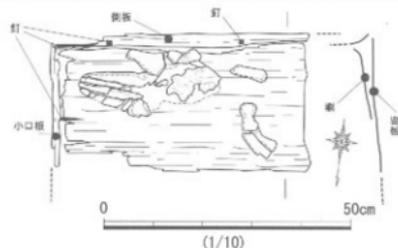


第117図 SP283(1/40)

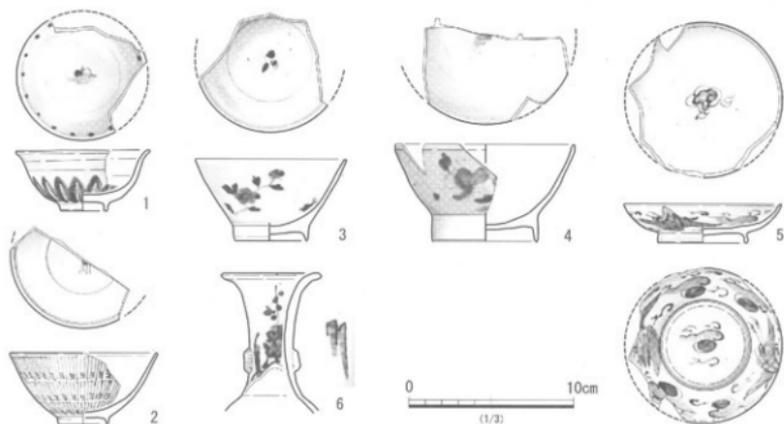
## SP283

SP283はX=-147645.0、Y=-37204.0付近で検出した大型の土坑である。直径約2.4m、深さ約0.95mを測る。埋土には多量の瓦片、花崗岩石材、陶磁器類が含まれ、ゴミの廃棄土坑とみられる。埋土の中程(第117図5層)からは木箱に納められた状態で獣骨が出土している(第118図)。木箱は旧西校舎基礎で壊されているため大きさなどはわからないが、幅約30cm、長さ約50cmが残る。木材の残存状況は悪いが、底板の上に側板を立て、小口板で挟む構造のようで、側板部分には先端を上に向け、小口板部分には先端を箱の内側に向けて釘が残存している。木質が二重に残る部分があり、蓋の痕跡と考えられる。獣骨も残りは良くないがスナメリと同定されており、標本などとして藩学に持ち込まれたものである可能性がある。

出土遺物は第117図の2層、4層、6層を中心に、含まれており、大部分は瓦片であった。第119図1～6は肥前染付磁器で、壺反形碗(1)、直線的

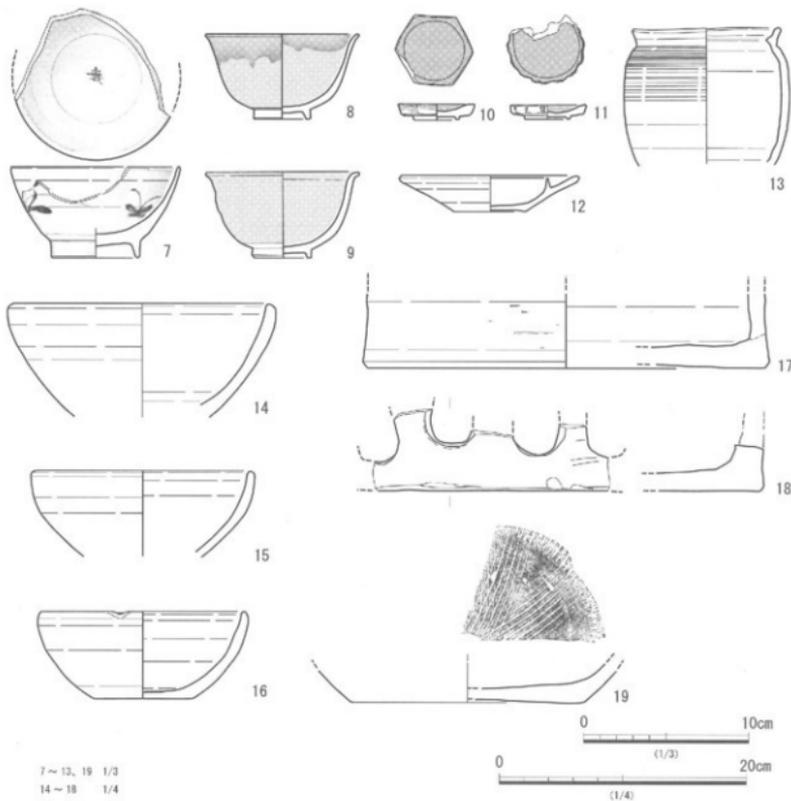


第118図 SP283 獣骨出土状況(1/10)



No.	種類	形状・様式	法 量 (cm)	形状・文様等の特徴	胎土等の特徴	色 派
1	肥前染付磁器	壺 口径 5.0 高さ 3.5	5.0 3.5	壺形碗。西面縁部有。外面は赤土色の染付文。内面は白土色の染付文。見込に野矢文。	胎土陶石 (陶磁) 貝母	(1) 壺形碗(式) 575/3-575/3 (陶磁) 既身
2	肥前染付磁器	壺 口径 4.9 高さ 3.5	4.9 3.5	壺形碗。口縁に壺。1/2幅程度の開口。赤土色の胎土。外面は赤土色の染付文。内面は白土色の染付文。見込に野矢文。	胎土陶石 (陶磁) 貝母	(1) 壺形碗(式) 580/3 (陶磁) 既身
3	肥前染付磁器	壺 口径 3.2 高さ 3.0	3.2 3.0	壺形碗。西面縁部有。外面は赤土。内面は白土色の染付文。見込に野矢文。	胎土陶石 (陶磁) 貝母	(1) 壺形碗(式) 580/3 (陶磁) 既身
4	肥前染付磁器	壺 口径 10.0 高さ 5.0	10.0 5.0	壺形碗。口縁に壺の範疇。赤土色の胎土。外面は赤土。内面は白土色の染付文。	胎土陶石 (陶磁) 既身	(1) 壺形碗(式) 580/3 (陶磁) 既身
5	肥前染付磁器	壺 口径 3.5 高さ 3.0	3.5 3.0	壺形碗。西面縁部有。外面は赤土。内面は白土色の染付文。	胎土陶石 (陶磁) 貝母	(1) 壺形碗(式) 580/3 (陶磁) 既身
6	肥前染付磁器	壺 口径 5.7 高さ 3.0	5.7 3.0	壺形碗。口縁に壺の範疇。赤土色の胎土。外面は赤土。内面は白土色の染付文。	胎土陶石 (陶磁) 貝母	(1) 壺形碗(式) 580/3 (陶磁) 既身

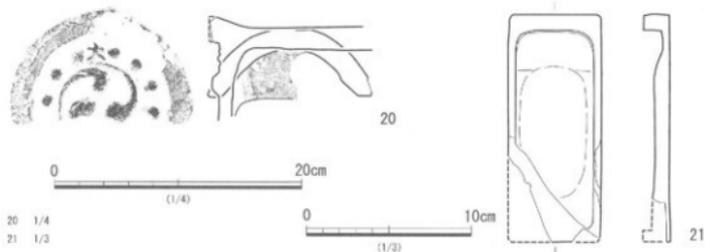
第119図 SP283出土遺物1(1/3)



7～13, 19 1/3  
14～18 1/4

No.	種類	整理・部位	法量(m)	形状・技法等の特徴	胎土等の特徴	色調
7	土器・滑り器? 通行磁器	面	口径 19.2 高さ 5.9	広底平縁, 西面縁部多少, 内面口の, 概々, 内面に白練内面 と見出し(焼付, 見出し文字).	(胎土)褐色 (練)白練	(焼)褐色・灰白(177/1-4)(18/1) (練)灰白(12, 108/1)
8	陶器系磁器	面	口径 9.2 高さ 5.2	磁気体, 西面縁部, 白練内面に緑釉, 12/16型の縦方向	(胎土)褐色 (練)白練	(焼)褐色・灰白(109/1); (内面)灰白(13, 109/1) (練)灰白(12, 108/1)
9	陶器系磁器	面	口径 9.0 高さ 3.3	平底碗, 高台型製成.	(胎土)褐色 (練)白練	(内)褐色・赤(177/1) (外)灰白(12, 108/1)
10	陶器系磁器	ミューア(底)	口径 9.8 高さ 1.7	平底碗(底)の底, 外周縁部～内面に緑釉.	(胎土)褐色 (練)白練	(外)褐色・赤(108/1) (練)褐色(108/1)
11	陶器系磁器	ミューア(底)	口径 6.8 高さ 1.4	底底の底, 白練内面～内面に緑釉.	(胎土)褐色 (練)白練	(外)褐色・赤(108/1) (練)褐色・赤(108/1)
12	土器	灯明臺	口径 15.7 高さ 2.2	口縁部より下の外周縁部, 内面より平子, 口縁部間に環状 溝.	(胎土)褐色 (練)白練	(焼)褐色・灰白(141/1); (内面)灰白(12, 107/1) (練)灰白(12, 108/1)
13	陶器	蓋(裏) 口縁部～内面	口径 6.7	口縁の内面～外面に塗上, 斜めにヒキメの表.	(胎土)褐色 (練)白練	(内面)褐色・赤(107/1) (外)褐色(107/1); (内面)褐色(107/1)
14	陶器	口縁部～内面	口径 12.0	口縁部より内面の縁部, 外面に「練り」.	(胎土)褐色 (練)白練	(胎土)褐色 (練)白練
15	陶器	口縁部～内面	口径 12.3	口縁部より内面の縁部, 内外面に「練り」.	(胎土)褐色 (練)白練	(外)褐色(12, 108/1) (内)褐色(12, 108/1)
16	陶器	口縁部	口径 15.0 高さ 2.2	1/4規格定の碗片, 内外面に「練り」.	(胎土)褐色 (練)白練	(胎土)褐色 (練)白練
17	陶器	大口平 底鉢	口径 33.0	1/4規格定の碗片, 外面は灰白色のヘキサゴナルのルアラ, 底に「練り」.	(胎土)褐色 (練)白練	(外)褐色(13, 108/1) (練)褐色(13, 108/1)
18	陶器	大口平 底鉢	口径 34.0	大口平底, 底周縁部に斜方向の溝がヒキメのルアラ, 内面は 褐色(13, 108/1), 見出し(13, 108/1).	(胎土)褐色 (練)白練	(外)褐色(13, 108/1) (練)褐色(13, 108/1)
19	陶器系 (土器)	蓋(裏) 口縁部	口径 13.0	斜方向に環状の縦溝, 見出し(13, 108/1)にヒキメのルアラ (13, 108/1, 13, 108/1).	(胎土)褐色 (練)白練	(外)褐色(13, 108/1); (内面)褐色(13, 108/1) (練)褐色(13, 108/1)

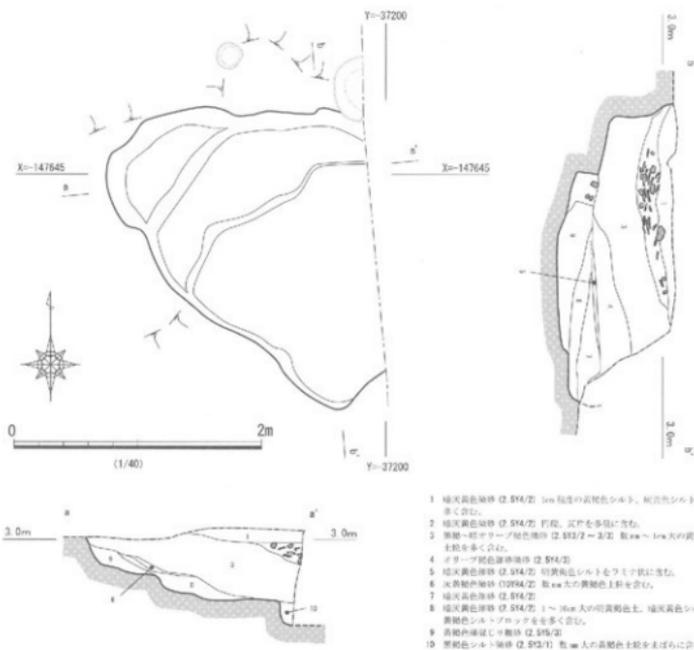
第120図 SP283出土遺物2(1/3・1/4)



品	種類	形状・部位	寸法(cm)	形状・技法等の特徴	出土等の特徴	色調
20	瓦	軒瓦式 瓦当	外径 11.0 瓦葺部厚さ 2.2	瓦葺き口に文。瓦文風の縁部に「人」の字。瓦当内面「聖土」の文字が下向きに多く残存。 [図説] 図19		青黄色(100%黄-5%) 黄褐色(100%黄-10%) 黄褐色(100%黄-10%)
21	瓦					黄褐色(100%黄-10%) 黄褐色(100%黄-10%)

第121図 SP283出土遺物3(1/3-1/4)

に開く碗(2)、広東形碗(3、4)を含む。第120図7は瀬戸・美濃系とみられる染付磁器の広東形碗、8、9は京焼系陶器の端反形碗である。13は小型、蓋付きの壺形の製品で塩壺とみられる。14～16は捏鉢で、外面にはいわゆる「繕摩」がかかっている。17は器壁が厚く、体部がほぼ垂直に立ち上がる大型品で、火鉢や匣鉢などの、さほど深くない器形になるものと思われる。18はやはり体部がほぼ垂直に立ち上がる大型品で、平面形が隅丸方形になるようである。体部下部に楕円形の透かし孔が連なっており、内面の底面にはいわゆる「牡丹餅」が認められるなどさほど深くない器形と



第122図 SP284(1/40)

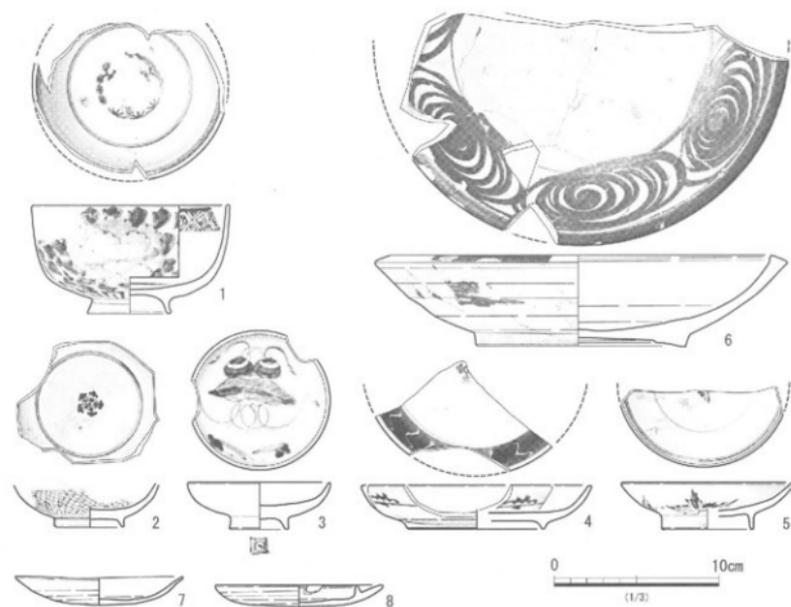
- 1 端反黄色磁器 径 514/2 1cm程度の黄褐色シロ土。灰白色シロ土を多く含む。
- 2 端反黄色磁器 径 514/2 円筒。灰白色を多く含む。
- 3 端反-紅土ワザブ黄色磁器 径 513/2～3/2 数cm～1cm程度の黄褐色土粒を多く含む。
- 4 オリーブ褐色磁器 径 514/2
- 5 端反黄色磁器 径 514/2 同黄褐色シロ土をフタに含む。
- 6 大形黄色磁器 径 514/2 数cm程度の黄褐色土粒を含む。
- 7 端反黄色磁器 径 514/2
- 8 端反黄色磁器 径 514/2 1～10cm程度の黄褐色土。端反黄色シロ土、黄褐色シロ土ブロックを多く含む。
- 9 黄褐色磁器 径 514/2 数cm程度の黄褐色土粒を多く含む。
- 10 黄褐色シロ土磁器 径 513/1 数cm程度の黄褐色土粒を多く含む。

みられ、<sup>ミカドシ</sup>匣鉢とみられる。19は播鉢底部の破片。体部の密なスリメが見込端で一旦止まっており、見込には放射状のスリメが施されている。関西系、特に明石産の播鉢と思われる。21は粘板岩製の礎で、長さ14.0cm、幅5.6cm、高さ1.6cmを測る。墨堂部分が使用により凹んでいる。なお、広東形碗や端反形碗を含んでおり、十九世紀前半に位置づけられる。

## SP284

SP284はX=147645.0、Y=37200.0付近に検出した土坑で、東側は調査区外に及んでいる。南北約2.3m、深さ約0.95mを測る。埋土上層(第122図2層)に瓦片などを多く含むほか炭化物や有機質を多く含む黒褐色土が厚く堆積しており(3層)、ゴミの廃棄土坑とみられる。

出土遺物は肥前産の染付磁器では、口縁部内面に四方棒文を描くもの(1)、見込に手描きの五弁花文を入れるもの(2)、コンニャク印判の五弁花文を入れるもの(3)などがある。6は瀬戸産の陶器大皿でい



No.	図 類	形状・部位	法 量 (cm)	形状・技法等の特徴	埋土等の特徴	出 産 地
1	肥前産付師磁器	碗	口径 11.5 高さ 4.7	丸形の丸底。高台付縁部。外面は胎土一面に牡丹文と見込に四方棒文。胎土層を施す。	胎土層が 良好	肥前産(肥前)白磁(2007/1) (出所)肥前(2007/1)
2	肥前産付師磁器	碗	口径 9.6 高さ 2.9	胎土層の破片。高台付縁部。高台付縁部が手描き。内面は色紙刷上(完成済)。高台内に漆葉菊の文様。	胎土層が 良好	肥前産(肥前)白磁(2007/1) (出所)肥前(2007/1)
3	肥前産付師磁器	皿	口径 11.8 高さ 2.8	高台付縁部。高台付縁部。内面はコンニャク印判で「印」の字状の文様と見込に五弁花文。	胎土層が 良好	肥前産(肥前)白磁(2007/1) (出所)肥前(2007/1)
4	肥前産付師磁器	皿	口径 10.4 高さ 2.9	高台付縁部。高台付縁部。内面見込にも同様の文様あり。	胎土層が 良好	肥前産(肥前)白磁(2007/1) (出所)肥前(2007/1)
5	肥前産付師磁器	大皿(湯の目皿)	口径 21.2 高さ 5.5	丸形の丸底。「湯の目」文。高台付縁部。内面は胎土一面に牡丹文の文様を施す。見込に牡丹文。	胎土層が 良好	肥前産(肥前)白磁(2007/1) (出所)肥前(2007/1)
6	瀬戸産付師陶器	大皿(湯の目皿)	口径 19.0 高さ 1.4	丸形の丸底。「湯の目」文。高台付縁部。内面は胎土一面に牡丹文の文様を施す。見込に牡丹文。	胎土層が 良好	肥前産(肥前)白磁(2007/1) (出所)肥前(2007/1)
7	備前	灯明籠	口径 10.3 高さ 1.6	丸形の丸底。高台付縁部。高台付縁部が手描き。内面は色紙刷上(完成済)。高台内に漆葉菊の文様。	胎土層が 良好	肥前産(肥前)白磁(2007/1) (出所)肥前(2007/1)
8	備前	小皿(灯明籠)	口径 10.3 高さ 1.6	丸形の丸底。高台付縁部。高台付縁部が手描き。内面は色紙刷上(完成済)。高台内に漆葉菊の文様。	胎土層が 良好	肥前産(肥前)白磁(2007/1) (出所)肥前(2007/1)

第123図 SP284出土遺物(1/3)

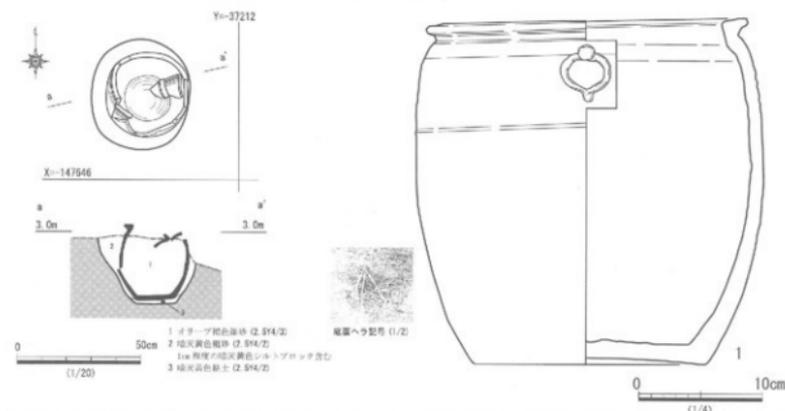
いわゆる「馬の目皿」と呼ばれるものである。

SP284は出土遺物、特に瀬戸・馬の目皿の存在から、十九世紀前半頃のものと思われる。

### SP290

SP290はX=-147646.2、Y=-37212.4付近で検出した径40cmほどの土坑である。中に甕一個体を納めており、甕内にはネコとみられる獣骨がはいっていた。甕は備前焼で、口縁部と底部の径がほとんど変わらず胴部や肩の張りの少ない筒状のもので、全面に塗土を施し赤褐色に発色している。底部には「木」の字とみられるヘラ記号がある。塗土の一般化する十八世紀中頃以降の製品とみられる。

SP290の位置は、十八世紀初頭以降、藩学の北限付近にあたっている。ネコの骨以外も入れられていないことからネコを埋葬したものである可能性が高い。



№	種類	基層・部位	深さ(cm)	形態・技法等の特徴	出土等の特徴	色調
1	遺構	底	1層 25.3 2層 28.2 3層 28.2	1 縁部はコナダ、15cm×15cmほど。特に、縁部はコナダの目が深く彫り込まれている。中央に「木」の字とみられるヘラ記号を施す。2 縁部はコナダ、15cm×15cmほど。特に、縁部はコナダの目が深く彫り込まれている。中央に「木」の字とみられるヘラ記号を施す。3 縁部はコナダ、15cm×15cmほど。特に、縁部はコナダの目が深く彫り込まれている。中央に「木」の字とみられるヘラ記号を施す。	〔1層〕15cm以下の砂を多く含む。〔2層〕灰質。〔3層〕灰質。	〔1層〕赤褐色(100%)。〔2層〕赤褐色(100%)。〔3層〕赤褐色(100%)。〔4層〕赤褐色(100%)。〔5層〕赤褐色(100%)。

第124図 SP290(1/20)と出土遺物(1/4)

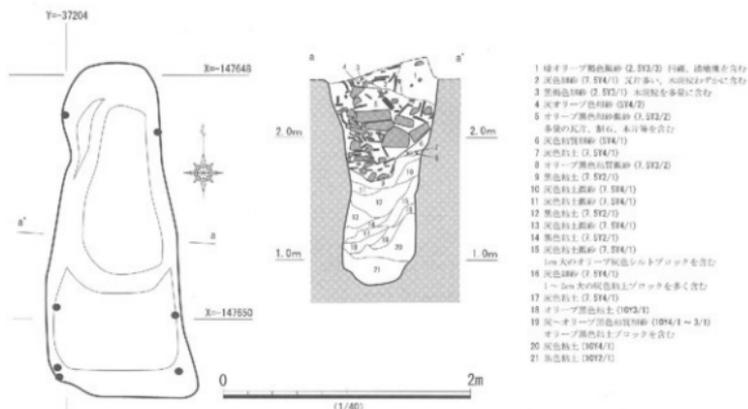
### SP294

SP294はX=-147649、Y=-37204付近に所在する長さ約2.7m、幅約1.2m程度の隅丸長方形の土坑である。南端部以外は旧西校舎基礎により上部を失っている。底面は南側1/3程度が標高約2.3mと検出面からの深さ約0.9m程度なのに対し、北側2/3は標高約0.8m、深さ約2.4mほど掘削されている。土坑の長辺側に三対の杭が打たれており、なんらかの上部構造に関係するものと思われる。埋土は上部が漆喰塊、豊島石石材片、瓦片、陶磁器類を多量に含む砂質土で、麓絶時に埋め戻された土層と考えられるのに対し、下部には非常に粘質の強い灰色～黒色土が堆積しており、使用されていた段階で堆積した土層と考えられる。

上部に多量に含まれる漆喰塊は、厚さ8～10cm、高さ20cm前後の壁体状のもので、平面形が直線的な破片と円弧を描く破片がある。胎土

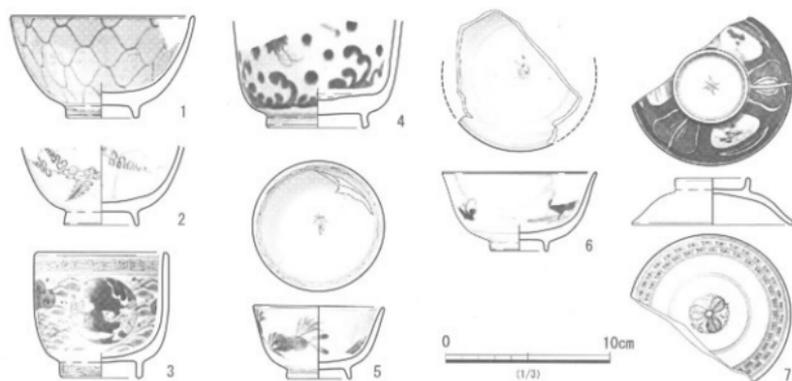


写真12 SP294出土漆喰塊



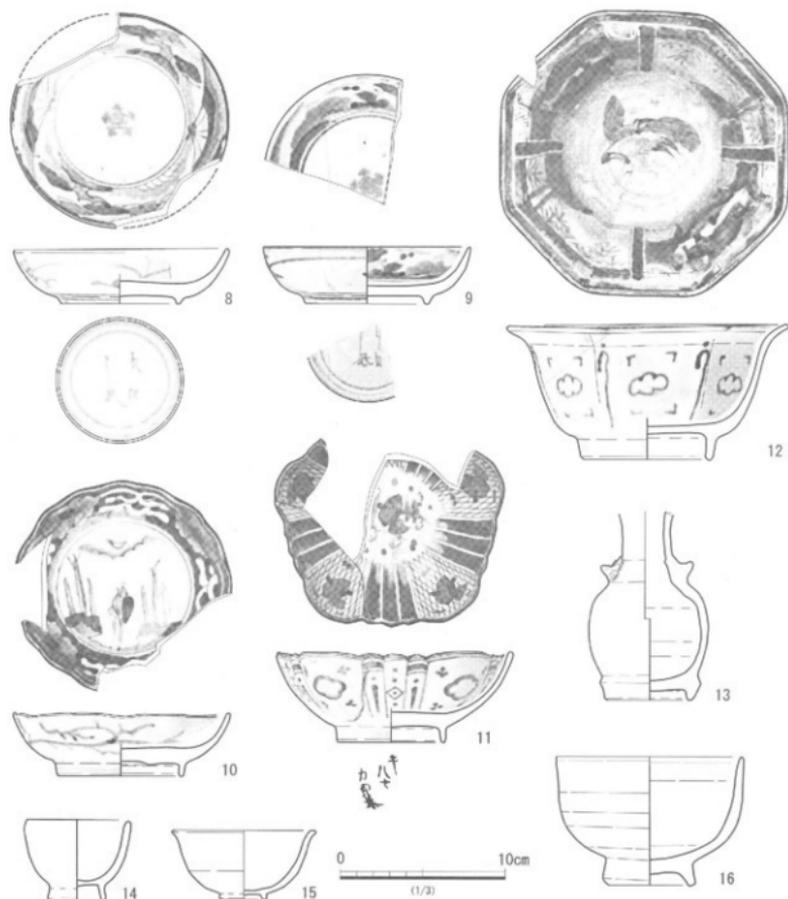
第125図 SP294(1/40)

は浅黄色(2.5Y7/3~5Y7/4)で、5mm以下の砂粒を多量に含んでいる。表面は灰白色(2.5Y8/1~5Y8/1)の化粧土が塗られている。内面下部には幅8cm前後にわたって、底の割れた痕跡があり、大きさは不明だが、元は長楕円形もしくは隅丸長方形の水槽状のものであったと考えられる。SP294の上部構造に関係するものである可能性もある。



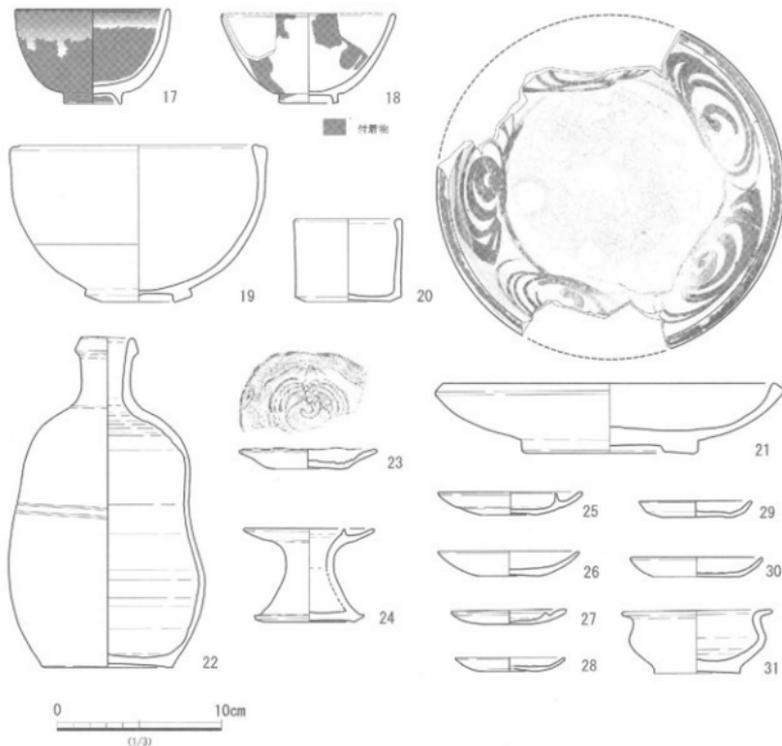
順	種類	器種・部位	寸法(cm)	胎土・顔料等の特徴	化粧土の特徴	色調
1	肥後染付磁器	碗	口径 11.1 高さ 6.3	灰胎土、褐色胎土、赤土を多量に含む。赤土を多量に含む。	灰胎土 (2.5Y8/1~5Y8/1)	(胎) 褐色胎土 (2.5Y7/3~5Y7/4) (胎) 赤土 (2.5Y8/1~5Y8/1)
2	肥後染付磁器	碗	口径 6.6	灰胎土、褐色胎土、赤土を多量に含む。赤土を多量に含む。	灰胎土 (2.5Y8/1~5Y8/1)	(胎) 褐色胎土 (2.5Y7/3~5Y7/4) (胎) 赤土 (2.5Y8/1~5Y8/1)
3	肥後染付磁器	碗	口径 9.2 高さ 7.7	灰胎土、褐色胎土、赤土を多量に含む。赤土を多量に含む。	灰胎土 (2.5Y8/1~5Y8/1)	(胎) 褐色胎土 (2.5Y7/3~5Y7/4) (胎) 赤土 (2.5Y8/1~5Y8/1)
4	肥後染付磁器	碗	口径 6.2 高さ 5.1	灰胎土、褐色胎土、赤土を多量に含む。赤土を多量に含む。	灰胎土 (2.5Y8/1~5Y8/1)	(胎) 褐色胎土 (2.5Y7/3~5Y7/4) (胎) 赤土 (2.5Y8/1~5Y8/1)
5	肥後染付磁器	碗	口径 9.2 高さ 5.5	灰胎土、褐色胎土、赤土を多量に含む。赤土を多量に含む。	灰胎土 (2.5Y8/1~5Y8/1)	(胎) 褐色胎土 (2.5Y7/3~5Y7/4) (胎) 赤土 (2.5Y8/1~5Y8/1)
6	肥後染付磁器	碗	口径 9.2 高さ 4.6	灰胎土、褐色胎土、赤土を多量に含む。赤土を多量に含む。	灰胎土 (2.5Y8/1~5Y8/1)	(胎) 褐色胎土 (2.5Y7/3~5Y7/4) (胎) 赤土 (2.5Y8/1~5Y8/1)
7	肥後染付磁器	碗	口径 9.8 高さ 5.2	灰胎土、褐色胎土、赤土を多量に含む。赤土を多量に含む。	灰胎土 (2.5Y8/1~5Y8/1)	(胎) 褐色胎土 (2.5Y7/3~5Y7/4) (胎) 赤土 (2.5Y8/1~5Y8/1)

第126図 SP294出土遺物1(1/3)



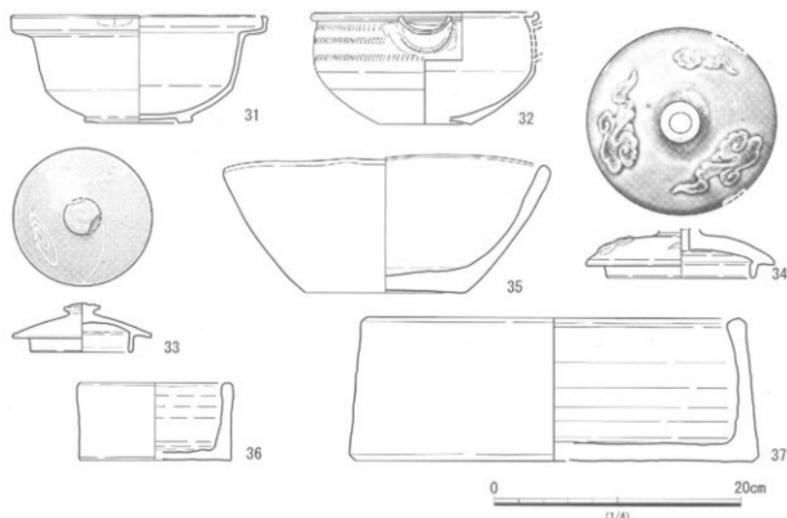
No.	種類	器種・部位	寸法(mm)	胎体・装束等の特徴	出土等の特徴	色 数
8	肥後赤付碗	皿	口径 13.2 高さ 3.1	赤付碗の破片。外面に磨石。内面に紅土。胴子。裏面にワシキタ印模にシテ赤土研末。赤付内底面平丸。	陶土(陶片)片	1(陶土)赤付碗(1976/9)・1976/13 (伊勢)美田(1976/9)・1976/13
9	肥後赤付碗	皿	口径 12.40 高さ 3.9	1)白磁の破片。赤付碗の破片。赤付碗の破片。内面に草花文。裏面にワシキタ印模による草花文。内面に赤土研末。	陶土(陶片)片	1(陶土)赤付碗(1976/9)・1976/13 (伊勢)美田(1976/9)・1976/13
10	肥後赤付碗	皿	口径 15.2 高さ 3.8	肥後赤付碗の破片。内面に草花文。内面に草花文。裏面にワシキタ印模による草花文。内面に赤土研末。	陶土(陶片)片	1(陶土)赤付碗(1976/9)・1976/13 (伊勢)美田(1976/9)・1976/13
11	肥後赤付碗	皿	口径 11.2 高さ 3.6	肥後赤付碗の破片。破片あり。内面に草花文。内面に草花文。裏面にワシキタ印模による草花文。内面に赤土研末。	陶土(陶片)片	1(陶土)赤付碗(1976/9)・1976/13 (伊勢)美田(1976/9)・1976/13
12	肥後赤付碗	皿	口径 18.1 高さ 3.5	丸形碗の破片。赤付碗の破片。赤付碗の破片。内面に草花文。内面に草花文。裏面にワシキタ印模による草花文。内面に赤土研末。	陶土(陶片)片	1(陶土)赤付碗(1976/9)・1976/13 (伊勢)美田(1976/9)・1976/13
13	肥後赤付碗	皿	口径 15.2 高さ 3.8	肥後赤付碗の破片。破片あり。内面に草花文。内面に草花文。裏面にワシキタ印模による草花文。内面に赤土研末。	陶土(陶片)片	1(陶土)赤付碗(1976/9)・1976/13 (伊勢)美田(1976/9)・1976/13
14	肥後赤付碗	皿	口径 11.2 高さ 3.6	肥後赤付碗の破片。破片あり。内面に草花文。内面に草花文。裏面にワシキタ印模による草花文。内面に赤土研末。	陶土(陶片)片	1(陶土)赤付碗(1976/9)・1976/13 (伊勢)美田(1976/9)・1976/13
15	肥後赤付碗	皿	口径 11.2 高さ 3.6	肥後赤付碗の破片。破片あり。内面に草花文。内面に草花文。裏面にワシキタ印模による草花文。内面に赤土研末。	陶土(陶片)片	1(陶土)赤付碗(1976/9)・1976/13 (伊勢)美田(1976/9)・1976/13
16	肥後赤付碗	皿	口径 11.2 高さ 3.6	肥後赤付碗の破片。破片あり。内面に草花文。内面に草花文。裏面にワシキタ印模による草花文。内面に赤土研末。	陶土(陶片)片	1(陶土)赤付碗(1976/9)・1976/13 (伊勢)美田(1976/9)・1976/13

第127図 SP294出土遺物2(1/3)



No.	種類	形状・部材	法 量(単位)	形状・技法等の特徴	出土層の階層	出 所
17	器(茶碗)	碗	口径 45.3 高さ 5.5	口縁角張りの碗形。火石色の土質。全周に鉄線。口縁部から体下部までの外表面に有角状の鉄線。内面鉄線あり。	【階】7.0m, 8m以下の4階層を多く含む 【出土層】良好	【階】5階層・6階層(1000/2) 【出土層】良好(1000/1~2, 1000/3)
18	器(茶碗)	碗	口径 38.0 高さ 5.3	口縁角張りの碗形。高台無縁。内面から外面の一週に鉄線のワタシ状の装飾。縁部には鉄線のための気孔を空けている。	【階】2中・4中・5階層 【出土層】良好	【階】6.5m層・6.5m層(1000/1~3) / 【出土層】良好(1000/1~2, 1000/3)
19	器(茶碗)	鉢	口径 55.0 高さ 9.5	口縁角張りの碗形の器。高台下半～高台部無縁。内面鉄線と瓦葺込に有角のワタシ状の鉄線。	【階】5中・6中・7中・8中 【出土層】良好	【階】6.5m層・6.5m層(1000/1~3) 【出土層】良好(1000/1~3, 1000/3)
20	器(茶碗)	小碗	口径 23.0 高さ 3.5	口縁角張りの碗形。高台無縁。鉄線あり。	【階】2中・4中・5階層 【出土層】良好	【階】6.5m層・6.5m層(1000/1~3) 【出土層】良好(1000/1~3, 1000/3)
21	器(皿)	大皿	口径 58.0 高さ 5.5	縁部角張りの大皿。高台無縁。鉄線あり。	【階】2中・4中・5階層 【出土層】良好	【階】6.5m層・6.5m層(1000/1~3) 【出土層】良好(1000/1~3, 1000/3)
22	器(瓶)	瓶	口径 21.0 高さ 45.0	高台無縁。口縁に鉄線あり。	【階】2中・4中・5階層 【出土層】良好	【階】6.5m層・6.5m層(1000/1~3) 【出土層】良好(1000/1~3, 1000/3)
23	器(皿)	小皿	口径 15.0 高さ 3.5	縁部角張りの小皿。高台無縁。鉄線あり。	【階】2中・4中・5階層 【出土層】良好	【階】6.5m層・6.5m層(1000/1~3) 【出土層】良好(1000/1~3, 1000/3)
24	器(鉢)	鉢	口径 25.0 高さ 5.5	口縁角張りの鉢形。高台無縁。鉄線あり。	【階】2中・4中・5階層 【出土層】良好	【階】6.5m層・6.5m層(1000/1~3) 【出土層】良好(1000/1~3, 1000/3)
25	器(皿)	小皿	口径 15.0 高さ 3.5	縁部角張りの小皿。高台無縁。鉄線あり。	【階】2中・4中・5階層 【出土層】良好	【階】6.5m層・6.5m層(1000/1~3) 【出土層】良好(1000/1~3, 1000/3)
26	器(皿)	小皿	口径 15.0 高さ 3.5	縁部角張りの小皿。高台無縁。鉄線あり。	【階】2中・4中・5階層 【出土層】良好	【階】6.5m層・6.5m層(1000/1~3) 【出土層】良好(1000/1~3, 1000/3)
27	器(皿)	小皿	口径 15.0 高さ 3.5	縁部角張りの小皿。高台無縁。鉄線あり。	【階】2中・4中・5階層 【出土層】良好	【階】6.5m層・6.5m層(1000/1~3) 【出土層】良好(1000/1~3, 1000/3)
28	器(皿)	小皿	口径 15.0 高さ 3.5	縁部角張りの小皿。高台無縁。鉄線あり。	【階】2中・4中・5階層 【出土層】良好	【階】6.5m層・6.5m層(1000/1~3) 【出土層】良好(1000/1~3, 1000/3)
29	器(皿)	小皿	口径 15.0 高さ 3.5	縁部角張りの小皿。高台無縁。鉄線あり。	【階】2中・4中・5階層 【出土層】良好	【階】6.5m層・6.5m層(1000/1~3) 【出土層】良好(1000/1~3, 1000/3)
30	器(皿)	小皿	口径 15.0 高さ 3.5	縁部角張りの小皿。高台無縁。鉄線あり。	【階】2中・4中・5階層 【出土層】良好	【階】6.5m層・6.5m層(1000/1~3) 【出土層】良好(1000/1~3, 1000/3)
31	器(鉢)	小鉢	口径 25.0 高さ 5.5	口縁角張りの鉢形。高台無縁。鉄線あり。	【階】2中・4中・5階層 【出土層】良好	【階】6.5m層・6.5m層(1000/1~3) 【出土層】良好(1000/1~3, 1000/3)

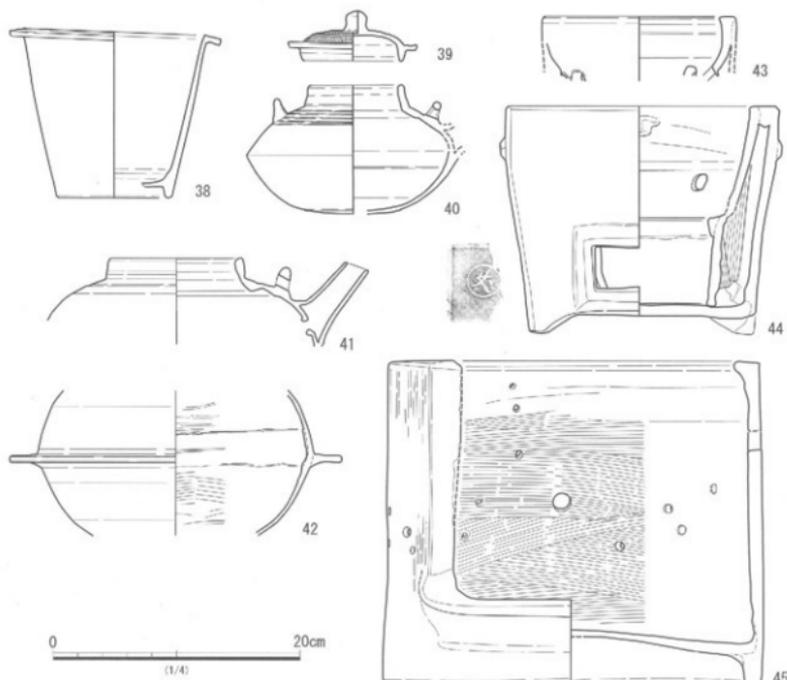
第128図 SP294出土遺物3(1/3)



No.	種類	器種・部位	寸法(cm)	形態・技法等の特徴	胎土等の特徴	色 派
31	磁器高脚器	鉢	口径 21.0 高さ 8.9	高台部彫刻、口縁部は彫刻、底面はハリス文彫刻あり。	(胎土) 2cm以下74%程度を多く含む(焼成)良好	(釉)透明釉・オリーブグリーン・オリーブ黄(37)・白(37)・伊勢産(白)(37)
32	磁器高脚器	行平鍋	口径 18.1 高さ 9.3	外周は縁線から体部と平に接し、内面口縁部より下、流石内面に透彫刻、外周体部上半に透彫(横キナリ)。	(胎土) 良好 (焼成) 良好	(釉)透明釉・オリーブ黄(37)・白(37)に広い高脚部(37)・伊勢産(白)(37)・伊勢産(白)(37)
33	磁器高脚器	蓋	最大径 11.3 高さ 3.9	上面に透彫刻、白色釉を施すようにして朝気彫、高脚部は透彫刻。	(胎土) 2cm以下の砂粒を多く含む(焼成)良好	(釉)透明釉・黄緑(37)・白(37)に広い高脚部(37)・伊勢産(白)(37)
34	磁器高脚器	蓋	最大径 11.7 高さ 5.1	上面に透彫刻、蓋など透彫、高脚部は透彫刻、縁り付の産生(生身)。	(胎土) 砂粒多し、2cm以下の砂粒を多く含む(焼成)良好	(釉)透明釉・オリーブ黄(37)・白(37)・伊勢産(白)(37)
35	磁器	鉢	口径 27.0 高さ 11.3	半皿に焼土。	(胎土) 2cm以下の砂粒を多く含む(焼成)良好	(釉)白(37)・伊勢産(白)(37)・伊勢産(白)(37)・伊勢産(白)(37)
36	磁器	鉢	口径 12.5 高さ 6.5	口縁部1/3深角彫の透彫。	(胎土) 2cm以下の砂粒を多く含む(焼成)良好	(釉)白(37)・伊勢産(白)(37)・伊勢産(白)(37)・伊勢産(白)(37)
37	磁器	鉢	口径 31.25 高さ 11.7	口縁部1/3深角彫の透彫、内外面に赤土、底面ハリス文彫刻あり、口縁部ハリス文彫刻あり、内面透彫(横キナリ)。	(胎土) 2cm以下の砂粒を多く含む(焼成)良好	(釉)白(37)・伊勢産(白)(37)・伊勢産(白)(37)・伊勢産(白)(37)

第129図 SP294出土遺物4(1/4)

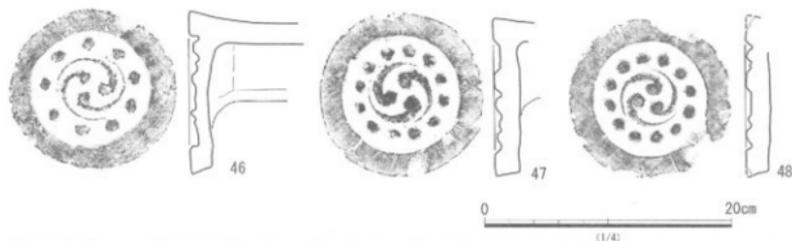
出土遺物は陶磁器類のほか瓦質土器、瓦類がある。第126図1～第127図13は肥前産の磁器である。1は外面に網文を染付する丸碗で、高台に砂が付着しており砂目積みであることがわかる。4は筋丸碗としているが、やや大形で内面下部が無軸となっており、火入などの器種の可能性が高い。5、6は端反形碗である。8、9は外面に唐草文を描く皿であり、見込にコンニャク印判による五弁花文を入れている。10は花形の皿で、蛇の目凹形高台を持つ。11の花形鉢には焼継があり、判読できないが、高台内に焼継印がある。18は京焼系(信楽か)の碗であるが、軸表面が被熱のためか光沢を失っており、内面に赤褐色、ガラス質の滓状の付着物がある。これは外面側にも流れ落ちるように付着している。滓状の物質については分析等行っていないため不明だが、融点の低い焼継材のようなものを溶かしたものかもしれない。21は瀬戸産の大皿で、いわゆる「馬の目皿」と呼ばれるものである。23は備前焼の型押し成形の小皿で、亀の形態のものである。頭、前足、後ろ足の表現があり、非常に不明瞭だが地紋風に亀甲文が入られている。中央には鶴を表現している。24～30は灯明台、灯明皿で、24～26が信楽産、27、28が備前焼、29、30が土師質土器である。31は信楽産と見られる鉢、32はやはり信楽産の行平鍋である。33はSP250などで出土している土瓶(第101図35、36)などの蓋、34は同じく第101図38のような鉢状の容器の蓋と見られる。35は備前焼の握鉢、36、37は備前焼の圓鉢である。



No.	種類	器種・形状	高さ(cm)	胎土・製造等の特徴	胎土等の特徴	色 調
38	浅鉢・平口深鉢	灰木鉢	口径 13.5 高さ 13.8	無施。口縁部から内面に至る。	(胎土)粘質中や硬質 (胎色)白灰	(外面)白灰・緑黄緑(口)・内面に白灰・赤褐色 (内面)白灰・赤褐色(口縁部)に白灰・赤黄緑
39	瓦質土器	壺	最大径 6.1 口径 5.1	土質中硬。	(胎土)粘質弱。0.5cm以下の砂粒を多く含む(胎色)黄緑	(外面)黄緑(口縁部)に白灰・赤褐色 (内面)白灰・赤褐色(口縁部)に白灰・赤褐色
40	瓦質土器	土瓶	最大径 17.2 口径 13.5	胎土粘質。外面はキラコ。胎土上部は約半1時。全体の胎土は黄緑色に塗られ、外面は一段階色の比較的均一な赤灰～暗紫灰色に着色。	(胎土)0.5cm以下の砂粒を多く含む(胎色)黄緑	(外面)黄緑(口縁部) (内面)白灰・赤褐色(口縁部)に白灰・赤褐色
41	瓦質土器	土瓶	口径 10.5 残高 7.5	胎土粘質。内口縁部は黄緑。外面はキラコ。内面は土質ナツ。	(胎土)粘質弱。2cm以下の砂粒を多く含む(胎色)黄緑	(外面)黄緑(口縁部)に白灰・赤褐色(内面)黄緑(口縁部)に白灰・赤褐色
42	瓦質土器	煎茶	最大径 27.0	薄胎の丸筒状の煎茶。外面はキラコ。内面は黄緑。胎土上部は約半1時。全体の胎土は黄緑色に塗られ、外面は一段階色の比較的均一な赤灰～暗紫灰色に着色。	(胎土)0.5cm以下の砂粒を多く含む(胎色)黄緑	(外面)黄緑(口縁部)に白灰・赤褐色(内面)黄緑(口縁部)に白灰・赤褐色
43	瓦質土器	煎茶	口径 12.3 高さ 6.1	胎土粘質。胎土上部は約半1時。全体の胎土は黄緑色に塗られ、外面は一段階色の比較的均一な赤灰～暗紫灰色に着色。	(胎土)0.5cm以下の砂粒を多く含む(胎色)黄緑	(外面)黄緑(口縁部)に白灰・赤褐色(内面)黄緑(口縁部)に白灰・赤褐色
44	瓦質土器	輪切煎茶	口径 22.3 高さ 18.8	胎土粘質。胎土上部は約半1時。全体の胎土は黄緑色に塗られ、外面は一段階色の比較的均一な赤灰～暗紫灰色に着色。	(胎土)0.5cm以下の砂粒を多く含む(胎色)黄緑	(外面)黄緑(口縁部)に白灰・赤褐色(内面)黄緑(口縁部)に白灰・赤褐色
45	瓦質土器	煎茶	口径 30.0 高さ 26.6	胎土粘質。胎土上部は約半1時。全体の胎土は黄緑色に塗られ、外面は一段階色の比較的均一な赤灰～暗紫灰色に着色。	(胎土)0.5cm以下の砂粒を多く含む(胎色)黄緑	(外面)黄緑(口縁部)に白灰・赤褐色(内面)黄緑(口縁部)に白灰・赤褐色

第130図 SP294出土遺物5(1/4)

第130図39～45には瓦質土器類をあけている。39～41は土瓶とその蓋である。外面にはキラコが施されており、熱を受けて光沢のある青灰～暗紫灰色に変色した部分がある。43は小片ではあるが、平面円形で体部が二重構造となつた小型の焜炉で、煎茶道用の涼炉とみられる。44は平面方形で体部が二重構造の焜炉で、牛鍋の普及とともに広まったといわれるいわゆる「鍋物焜炉」である。内側の体部内面上部に鍋などを支える突起が二カ所に認められ、もとは三カ所に貼り付けられていたとみられる。外面の上面に○に火(?)の刻印がある。45は置竈である。体部に径0.5cm程度と径1cm程度の円孔を多数



No.	種類	形状・部位	流量(cm)	形態・装束等の特徴	出土等の特徴	出 処
06	軒丸瓦 式付	外径 13.7 文部館蔵瓦丁		右巻き三巴文、棟文取付。瓦当内縁ナゲ。瓦当部は内縁の内側にも和紙工法による粉土。	[図131]06a) 下の縁部を塗り付けたらに塗む(陶地)瓦知	(内)外館址(式～式)133(9)～7, 137(1)(準備)式付～式(1, 137(1)～6(1))
07	軒丸瓦 式付	外径 12.9 文部館蔵瓦丁		右巻き三巴文、棟文取付。瓦当内縁ナゲ。瓦当部にキラコ。	[図131]07a) 下の縁部を塗り付けたらに塗む(陶地)瓦知	(内)外館址(式～式)133(1)(9)～5, 137(1)(準備)式付(1, 137(1))
08	軒丸瓦 式付	外径 13.1 文部館蔵瓦丁		右巻き三巴文、棟文取付。瓦当内縁ナゲ。瓦当部にキラコ。	[図131]08a) 下の縁部を塗り付けたらに塗む(陶地)瓦知	(内)外館址(式～式)133(9)～5, 137(1)(準備)式付(1, 137(1))

第131図 SP294出土遺物6(1/4)

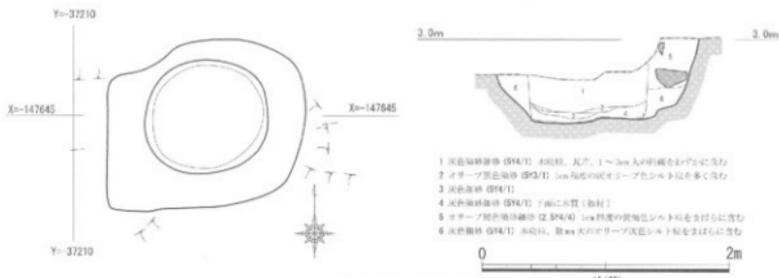
あけている。第131図46～48は軒丸瓦である。47, 48は瓦当面に「キラコ」を塗布するもので、巴や唐草の表現が太く、陵が鋭く、珠文も大きい。

SP294は、焼窯のある鉢(11)、馬の目皿(21)、キラコを塗布した瓦(47, 48)などの存在から十九世紀代に埋められたものとみられる。機能については、縮小後の藩学絵図の中にこの付近に浴室や厩の記載があるものがあり、これらに関係する遺構の可能性が考えられる。しかし、便槽としては肥の利用なども考えと深すぎずのものであり、通常の桶などを入れるものと構造も大きく異なっている。上部構造も失われていることから不明といわざるを得ない。

## SP309

SP309はX=147645, Y=372109付近に所在する土坑である。SX270を切って掘られており、上部は旧西校舎基礎により大きく壊されている。径約1.5mのほぼ円形で、底面の標高は2.32～2.36m。掘り込まれた面の標高が3.2m程度とすると、深さは90cm前後ということになる。底面に桶の底板とみられる木質がわずかに残っており、側板はほとんど残っていないが、土層断面では掘方埋土(第132図5～6層)と桶内の埋土(1～4層)に分層することができる。桶は直径95cm程度のもので、立ち上がりについては40cm程までは観察できるが、それ以上については不明である。

出土遺物は瓦類、染付磁器などがあるが、少量かつ破片である。いずれも桶内の埋土から出土している(第133図)。1, 2は肥前産染付磁器の皿。3は同じく肥前産染付磁器の筒形碗で、口縁部内面に四方摩文を廻らしている。4は平面が方形になる小形の瓶類で、肥前産染付磁器である。底は平らで高台

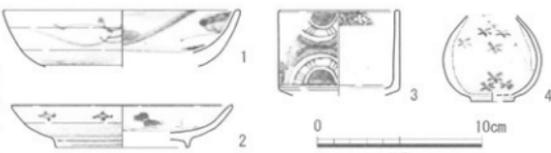


第132図 SP309(1/40)

- 1 天倉染付磁器(器14/1) 本図は、式7、1～2cm 上の明色を塗り付けた瓦
- 2 オリーブ染付磁器(器2/1) 1cm 厚の肥前産セラミックシートを貼る瓦
- 3 天倉染付(器14/1)
- 4 天倉染付磁器(器14/1) 下面に木質(和紙)
- 5 オリーブ染付磁器(器2/1) 1cm 厚の内装用明色セラミックを貼る瓦
- 6 天倉染付(器14/1) 本図は、器14のオリーブ染付セラミックを貼る瓦

を持たず、外面に小さな花文を多数散らす。

SP309は桶を伴うなどの特徴から、使槽である可能性が高い。出土遺物は遺構の破却時に混入したものとみられるが、量も少なく、時期を限定することは困難である。しかし、口縁部内面に四方禪文をもつ筒形碗を含んでおり、十八世紀後半以降に埋められたものと考えられる。



No.	種類	形状・構造	法 量 (cm)	形状・構造等の特徴	出土等の特徴	色 調
1	浅鉢(木製)	底	口径 11.2 高さ 1.1	口縁部が幅広。高が厚み。内面には文、外面に花文。	(層)土質石 (層)瓦葺	(層)赤土(層)土質石 (層)瓦葺(層)土質石
2	浅鉢(木製)	底	口径 12.2 高さ 2.1	口縁部が幅広。高が厚み。内面には文、外面に花文。	(層)土質石 (層)瓦葺	(層)赤土(層)土質石 (層)瓦葺(層)土質石
3	浅鉢(木製)	底	口径 11.2 高さ 1.1	口縁部が幅広。高が厚み。内面には文、外面に花文。	(層)土質石 (層)瓦葺	(層)赤土(層)土質石 (層)瓦葺(層)土質石
4	浅鉢(木製)	底	口径 11.2 高さ 1.1	口縁部が幅広。高が厚み。内面には文、外面に花文。	(層)土質石 (層)瓦葺	(層)赤土(層)土質石 (層)瓦葺(層)土質石

第133図 SP309出土遺物(1/3)

## SE333

SE333は調査範囲の南西角にかろうじてかかった、井戸と見られる遺構である。調査区内にかかった部分は掘方のみであり、調査区南壁、西壁面の角に裏込めの石材と見られる花崗岩石材が認められることから石積みの井戸と考えられる。深さに関しては、標高1.2m程度までは掘削することができたが、それ以上追求することができなかった。また、掘方内からは出土遺物もほとんどなく、SE255と同様藩学絵図にも記載のない井戸であり、時期に関しても手がかりがない。



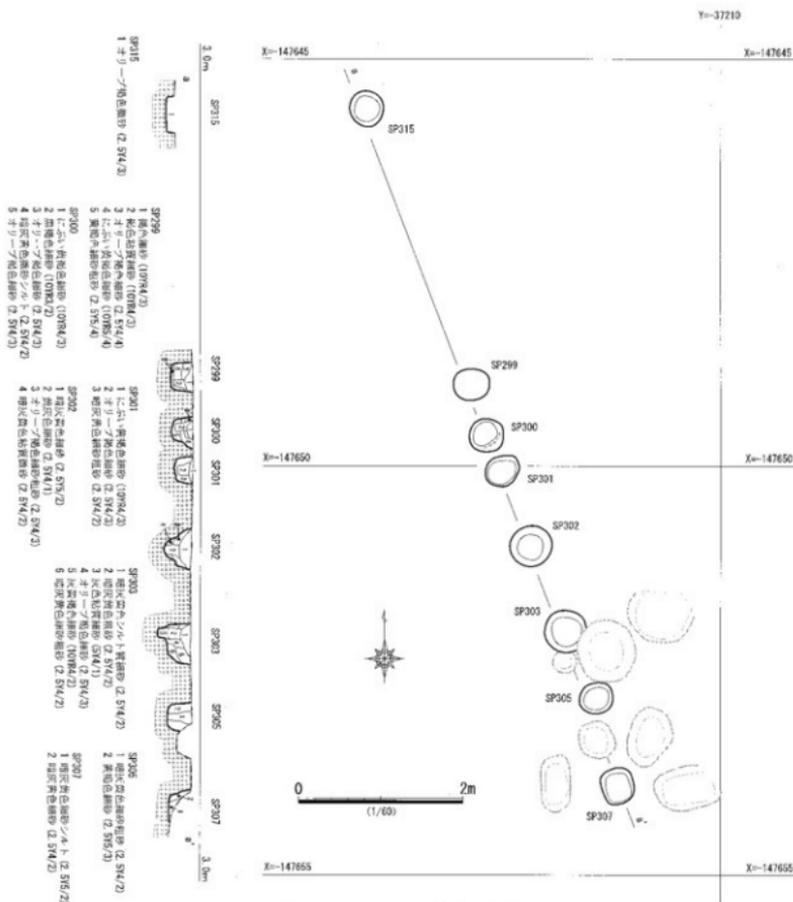
写真 13 SE333

## SP299 ほか柱穴列

SP299、SP300、SP301、SP302、SP303、SP305、SP307、SP315の8基ピットは、いずれも柱根痕を伴う柱穴であり、約9mにわたって一直線に並んでいる。埋土が判別しにくく、いずれも藩学の造成土である第IX層中の粗砂層上面で検出している。これらの柱穴は、径が35～50cm、底の標高が2.5～2.7mであり、掘り込み面が標高3.2m程度と仮定すると、深さは50～70cmということになる。柱穴の間隔はSP300とSP315を除くと1.05mほどで、軸が座標北から西へ20°ほど振っている。SP315は第IX層をさらに20cm程度掘り下げた時点で検出しているため、10cmほどの深さしか残っておらず、柱根痕も認識できなかった。柱穴の間隔が1.05mほどとすると、SP299との間にもう2基存在することとなるが、旧西校舎基礎の攪乱もあり検出することはできなかった。

出土遺物は土師質土器の小片や備前焼と見られる播鉢片がわずかに出土しているものの、図示が可能なもの、時期を判断できるものなどはない。

写真 14 SP299 ほか柱穴列  
(北側から、手前がSP299)



柱穴間の間隔が異なるSP300を含むか否か問題はのこるものの、規模や柱根痕を伴う構造の共通性などから一連の跡などの構造物ととらえて差し支えないものと思われる。なお、寛文期とされる藩学絵図では、北側の通路が調査範囲の中央付近から東に拡がっており、この東辺のラインが検出した柱穴列に位置、角度ともほぼ一致する。調査区北半部で検出した道路遺構やこの柱穴列の北側に検出した道路造成掘方の状況とも矛盾しない。検出状況や出土遺物から遺構の時期を判断することはできないが、道路遺構などとの関係や絵図との一致から、十七世紀後半代の藩学縮小以前の遺構である可能性が高い。

## d) 小結

近世遺構面1・2は藩学開校の寛文9年(1669)以降の遺構面ととらえられ、藩学造成土と考えられる第IX層によりそれ以前の遺構と明確に分離することができる。調査範囲は開校以降、一貫して藩学校内だった部分を含み、初めて発掘調査により藩学関連遺構が確認された。特に、藩学開校時の状況を伝えるとされる、『岡山市史 宗教教育編』掲載の絵図とほぼ一致する礎石建物、道路遺構等の遺構が確認された意義は大きい。

ここまでにも触れてきているが、調査範囲のうち北半部は比較的遺構面や遺構の残りが良い。遺構は礎石の基礎地行の掘方や礎石跡が大半を占め、明治維新後に武家屋敷地が廃絶する際のものと思われる瓦だまりを除くとゴミの廃棄土坑などはほとんどない。一方、南半部は旧西校舎基礎のため遺構の残りが悪く、遺構面自体も残っていない。遺構はゴミの廃棄土坑や井戸など大形で深いものが多い。こうした傾向は、単に遺構面の残存状況のみを反映したのではなく、土地の利用形態自体の傾向でもある。すなわち、北半部は藩学開校時に藩学関係者の屋敷地がおかれた部分であり、藩学縮小後も一貫して武家屋敷地であった。礎石跡が多い一建物が建っていた空間であったため廃棄土坑なども少ない状況となっているようである。一方、南半部は藩学の主要施設の背後の空間にあたり、絵図などを見ても建物などが余り多くない部分である。もちろん遺構面が残っていれば、絵図に記載されている建物跡、礎石が検出された可能性はあるが、ゴミの廃棄土坑や井戸などが多いのはそのためと思われる。

出土物は、調査区北半部でゴミの廃棄土坑がほとんどないこともあるが、一般的な城下町遺跡と比べごく少ないように思われる。また、炮烙鍋など土師質の鍋、釜の類が少なく、土瓶、行平鍋など、焔炉類が多いように思われる。これも藩学が若干の学内居住者がいたとはいえ、基本的に生活空間ではないことに由来するものと思われる。

なお、調査区北半部については、遺構の残存状況が良いこと、特に藩学絵図と一致する遺構群が確認されたことから、岡山市教育委員会文化財課、同施設課、岡山市営繕課と遺構面の保存について協議した。その結果、この部分については杭などをできる限り避け、地中梁等基礎についても遺構面が存在する標高3.2mより上で掘削が収まるよう設計を検討することとなった。

## 注

- (1) 兼岡 実 2000「近世の備前焼播種とその類似品」『岡山市埋蔵文化財調査の概要』1998(平成10年度) 岡山市教育委員会
- (2) 野上健紀 2000「磁器の耀年(色絵以外) 1. 碗・小杯・墨・紅皿・紅塔口」『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会
- (3) 岡山市史編集委員会編 1968『岡山市史』宗教・教育編 岡山市、P354「岡山藩学校古図」
- (4) 本文中にも記述しているが、この絵図は現在行方不明である。ただし、岡山大学所蔵の「池田家文庫」中に張り紙の下にこの絵図と同様の建物配置を描く絵図(T11-129-8)がある。T11-129-8の張り紙は、宝永5年(1708)とされる同じく「池田家文庫」中の城下図「岡山内面輪絵図(T6-20)」の張り紙に対応していると見られ、18世紀初頭の藩学縮小に伴うものと考えられる。
- (5) 注(2)文献
- (6) 兼岡 実 2001「第4節 瓦について」『史跡岡山城跡本丸下の段発掘調査報告』岡山市教育委員会

## 4 近世遺構面3

## a) 遺構面の概要

近世遺構面3は岡山城三之外曲輪整備に伴う造成土とみられる第Ⅺ層の上面にあたり、標高2.5～2.7mの高さを測る。近世遺構面1・2とは厚さ60cmほどの岡山藩藩学の造成土を隔てており、旧西校舎基礎の下面から検出したもの以外、明瞭に分離することができる。岡山城三之外曲輪が整備される十七世紀初頭から岡山藩藩学の造営工事が開始される寛文9年(1669)正月の間の遺構面ととらえられる。

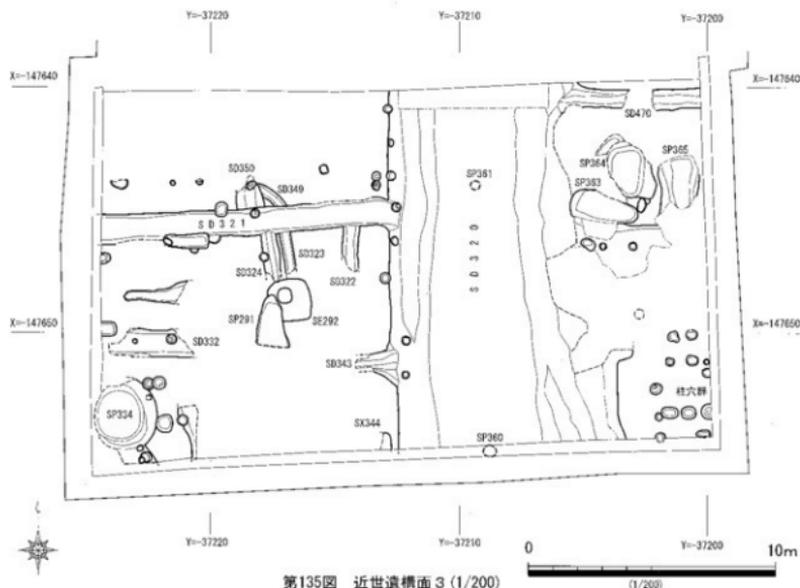
検出遺構はSD320、SD321、SD470などの溝状遺構、SP291などのゴミの廃棄土坑とみられる遺構、井戸(SE292)、SP336などの柱穴などがある。藩学開校以前の調査地点は天台宗東叡山寛永寺の末寺である円乗院や武家屋敷地であり、検出遺構の大半はこれらの関連遺構や城下の水路などであると考えられる。

なお、近世遺構面1・2に伴う藩学関連遺構保存のため、調査は南半部の約400㎡のみを対象としている。

## b) 遺構と出土遺物

## SP291

SP291はX=-147650、Y=-37217.5付近に所在する長楕円形の土坑で、南側はSE2551に切られている。全体が旧西校舎基礎内であるため、検出状況からは遺構面が特定できないが、出土遺物等から近世遺構



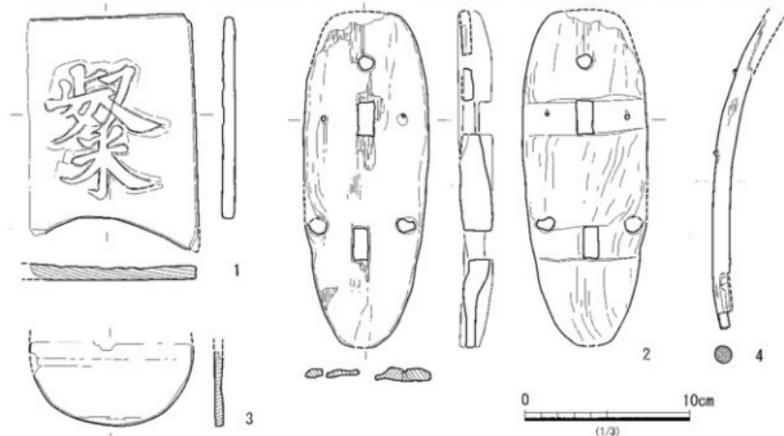
第135図 近世遺構面3 (1/200)

面3に伴うものと考えた。残っている部分で、長径2.0m、短径1.3m、底面は標高2.1mを測る。掘り込み面が、近世遺構面3だとすれば、深さは70cm程度ということになる。埋土は木片や木製品などの植物質を多量に含む層(第136図4層)、炭化物を多量に含む層(5層)、層の下面付近に薄い板材が集中する層(8層)などがあり、ゴミなどの廃棄土坑とみられる。

出土遺物には陶磁器類の他、木製品がある。

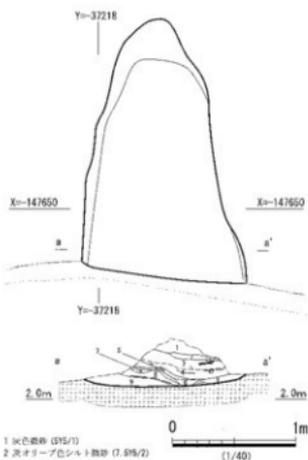
第137図1は厚さ0.9cmほどの板材で、表面に「祭」の文字を浮彫にしている。長さ14.5cmほどのほぼ長方形で、下辺は円弧状に扱れている。文字より右側は欠損しているが、下辺の形態からも、さほど大きく割れていないものと思われる。用途などはわからないが、何かに取り付けた札のようなものと思われる。なお、「祭」の文字には「白米」、「潔い」、「美しい」などの意味がある。2は差歯下駄で、残存状態が悪くつぶれなどが激しいが、残存長20.2cm、幅7.6cmを測る。3は円形の板材で1/2程度の破片だが、曲物の底板と見られる。4は樹皮を剥がしただけの枝で、片側の端部に加上痕がみられ、断面方形の突起や方形の挟り込みを設けている。もう一方の端部は欠損しているが、若干湾曲しており、手綱などの部材と思われる。

第138図には陶磁器類、土器類をあげている。5～7は肥前産とみられる染付磁器である。5は高台部



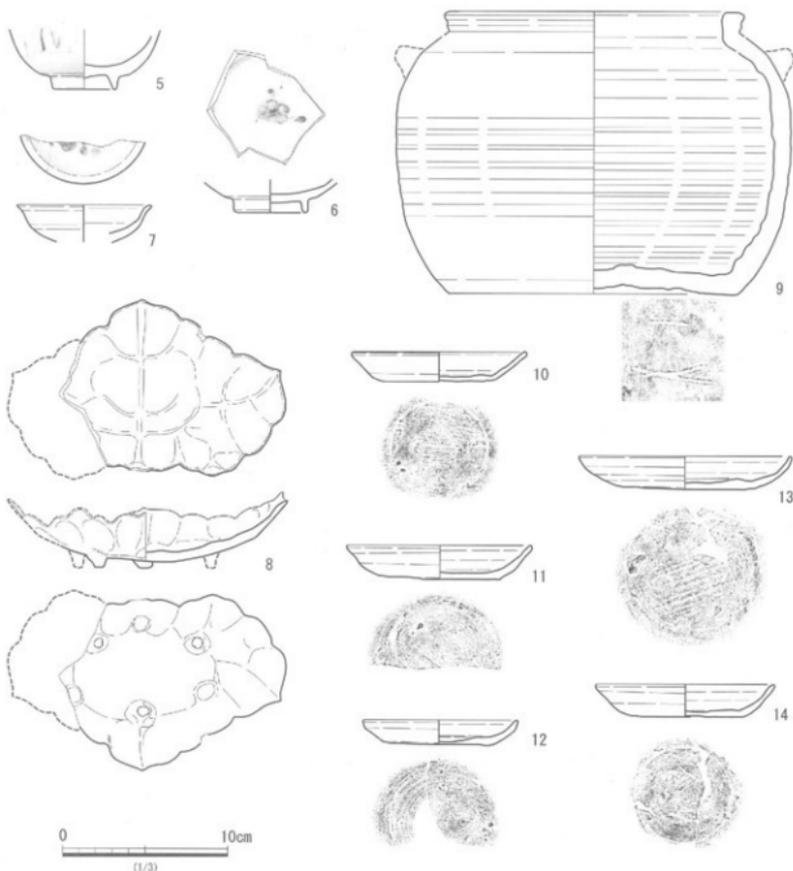
No.	種別	素材・部位	寸法(mm)	特徴・製造等の特徴	備考
1	木製品	木札	長さ 14.5 / 厚さ 0.9	加工済みの板材。表面に「祭」の文字を浮彫。	
2	木製品	F型	長さ 20.2 / 幅 7.6 / 厚さ 1.0	浮彫ノミ。底面が湾曲しており、縁がやや厚い。底面の裏面は釘で打つていたよう。	
3	木製品	曲物(底板)	径 9.9 / 厚さ 0.6	1/2程度の破片。	
4	木製品	樹材(杉木)	残存長 18.9 / 径 1.0	縁を磨いただけの枝で、片側縁には断面方形の突起がある。突起の内側に方形の挟り込みとそこから断面方形の突起がある。	

第137図 SP291出土遺物1(1/3)



第136図 SP291(1/40)

- 1 灰色磁器 (S15/1)
- 2 淡オリーブ色シト磁器 (T.S15/2)
- 3 緑茶色磁器 (S14/2)
- 4 淡オリーブ色陶磁器 (S15/2) 水筒、右側縁多く含む
- 5 黒色炭化物層 (S15)
- 6 灰色シト (S14/1) 木炭粉多く含む
- 7 灰色シト (S14/1) 3cm大のビネリア色シト粉多く含む
- 8 淡オリーブ色磁器シト (S14/1) ~ (S17) 下層に板材あり
- 9 灰色シト磁器 (S15/1)



No.	種類	形状・形状	法量(m)	形制・技法等の特徴	胎土等の特徴	色調
5	磁器(白磁)	碗	高台径 5.9	縁部以下の部分。丸縁。高台部無縁。外面に筋文ナシ。	胎土(1)礫石(埋蔵)良好	磁器(明細)赤褐色(10000:3) (埋蔵)灰白(0500:3)
6	磁器(白磁)	碗	高台径 6.5	高台部存在の磁器。高台部無縁。高台に唇付。高台外縁。高台内縁。高台内縁に筋文ナシ。	胎土(1)礫石(埋蔵)良好	磁器(明細)赤褐色(10000:3) (埋蔵)灰白(0500:3)
7	磁器(白磁)	皿	口径 6.6分	縁部以下は陶器製の磁器。内面見込に筋文。	胎土(1)礫石(埋蔵)良好	磁器(明細)赤褐色(10000:3) (埋蔵)灰白(0500:3)
8	磁器(白磁)	鉢	口径 10.8 高さ 5.6	本器は、世評しの通。底面に突起の跡がみられ、うち3が欠損。	胎土(1)礫石(埋蔵)良好	磁器(明細)赤褐色(10000:3) (埋蔵)灰白(0500:3)
9	銅貨	銭	直径 2.0 高さ 0.2	縁部以下は陶器製の磁器。動かない(1)縁部無縁。外縁に筋文。外縁に筋文ナシ。外縁に筋文ナシ。外縁に筋文ナシ。外縁に筋文ナシ。	胎土(1)5mm以下の磁器を多く含む(埋蔵)良好	銅(明細)赤褐色(10000:3) (埋蔵)灰白(0500:3)
10	土師瓦土器	小皿(白磁)	口径 6.3 高さ 2.1	内外縁とも平。底面外縁に高台付。中央部を平。口縁部外縁に筋文ナシ。	胎土(1)5mm以下の磁器を多く含む(埋蔵)良好	(内面)灰白(10000:3) (埋蔵)灰白(0500:3)
11	土師瓦土器	小皿	口径 11.1 高さ 2.1	内外縁とも平。底面外縁に高台付。	胎土(1)5mm以下の磁器を多く含む(埋蔵)良好	(内面)灰白(10000:3) (埋蔵)灰白(0500:3)
12	土師瓦土器	小皿	口径 5.3 高さ 1.6	内外縁とも平。底面外縁に高台付。	胎土(1)5mm以下の磁器を多く含む(埋蔵)良好	(内面)灰白(10000:3) (埋蔵)灰白(0500:3)
13	土師瓦土器	小皿(白磁)	口径 12.8 高さ 2.1	内外縁とも平。底面外縁に高台付。中央部を平。内縁部外縁に筋文ナシ。	胎土(1)5mm以下の磁器を多く含む(埋蔵)良好	(内面)灰白(10000:3) (埋蔵)灰白(0500:3)
14	土師瓦土器	小皿(白磁)	口径 10.7 高さ 2.0	内外縁とも平。底面外縁に高台付。中央部を平。縁部外縁に筋文ナシ。	胎土(1)5mm以下の磁器を多く含む(埋蔵)良好	(内面)灰白(10000:3) (埋蔵)灰白(0500:3)

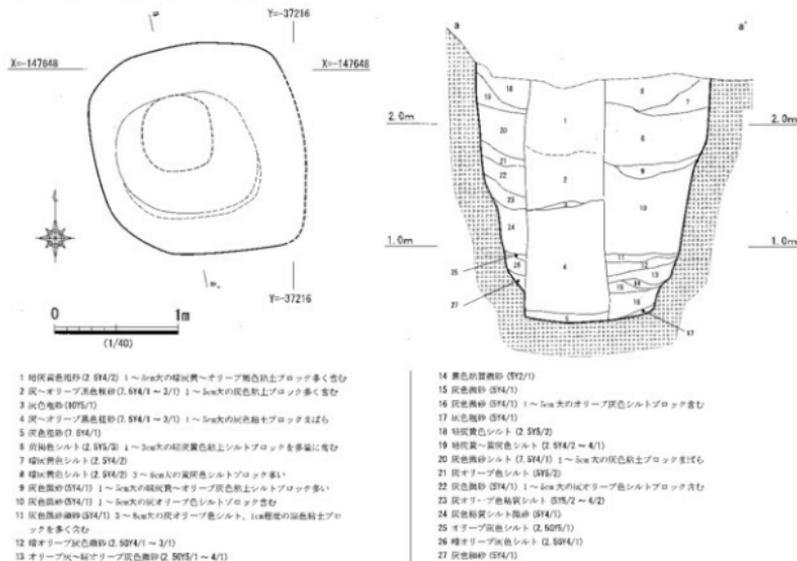
第138図 SP291出土遺物2(1/3)

を無釉に、6は高台皿付けに白色の細かい砂が付着している。8は木の葉を模した型打成形の磁器であり、やはり肥前産と見られる。底部に突起状の脚6があり、内面は葉脈を表現している。9は備前焼の壺である。体部から底部の破片だが、口縁部から頸部にかけての接合しない破片があり、口径18.4cm、器高17.5cm程に復元できる。肩部に一对の突起(耳)があるようである。10～14は土師質土器の小皿である。10、13、14には口縁部の内外面などに煤が付着しており、灯明皿として使用されたものである。11、12には煤の付着は認められない。

SP291の出土遺物には、高台部無釉碗や砂目積みの碗など十七世紀前半代の特徴を持つものが目立つ。ゴミの廃棄土坑内の遺物であり、掘り込み面も不明であるため時期を限定することは困難だが、藩学開校よりも遡る可能性が高い。

## SE292

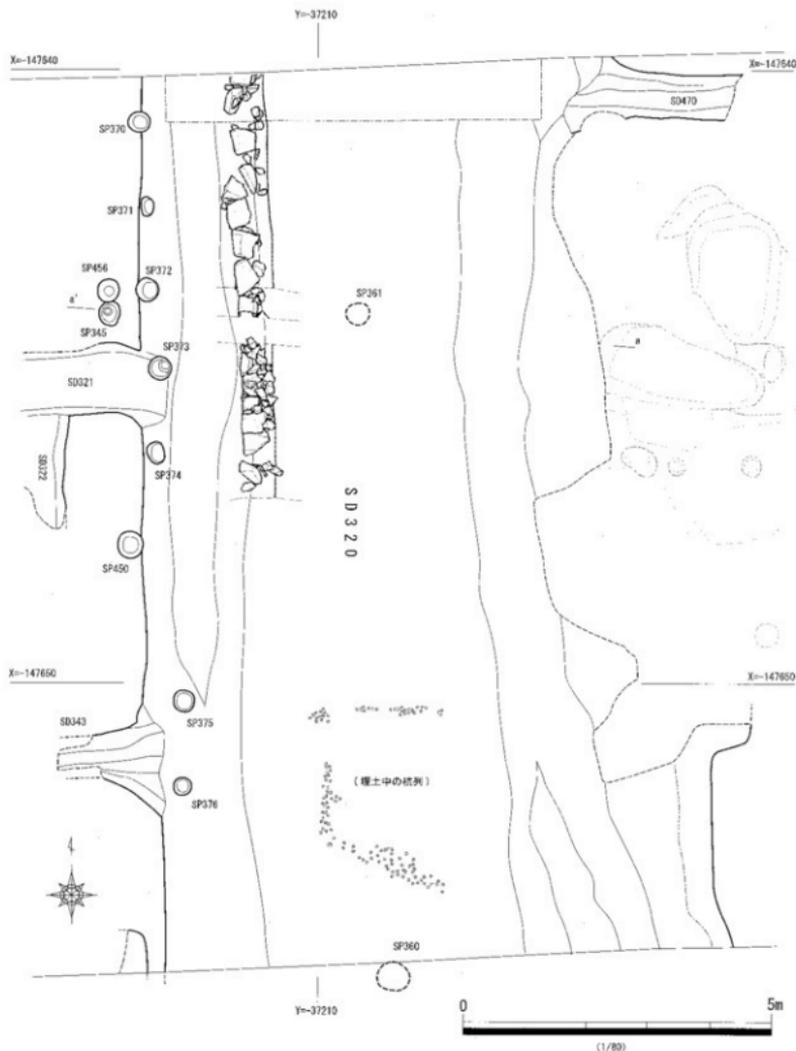
SE292はX=-147648.5、Y=37216.5付近に所在する井戸である。これも全体が旧西校舎基礎内にあるため掘り込み面が分からないが、SP291に切られていることから近世遺構面3に属する可能性が高い。SE292は、木製の井戸枠を入れていたと見られ、井戸枠の木質自体は残っていないが、竹製のタガの痕跡が20～40cm間隔で残っていた。井戸の直径は60～69cm、掘方は径1.9mを測る。底は標高0.38mであり、2.3mほどの深さだったと思われる。なお、出土遺物はほとんどなく、井戸内から漆塗りの桶が1点出土しているのみである。これはほぼ完形の木製の桶で、口径11.7cm、高さ3.7cmを測る。内面に朱漆、外面に黒漆を塗っている。



第139図 SE292(1/40)

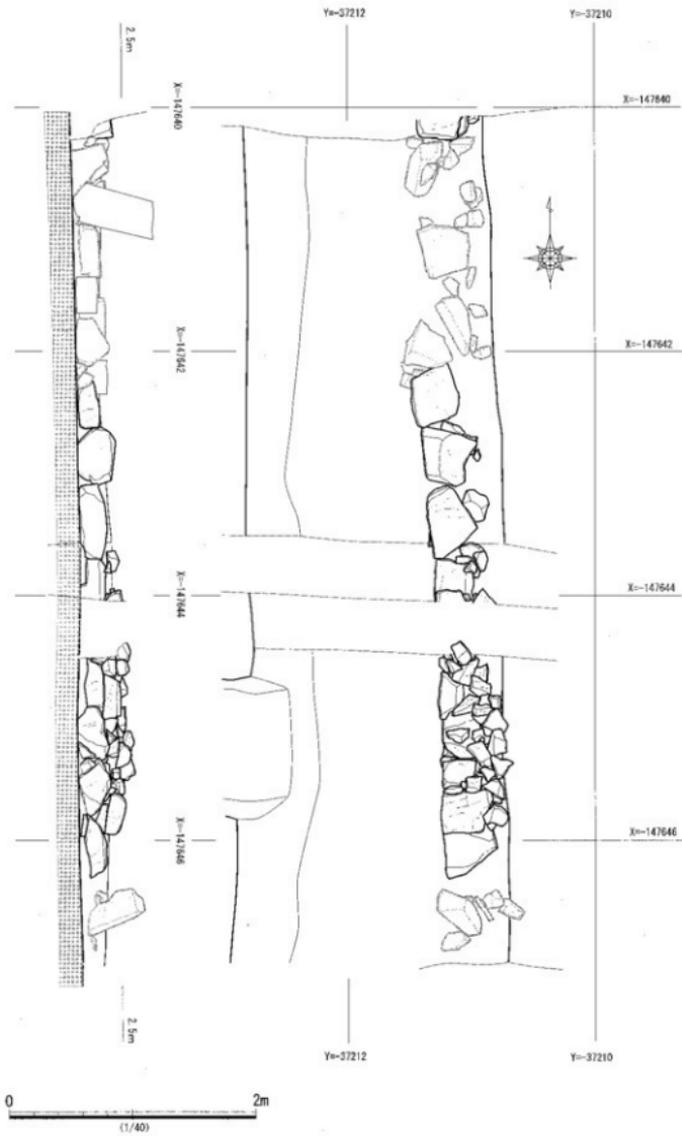
## SD320

SD320は調査区のほぼ中央を南北に流れる大形の溝状遺構である。幅7～9m、底は標高1.2m程度で



第140図 SD320(1/80)

検出面から約1.3mの深さがある。埋土は黒色～オリーブ灰色の粘質土が中心で有機質や未分解の植物質を多く含み、概ね水のあまり流れない淀みような状態だったものと思われる。東側の岸寄りには、標高2.0～2.2mの高さの埋土中に溝内に張り出すような形で杭や径1cm程度の竹が多数突き立てられており、草や木の枝が多量に堆積している部分があった。また、SD320の北西部の上層には幅50cm、高



第141図 SD320上層石組み遺構(1/40)

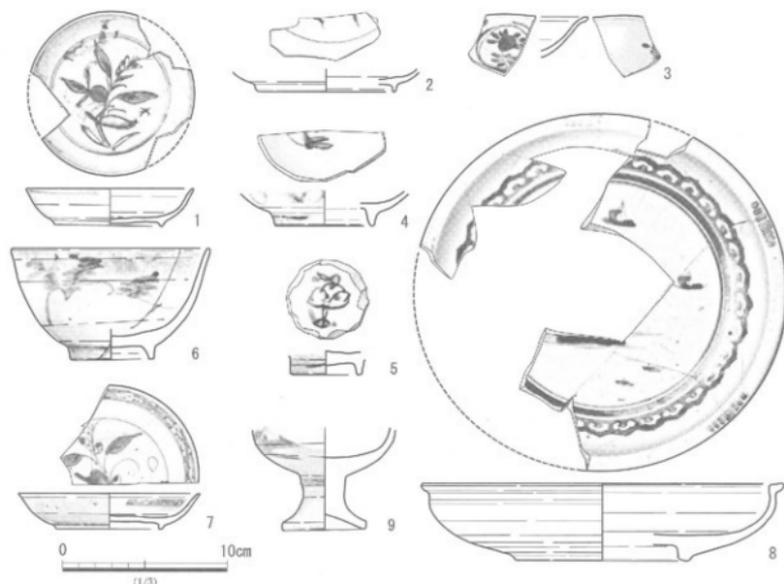


さ30cm程度の花崗岩割石を並べた列石が検出された。この列石は、旧西校舎基礎により一部壊されているが、Y=37211mライン付近におよそ7mにわたって、西側に面をそろえて並んでいた(第141図)。石材は標高2.1m程の高さの薄い砂層上に基礎構造などを伴わず直接置かれており、残りのよい部分でも二段しか残っていない。SD320の最終段階の護岸とみられ、この段階には幅1.5m、深さ0.5m程度の細い溝になっていたようである。



写真 15 SP360

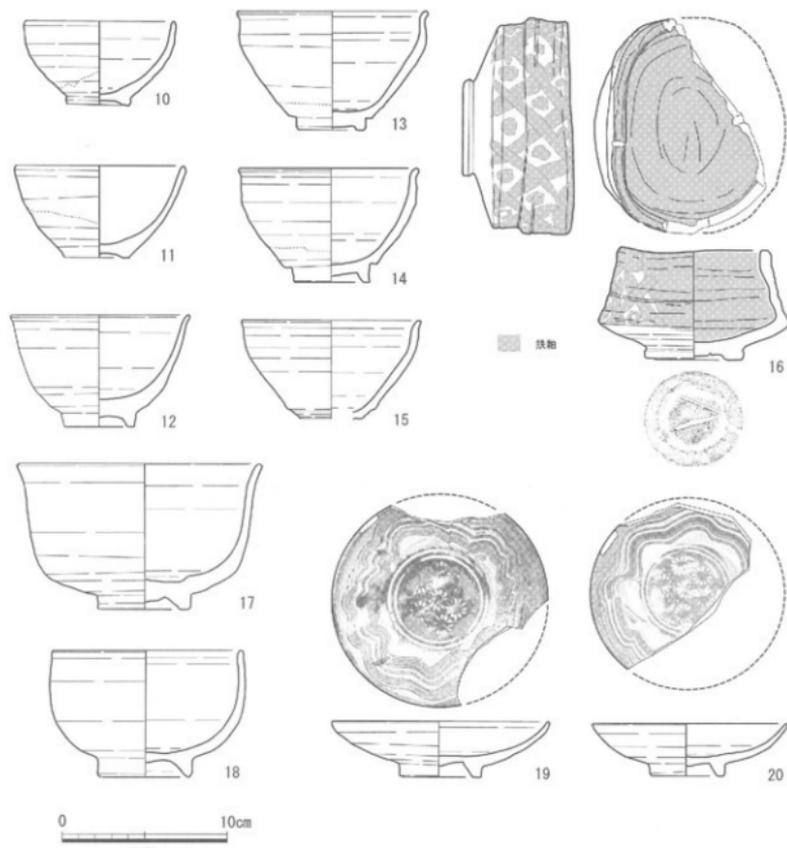
SD320西側の肩や斜面、SD320の中央付近からはSP360、SP361やSP370などの柱穴を検出している。



(1/3)

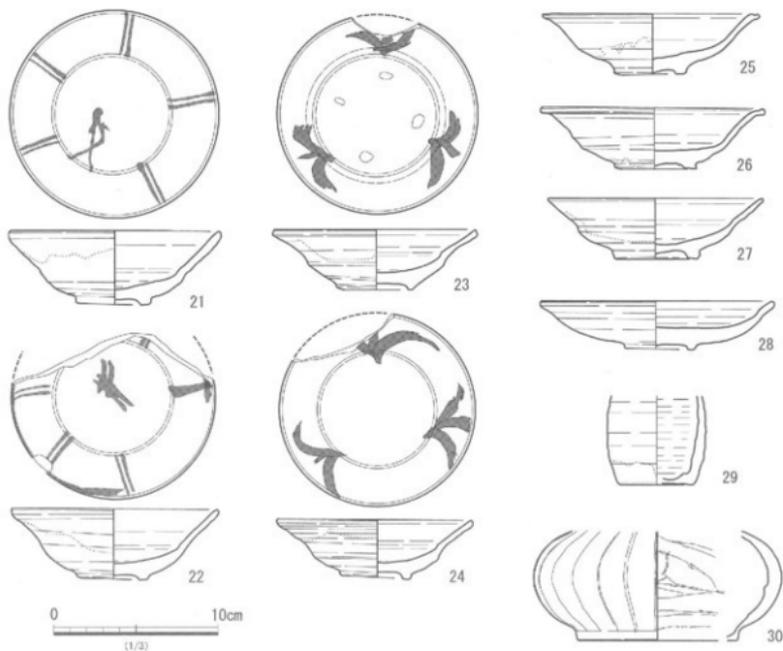
No.	種類	器種・部位	寸法(cm)	形態・注目の特徴	出土の特徴	備考
1	中央金付磁器 (土器類)	II	口径 28.1 高さ 2.1	高台部削平、口縁部外周、両台付付部に細線がそれぞれ1条、内面は足込に彫文文、口縁部外周に1条、見出しに2条の細線。	(層)1土層石 (層別)良好	(館)吉野館-特別区(C309/1) (伊原)式目(C309)
2	中央金付磁器 (土器類)	II	高台径 28.2	高台部削平の小破片、内面は彫文、内面は見込に彫文、見出しに1条の細線。	(層)1土層石 (層別)良好	(館)吉野館-特別区(C307/1) (伊原)式目(C309)
3	中央金付磁器 (土器類)	II		口縁部削平の小破片、内面は彫文。	(層)1土層石 (層別)良好	(館)吉野館-特別区(C307/1) (伊原)式目(C309)
4	中央金付磁器 (土器類)	II	高台径 28.9	高台部削平の小破片、内面は彫文、内面は見込に彫文、外面に平削支脚、外周に1条の細線に類似した条。	(層)1土層石 (層別)良好	(館)吉野館-特別区(C309/1) (伊原)式目(C309)
5	中央金付磁器 (土器類)	III	高台径 21.5	高台部の破片、高台部削平、内面は見込に彫文、内外面に類似した条。	(層)1土層石 (層別)良好	(館)吉野館-特別区(C309/1) (伊原)式目(C309)
6	肥後焼磁器	III	口径 11.9 高さ 8.9	口縁部削平、口縁部外周、両台付付部に細線がそれぞれ1条、内面は足込に彫文文、口縁部外周に1条、見出しに2条の細線。	(層)1土層石 (層別)良好	(館)吉野館-特別区(C307/1) (伊原)式目(C309)
7	中央金付磁器 (土器類)	II	口径 22.0 高さ 2.2	口縁部削平の小破片、内面は彫文、内面は見込に彫文、外面に平削支脚、外周に1条の細線に類似した条。	(層)1土層石 (層別)良好	(館)吉野館-特別区(C309/1) (伊原)式目(C309)
8	肥後焼磁器	III	口径 22.0 高さ 2.8	口縁部削平の小破片、高台部削平、口縁部に大巾の片縁を並べた支脚、口縁部外周に1条、見出しに2条の細線に類似した条。	(層)1土層石 (層別)良好	(館)吉野館-特別区(C307/1) (伊原)式目(C309)
9	肥後焼磁器	IV	口径 6.9	口縁部削平の小破片、高台部削平、口縁部に大巾の片縁を並べた支脚、口縁部外周に1条、見出しに2条の細線に類似した条。	(層)1土層石 (層別)良好	(館)吉野館-特別区(C307/1) (伊原)式目(C309)

第143図 SD320出土遺物1(1/3)



No.	種類	形種・形状	法 量 (cm)	形状・技法等の特徴	出土層の特徴	出 処
10	赤山陶器	碗	口径 5.9 高さ 3.2	体部下部～両面無敷。	(出土) 1. 碗口下の鉄粒を多く含む(焼成)良好	(焼成層・底層) 1000(1) / (内面) 1000(1) / (外面) 1000(1) / (断面) 1000(1) / (断面) 1000(1) / (断面) 1000(1)
11	赤山陶器	碗	口径 16.1 高さ 5.7	体部下部～両面無敷。	(出土) 1. 碗口下の鉄粒を多く含む(焼成)良好	(焼成層) 1000(1) / (断面) 1000(1) / (断面) 1000(1) / (断面) 1000(1) / (断面) 1000(1)
12	赤山陶器	碗	口径 16.2 高さ 5.9	体部下部～両面無敷。	(出土) 1. 碗口下の鉄粒を多く含む(焼成)良好	(焼成層) 1000(1) / (断面) 1000(1) / (断面) 1000(1) / (断面) 1000(1) / (断面) 1000(1)
13	赤山陶器	碗	口径 11.9 高さ 3.2	両面無敷。両面に「土」の染着。	(出土) 1. 碗口下の鉄粒を多く含む(焼成)良好	(焼成層) 1000(1) / (断面) 1000(1) / (断面) 1000(1) / (断面) 1000(1) / (断面) 1000(1)
14	赤山陶器	碗	口径 16.7 高さ 7.0	両面無敷。	(出土) 1. 碗口下の鉄粒を多く含む(焼成)良好	(焼成層) 1000(1) / (断面) 1000(1) / (断面) 1000(1) / (断面) 1000(1) / (断面) 1000(1)
15	赤山陶器	碗	口径 16.8 高さ 5.4	1. 両面無敷の碗片。両面欠損。両面無敷。	(出土) 1. 碗口下の鉄粒を多く含む(焼成)良好	(焼成層) 1000(1) / (断面) 1000(1) / (断面) 1000(1) / (断面) 1000(1) / (断面) 1000(1)
16	赤山陶器	碗(欠損部)	口径 13.1 高さ 5.2	口縁部1/2程度欠損。両面欠損。両面に鉄粒を多く含む(焼成)良好。	(出土) 1. 碗口下の鉄粒を多く含む(焼成)良好	(焼成層) 1000(1) / (断面) 1000(1) / (断面) 1000(1) / (断面) 1000(1) / (断面) 1000(1)
17	赤山陶器	碗	口径 11.9 高さ 3.9	両面無敷。	(出土) 1. 碗口下の鉄粒を多く含む(焼成)良好	(焼成層) 1000(1) / (断面) 1000(1) / (断面) 1000(1) / (断面) 1000(1) / (断面) 1000(1)
18	赤山陶器 (中野陶器)	碗	口径 11.3 高さ 3.8	口縁部欠損の碗片。両面欠損。両面に鉄粒を多く含む(焼成)良好。	(出土) 1. 碗口下の鉄粒を多く含む(焼成)良好	(焼成層) 1000(1) / (断面) 1000(1) / (断面) 1000(1) / (断面) 1000(1) / (断面) 1000(1)
19	赤山陶器	碗(二枚片)	口径 11.1 高さ 3.5	両面無敷。碗口下部4cm程度の土質。両面に白化現象の観察。及び鉄質土質。	(出土) 1. 碗口下の鉄粒を多く含む(焼成)良好	(焼成層) 1000(1) / (断面) 1000(1) / (断面) 1000(1) / (断面) 1000(1) / (断面) 1000(1)
20	赤山陶器	碗(二枚片)	口径 11.8 高さ 3.2	両面無敷。碗口上部約1cm程度の土質。内面に白化現象の観察。及び鉄質土質。	(出土) 1. 碗口下の鉄粒を多く含む(焼成)良好	(焼成層) 1000(1) / (断面) 1000(1) / (断面) 1000(1) / (断面) 1000(1) / (断面) 1000(1)

第144図 SD320出土遺物2 (1/3)

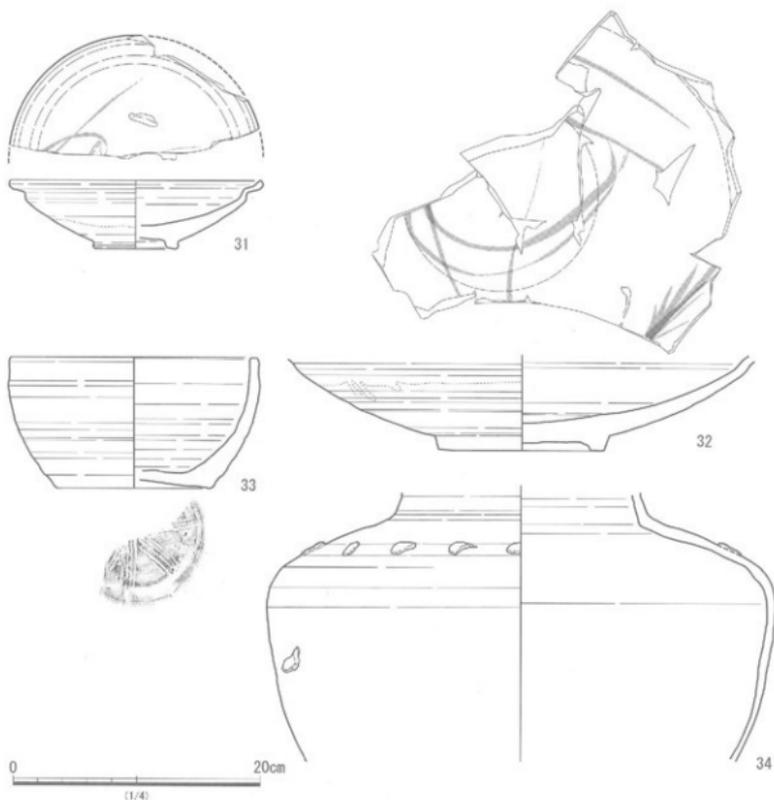


No.	種類	形状・部位	高さ(cm)	形跡・模造等の特徴	出土等の特徴	色調
21	土師陶器	皿	口径 13.6 高さ 4.6	外縁下手へ高台部無縁。内面に加線で二条一単位の放射状の文様。	(上) 1.5, 5cm以下の放射状を多く含む(焼成)良好	(焼成) 灰黄緑(1335)・(外) 土色(1341)・(中) 土色(1342)・(底) 土色(1343)
22	土師陶器	皿	口径 12.6 高さ 5.4	外縁下手へ高台部無縁。内面に加線で二条一単位の放射状の文様。	(上) 1.5, 5cm以下の放射状を多く含む(焼成)良好	(焼成) 土色(1336)・(外) 土色(1341)・(中) 土色(1342)・(底) 土色(1343)
23	土師陶器	皿	口径 12.5 高さ 5.7	外縁下手へ高台部無縁。内面に加線で動物(?)文様。見込に加線で二条一単位。	(上) 1.5, 5cm以下の放射状を多く含む(焼成)良好	(焼成) 灰黄緑(1335)・(外) 土色(1341)・(中) 土色(1342)・(底) 土色(1343)
24	土師陶器	皿	口径 11.9 高さ 5.6	外縁下手へ高台部無縁。内面に加線で動物(?)文様。	(上) 1.5, 5cm以下の放射状を多く含む(焼成)良好	(焼成) 灰黄緑(1335)・(外) 土色(1341)・(中) 土色(1342)・(底) 土色(1343)
25	土師陶器	皿	口径 13.2 高さ 3.8	高台部有縁。高台部加線で二条一単位。	(上) 1.5, 5cm以下の放射状を多く含む(焼成)良好	(焼成) 灰黄緑(1335)・(外) 土色(1341)・(中) 土色(1342)・(底) 土色(1343)
26	土師陶器	皿	口径 13.0 高さ 3.8	高台部有縁。高台部加線で二条一単位。	(上) 1.5, 5cm以下の放射状を多く含む(焼成)良好	(焼成) 灰黄緑(1335)・(外) 土色(1341)・(中) 土色(1342)・(底) 土色(1343)
27	土師陶器	皿	口径 13.1 高さ 3.8	外縁下手へ高台部無縁。内面に加線で二条一単位。	(上) 1.5, 5cm以下の放射状を多く含む(焼成)良好	(焼成) 灰黄緑(1335)・(外) 土色(1341)・(中) 土色(1342)・(底) 土色(1343)
28	土師陶器	皿	口径 13.2 高さ 3.8	高台部有縁。高台部加線で二条一単位。	(上) 1.5, 5cm以下の放射状を多く含む(焼成)良好	(焼成) 灰黄緑(1335)・(外) 土色(1341)・(中) 土色(1342)・(底) 土色(1343)
29	土師陶器	皿	口径 13.1 高さ 3.8	外縁下手へ高台部無縁。内面に加線で二条一単位。	(上) 1.5, 5cm以下の放射状を多く含む(焼成)良好	(焼成) 灰黄緑(1335)・(外) 土色(1341)・(中) 土色(1342)・(底) 土色(1343)
30	土師陶器	皿	口径 13.0 高さ 4.7	外縁下手へ高台部無縁。内面に加線で二条一単位。	(上) 1.5, 5cm以下の放射状を多く含む(焼成)良好	(焼成) 灰黄緑(1335)・(外) 土色(1341)・(中) 土色(1342)・(底) 土色(1343)

第145図 SD320出土遺物3(1/3)

SP360は南側の壁面付近から検出したもので、SD360の埋土上から掘り込まれている。柱穴内に板状の石材を置き、その上に一辺17cmほどの断面方形の柱を立てていた(写真15)。SD361も同様の柱穴であり、石材は伴わないもののほぼ同じ大きさの断面方形の柱が残存していた。SP370などは柱根は残っていないものの柱穴や杭跡とみられ、SD320と重なるものはいずれもSD320の埋土上から掘られているようである。間隔も一定でなく組み合わせも不明だが、SD320が縮小した段階の溝脇に作られた竈などに伴うものと考えられる。

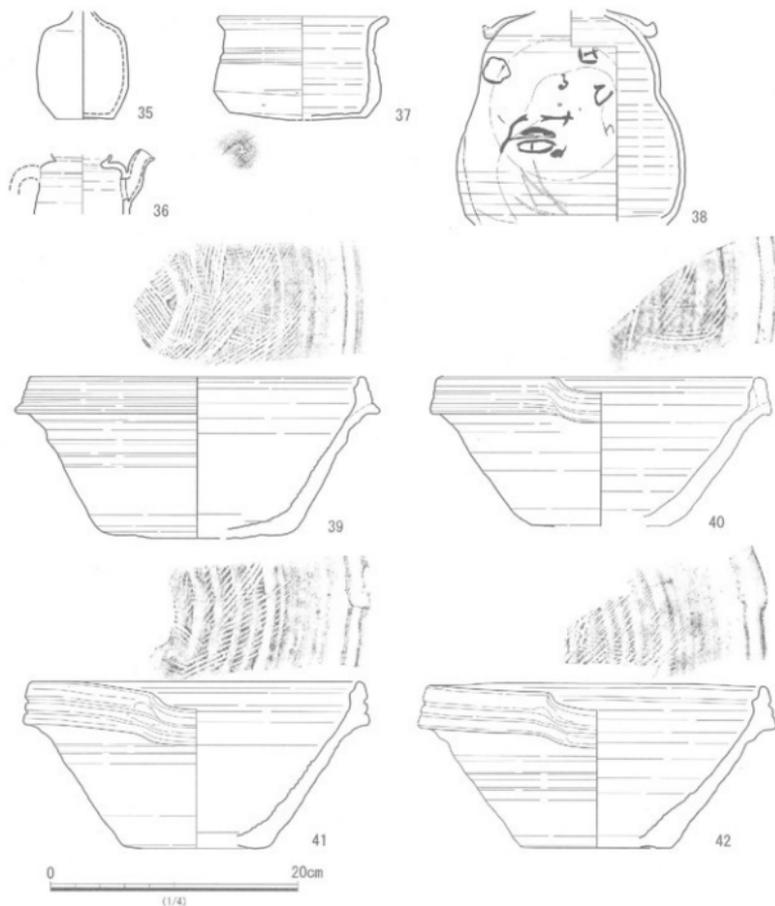
SD320からは陶磁器類の他、木製品など多量の遺物が出上している。



No.	種類	器種・形状	寸法 (cm)	形姿・技法等の特徴	胎土等の特徴	色 澤
31	蓋付陶器	丸	口径 36.3 高さ 33.6	1) 裏面底の縦筋、後面下半～高台部無筋、内面に鉄軸で縦筋の文様、見込に胎土目積みあり。	2) 胎土 50%以下の鉄軸を多く含む。 3) 内面には「裏面底の縦筋」(厚肉部)と「見込」(見込)の縦筋(薄肉部)あり。	1) 緑褐色～黄褐色～黄褐色、胎土目積みあり。 2) 内面は「見込」の縦筋(薄肉部)あり。
32	蓋付陶器	天皿	高口径 43.4 厚肉部 2.9	1) 厚肉部底の縦筋、後面下半～高台部無筋、内面に鉄軸で縦筋の文様。	2) 胎土 50%以下の鉄軸を多く含む。 3) 内面には「裏面底の縦筋」(厚肉部)と「見込」(見込)の縦筋(薄肉部)あり。	1) 緑褐色～黄褐色～黄褐色、胎土目積みあり。 2) 内面は「見込」の縦筋(薄肉部)あり。
33	蓋付陶器	天皿	口径 43.9 高さ 48.8	1) 裏面底の縦筋、内外面とも無筋で、後面外周の一部に鉄軸で縦筋の文様、内面は「見込」の縦筋(薄肉部)あり。	2) 胎土 50%以下の鉄軸を多く含む。 3) 内面には「裏面底の縦筋」(厚肉部)と「見込」(見込)の縦筋(薄肉部)あり。	1) 緑褐色～黄褐色～黄褐色、胎土目積みあり。 2) 内面は「見込」の縦筋(薄肉部)あり。
34	土器・陶器	壺	最大径 33.0 高さ 52.0	1) 裏面底～後面の一部に鉄軸で縦筋の文様、内外面とも無筋で、後面外周の一部に鉄軸で縦筋の文様、内面は「見込」の縦筋(薄肉部)あり。	2) 胎土 50%以下の鉄軸を多く含む。 3) 内面には「裏面底の縦筋」(厚肉部)と「見込」(見込)の縦筋(薄肉部)あり。	1) 緑褐色～黄褐色～黄褐色、胎土目積みあり。 2) 内面は「見込」の縦筋(薄肉部)あり。

第146図 SD320出土遺物4 (1/4)

第143図1～5、7は中国産の染付磁器とみられる。6、8、9は肥前産の染付磁器で、8などには高台に砂が付着しており砂目積みの製品と判断できる。なお、8はSP364から同一個体の破片が出土しており、接合した。第144図10～12は肥前陶器の碗、13～15は瀬戸美濃産の天目碗である。16はいわゆる織部である。いびつな楕円形の体部側面に白色の地に鉄軸で格子目状の文様を描いており、内面は鉄軸をかけている。19、20は肥前産の陶器で、「三馬手」と呼ばれるものである。赤褐色の胎土に白化粧土の刷毛目で波状文を描き、見込にはスタンプによる花文に白化粧土を象眼する。21～28、31、32は肥前産陶器の皿である。胎土目積み痕のあるもの(23、31)と砂目積みのもの(25～28)があり、21～24、



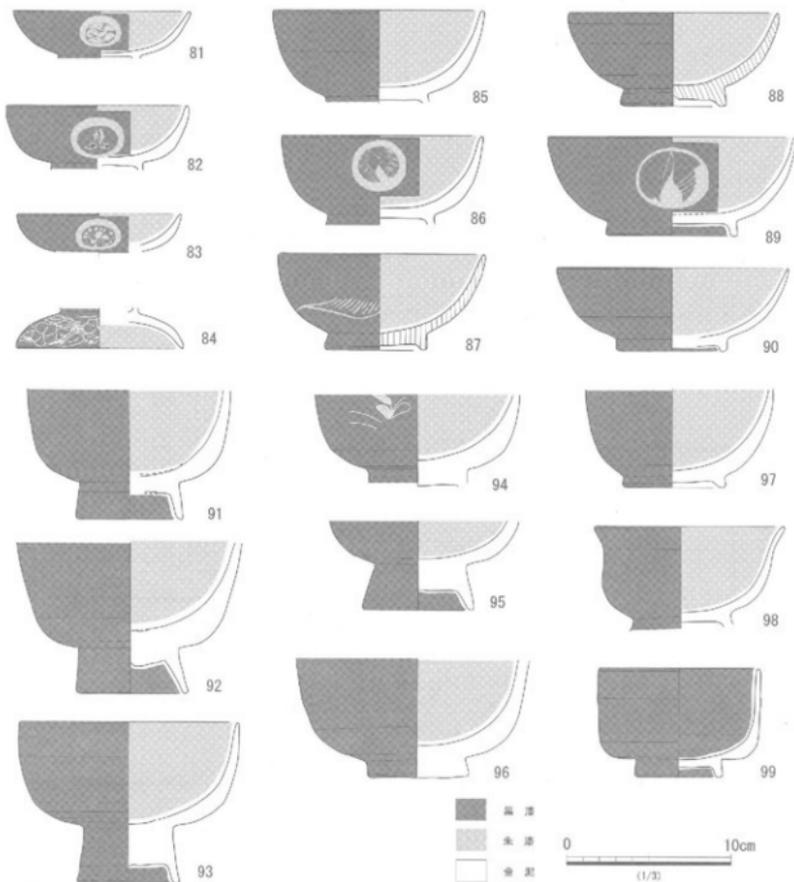
(1/4)

順	種類	形状・部位	数量(区)	形状・技法等の特徴	胎土等の特徴	色 調
35	甕	胴(横切)	最大径 2.4 最小径 0.8	胴部より上部、肩部の広い範囲に自然釉、灰被覆、横筋に 3)のへこみあり。	(胎土) 60%以下の粉砂を多く含む (焼成) 灰被覆	(外周) 赤褐色(100R/2~30V/E) (内周) 灰(172)色
36	甕	水沿	最大径 2.7 最小径 0.5	横筋、3)横筋、数本欠け。	(胎土) 60%以下の粉砂を含む (焼成) 灰(172)色	(外周) 赤褐色(100R) (内周) 灰(172)色
37	甕	水沿	口径 43.8 高さ 6.1	横筋外面に波状土条、縁部がふくらみ、杯状下へラフタリ、 横筋がやや、横筋に2)の筋。	(胎土) 60%以下の粉砂を多く含む (焼成) 灰(172)色	(外周) 赤褐色(100R/2~30V/E) (内周) 灰(172)色
38	甕	底(横切)	最大径 12.4 最小径 12.5	5)のへこみ面の筋、波状土条、波状土条、縁部に横筋1列、 縁部横筋がやや斜めに傾き、A,B,C、D、Eの5)を施す。	(胎土) 60%以下の粉砂を多く含む (焼成) 灰(172)色	(外周) 赤褐色(100R/2~30V/E) (内周) 灰(172)色
39	甕	胴	口径 206.0 高さ 43.3	5)の筋を施す、内外ともにヨコヤチ(ヒコヤチ)、内面に横 筋土条に5)を施す、縁部に横筋2列、2列のヨコヤチを施す 土条、縁部5)を施す。	(胎土) 70%以下の粉砂を多く含む (焼成) 灰(172)色	(外周) 赤褐色(100R/2~30V/E) (内周) 灰(172)色
40	甕	胴	口径 213.3 高さ 43.3	5)の筋を施す、内外ともにヨコヤチ(ヒコヤチ)、内面に横 筋土条に5)を施す、縁部に横筋2列、2列のヨコヤチを施す 土条、縁部5)を施す。	(胎土) 70%以下の粉砂を多く含む (焼成) 灰(172)色	(外周) 赤褐色(100R/2~30V/E) (内周) 灰(172)色
41	甕	胴	口径 206.0 高さ 43.3	5)の筋を施す、内外ともにヨコヤチ(ヒコヤチ)、内面に横 筋土条に5)を施す、縁部に横筋2列、2列のヨコヤチを施す 土条、縁部5)を施す。	(胎土) 70%以下の粉砂を多く含む (焼成) 灰(172)色	(外周) 赤褐色(100R/2~30V/E) (内周) 灰(172)色
42	甕	胴	口径 206.0 高さ 43.3	5)の筋を施す、内外ともにヨコヤチ(ヒコヤチ)、内面に横 筋土条に5)を施す、縁部に横筋2列、2列のヨコヤチを施す 土条、縁部5)を施す。	(胎土) 70%以下の粉砂を多く含む (焼成) 灰(172)色	(外周) 赤褐色(100R/2~30V/E) (内周) 灰(172)色

第147図 S0320出土遺物5(1/4)







No.	品名	種類・部位	寸法(単位)	特徴・装飾的特徴	備考
81	木製品	碗	口径 10.7 / 残存高 2.9	1.2段折縁の破片。底有欠損。外面に黒漆、内面に朱漆を施す等々で彩色している。内面朱漆。	
82	木製品	碗	口径 10.9 / 残存高 4.0	1.2段折縁の破片。底有欠損。外面に黒漆、内面に朱漆を施す等々で彩色している。内面朱漆。	
83	木製品	碗	口径 9.9 / 残存高 2.3	1.2段折縁の破片。底有欠損。外面に黒漆、内面に朱漆を施す等々で彩色している。内面朱漆。	
84	木製品	蓋	口径 10.0 / 残存高 2.0	1.2段折縁の破片。外面に黒漆、内面に朱漆を施す等々で彩色している。内面朱漆。	
85	木製品	碗	口径 15.0 / 残存高 3.0	2.2段折縁の破片。底有欠損。外面に黒漆、内面に朱漆を施す等々で彩色している。内面朱漆。	
86	木製品	碗	口径 15.1 / 残存高 3.5	2.2段折縁の破片。底有欠損。外面に黒漆、内面に朱漆を施す等々で彩色している。内面朱漆。	
87	木製品	碗	口径 12.9 / 高さ 4.0	無縁の三脚。底面は朱漆を施す等々。底面は朱漆を施す等々。底面は朱漆を施す等々。	
88	木製品	碗	口径 12.9 / 高さ 4.0	無縁の三脚。底面は朱漆を施す等々。底面は朱漆を施す等々。底面は朱漆を施す等々。	
89	木製品	碗	口径 12.9 / 高さ 4.0	無縁の三脚。底面は朱漆を施す等々。底面は朱漆を施す等々。底面は朱漆を施す等々。	
90	木製品	碗	口径 12.9 / 高さ 4.0	無縁の三脚。底面は朱漆を施す等々。底面は朱漆を施す等々。底面は朱漆を施す等々。	
91	木製品	碗	口径 15.0 / 高さ 4.0	2.2段折縁の破片。底有欠損。外面に黒漆、内面に朱漆を施す等々で彩色している。内面朱漆。	
92	木製品	碗	口径 15.1 / 高さ 4.5	2.2段折縁の破片。底有欠損。外面に黒漆、内面に朱漆を施す等々で彩色している。内面朱漆。	
93	木製品	碗	口径 12.9 / 高さ 4.0	無縁の三脚。底面は朱漆を施す等々。底面は朱漆を施す等々。底面は朱漆を施す等々。	
94	木製品	碗	口径 12.9 / 高さ 4.0	無縁の三脚。底面は朱漆を施す等々。底面は朱漆を施す等々。底面は朱漆を施す等々。	
95	木製品	碗	口径 12.9 / 高さ 4.0	無縁の三脚。底面は朱漆を施す等々。底面は朱漆を施す等々。底面は朱漆を施す等々。	
96	木製品	碗	口径 12.9 / 高さ 4.0	無縁の三脚。底面は朱漆を施す等々。底面は朱漆を施す等々。底面は朱漆を施す等々。	
97	木製品	碗	口径 12.9 / 高さ 4.0	無縁の三脚。底面は朱漆を施す等々。底面は朱漆を施す等々。底面は朱漆を施す等々。	
98	木製品	碗	口径 12.9 / 高さ 4.0	無縁の三脚。底面は朱漆を施す等々。底面は朱漆を施す等々。底面は朱漆を施す等々。	
99	木製品	碗	口径 12.9 / 高さ 4.0	無縁の三脚。底面は朱漆を施す等々。底面は朱漆を施す等々。底面は朱漆を施す等々。	

第150図 SD320出土遺物8(1/3)

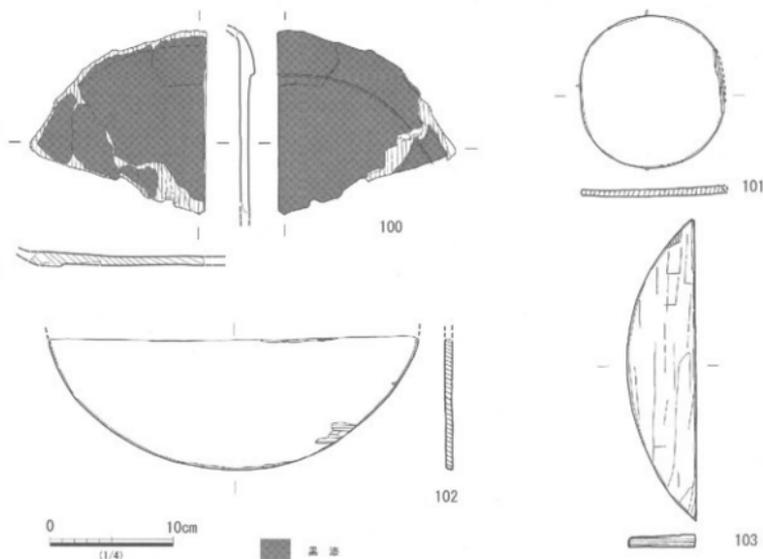
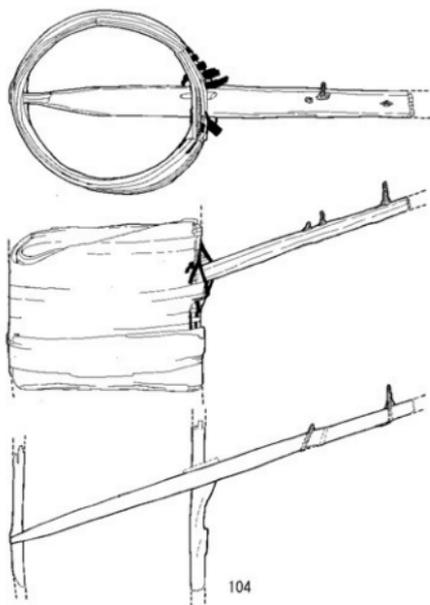


図	種類	形状・製作	流量(cm)	図表・特徴等の説明	備考
100	本瓦器	壺	---	直線付冠口(厚肉)の破片、内外面に黒塗。	
101	本瓦器	曲物(瓦板)	直径 12.5 / 厚さ 0.3	板瓦形の曲物破片、裏面に黒塗が剥離して存在。	
102	本瓦器	曲物(瓦板)	残存径26.9 / 厚さ 0.7	1.2cm以内の破片、厚さ0.6以上の大型の曲物。	
103	本瓦器	曲物(瓦板)	残存径12.8 / 厚さ 0.3	1.3cm以内の破片。	

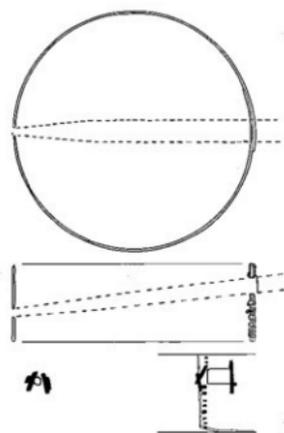
第151図 SD320出土遺物9(1/4)

31、32には内面に放射状の線文や簡略化した植物とみられる文様が鉄軸で描かれている。29は瀬戸美濃産の茶入とみられる。

35～42には備前焼をあげている。38はいびつな平面形の壺で、側面に人面とみられる目や眉毛のような表現、梅花(?)、文字とおもわれるものを墨書している。39～42は摺鉢である。いずれも放射状のスリ目に斜め方向のスリ目が付加されており、40などのように非常に摩滅したのも目立つ。43～60には土師質土器の小皿をあげている。いずれも底面に糸切り痕を持つもので、灯明皿とみられる煤が付着するものと、儀式用の坏とみられる煤が付着しないものがある。61～63は土師質土器の炮烙鍋及び羽釜である。61、62は口縁部が外折するいわゆる瀬戸内系の炮烙で、内耳に円孔を2箇所をあける。よく使用されており、外面に煤が付着、内面は摩滅し光沢を持つ。64は火鉢とみられる厚手の土師質土器で、底面縁に突起状の脚をもつ。65は瓦質土器である。底のない丸みを帯びた筒状のもので、最大径は24.2cmを測る。正面に大きな「窓」、側面から背面に円孔3を持っており、七輪や焔炉などの中子とみられる。67はふいごの羽口である。滓状のもの、炉壁片もわずかながら認められる。同様のものがSD321などで出土しており、SP334では多量の炉壁とともに廃棄されている。後述するが、SP334は17世紀初頭の遺構と考えられ、SD320などで出土するものは量もわずかであり、混入したものであろう。68、69は厚さ1cm程度の板状の上製品で、揚羽蝶や唐草紋(?)をスタンプ状に陰刻している。何らかの「型」あるいはスタンプと見られるが、表面に火熱を受けたような様子はない。70は素焼き手づくねの犬土製品、71は備前焼の鯉とみられる魚の頭部で、置物などの一部と見られる。72～74は漁網錘で、下



104



105



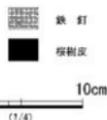
106

層遺構からの混入である可能性が高い。

75～80には金属製品をあげている。75は小柄の鞘とみられ、銅、または青銅製と思われる。①は関連資料としてあげた包含層出土のもので、表面に旗などの彫刻を入れた薄い金属板を貼り付けている。76、77と②は鉛製の火銃銃の銃弾である。いずれも1.2cm程の直径で型の合わせ目痕が残る。78は銅製とみられる鈴である。筒などは残っていないが、内部に5mm大の小礫が入っていた。79、80は渡来（しやうぼう）銭である。北宋（しやうほう）の祥符通寶（じやうぶつうほう）(79)と元祐通寶（げんゆうつうほう）(80)だが、元祐通寶は文字や背面の鋳出しが非常に悪く模範銭の可能性はある。

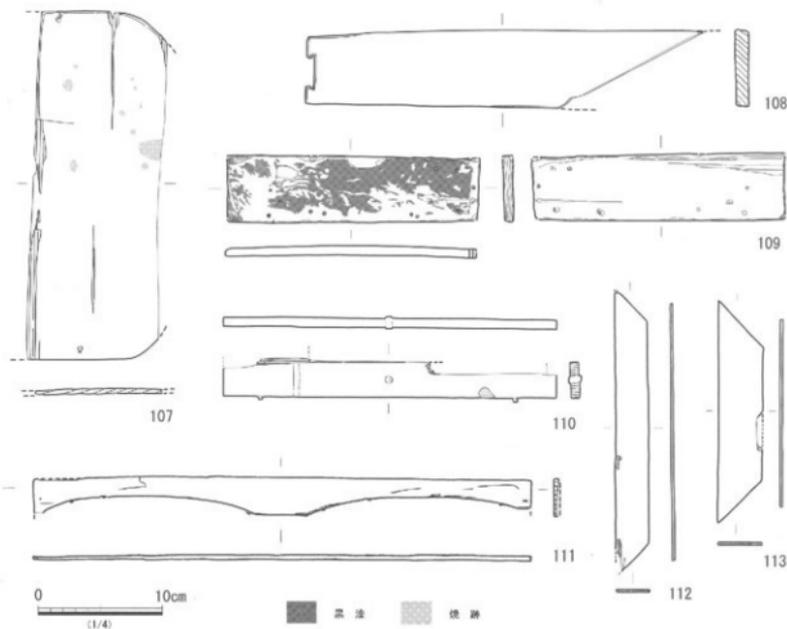
第150図～第158図には木製品をあげている。なお、図示したものは出土した木製品の一部で、これら以外に椀などの破片、白木箸、曲物や桶の部材、性格不明の板材や加工木など多量の木製品が出土している。

81～99は塗物の椀とその蓋である。大部分が外面に黒漆、内面に朱漆を塗っており、外面には朱漆や金泥で文様を入れるものがある。口径10cm程度、浅めで高台の低く、器壁の薄いもの(81～83)、口径12cm程度でやや深いもの(85～87)、口径15cm程度で浅い器形のもの(89、90)、高台の高い深い器形のもの(91～95)



No.	種類	種類・部位	度量(cm)	彫刻・装束等の特徴	備考
101	木製品	柄杓	長径 15.8 / 高さ 14.0	曲物の柄杓。底縁欠損。柄に鉄釘3本。	
103	木製品	柄杓	口径(底径) / 高さ 6.4	曲物の柄杓。底縁欠損。	
106	木製品	柄杓(柄)	長さ 30.4 / 最大幅 3.0 / 厚さ 1.3	曲物の柄杓の部材。その内面に彫刻して小さな図みあり。	

第152図 SD320出土遺物10(1/4)



No.	種類	器種・部位	法量(㎝)	特徴・使用等の説明	備考
107	木製品	筒状容器(胴板)	長さ 28.6×幅 5.3	引動口の残痕あり。端部が折れて、前面部に斜穴と残存。一面に黒塗施。	
108	木製品	楕円板	楕円長さ 40.5×幅 6.5×厚さ 1.1	小穴1つありの熟り込みのみから成形。	
109	木製品	楕円板	長さ 39.5×幅 5.5×厚さ 0.8	長方形の板材。表面に黒塗を塗布。一方の側面に木釘跡。裏面に小穴あり。	
110	木製品	楕円板	長さ 27.4×厚さ 1.0	複雑な形状の板材。側面に木釘と残存。表面にも木釘痕跡。	
111	木製品	楕円板	長さ 39.5×幅 5.2×厚さ 0.5	表面の黒塗。引動口の跡が見え、その側面に木釘跡がある。	
112	木製品	楕円板	長さ 18.5×幅 3.0×厚さ 0.3	表面の黒塗。引動口の残痕あり。	
113	木製品	楕円板	長さ 18.5×幅 3.0×厚さ 0.3	表面の黒塗。引動口の残痕あり。	

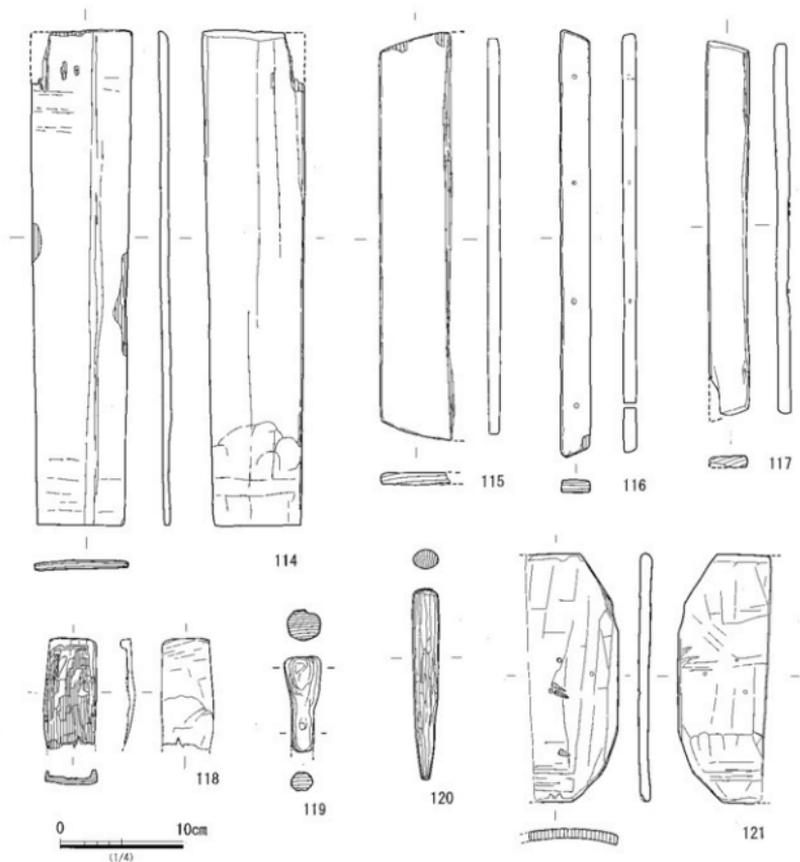
第153図 SD320出土遺物11(1/4)

などのバリエーションがある。また、端反り形のもの(98)、筒丸形のもの(99)もみられる。100は塗物の盤または盆で、口縁部が欠損しているが30cm程度の直径になるものと思われる。

101～103は大きさも様々だが、薄手の円盤状の板材で、曲物類の底板とみられる。側面に木釘が残るもの(101)などがある。104～106は曲物の柄杓である。曲物側面に方形の穿孔をし、そこから斜めに柄を貫通させるものである。柄は104では樹皮で曲物側板と固定し、穿孔に木釘状のものを差し込んで補強している。相当長い柄を持つものようで、折れたためか釘で継ぎ足していたようである。106では曲物側板の痕跡の内側部分に木釘の跡と見られる小穴がある。

107～113は薄手の加工のある板材で木箱や折敷などの部材とみられる。いずれも釘跡や木釘が残存し、組み立てて使用されていたことが分かる。109の様に見えるように表面に黒塗を塗布したものもある。しかし、それぞれどのような形態のものかの部分からは不明である。

114～117は桶の部材と考えられる。114は桶の側板で、外面側上下二カ所にタガの痕跡と見られる圧痕、内面側下端付近に底板の痕跡と見られる圧痕が認められる。115、117は桶の底板と考えられるものである。116は形態上の共通性からやはり桶の底板と考えられるが、一列に四カ所の木釘、釘穴がある。桶内側に仕切りなどを設けたものだろうか。118は小形の割り抜き式容器、119、120は樽など

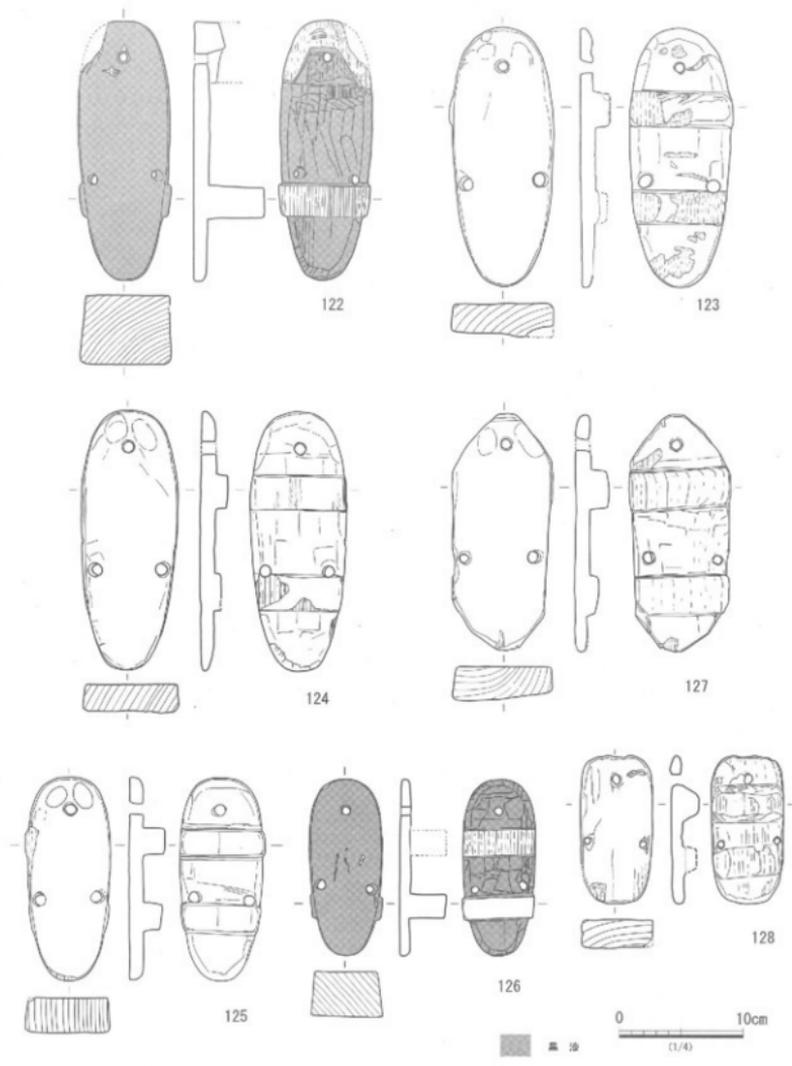


品	種類	形状・部位	寸法(mm)	形状・技法等の特徴	備考
111	木製品	細線材(細板)	長さ 40.6/幅 0.2/厚さ 0.8	外面にクワ痕跡、内面に漆の痕跡が認められる。	
112	木製品	細線材(細板)	長さ 33.6/幅4幅 0.1/厚さ 1.1	羽根部の端部に不規則な凸凹がある。表面は漆で塗られている。	
113	木製品	細線材(細板)	長さ 34.8/幅 2.4/厚さ 1.1	平直な形の板材。羽の断面とみられるが、別に木釘、釘穴が4つある。	
114	木製品	線材(細板)	長さ 20.4/幅 3.0/厚さ 1.0	平直な形の板材。	
115	木製品	小断面材	長さ 19.1/幅 1.5	比較的短く細い板材。	
116	木製品	線材	長さ 11.7/幅 1.5	幅が狭い板材。	
117	木製品	線材	長さ 20.4/幅 1.5	幅が狭い板材。	
118	木製品	板	長さ 11.7/幅 1.5	短く幅が狭い板材。	
119	木製品	釘	長さ 20.4/幅 1.5	比較的短く細い釘。	
120	木製品	線材	長さ 11.7/幅 1.5	幅が狭い板材。	
121	木製品	容器の蓋	長さ 20.4/幅 1.5	浅い皿状の木製品。中央に突起があり、縁をなぞる形に削られている。	

第154図 SD320出土遺物12(1/4)

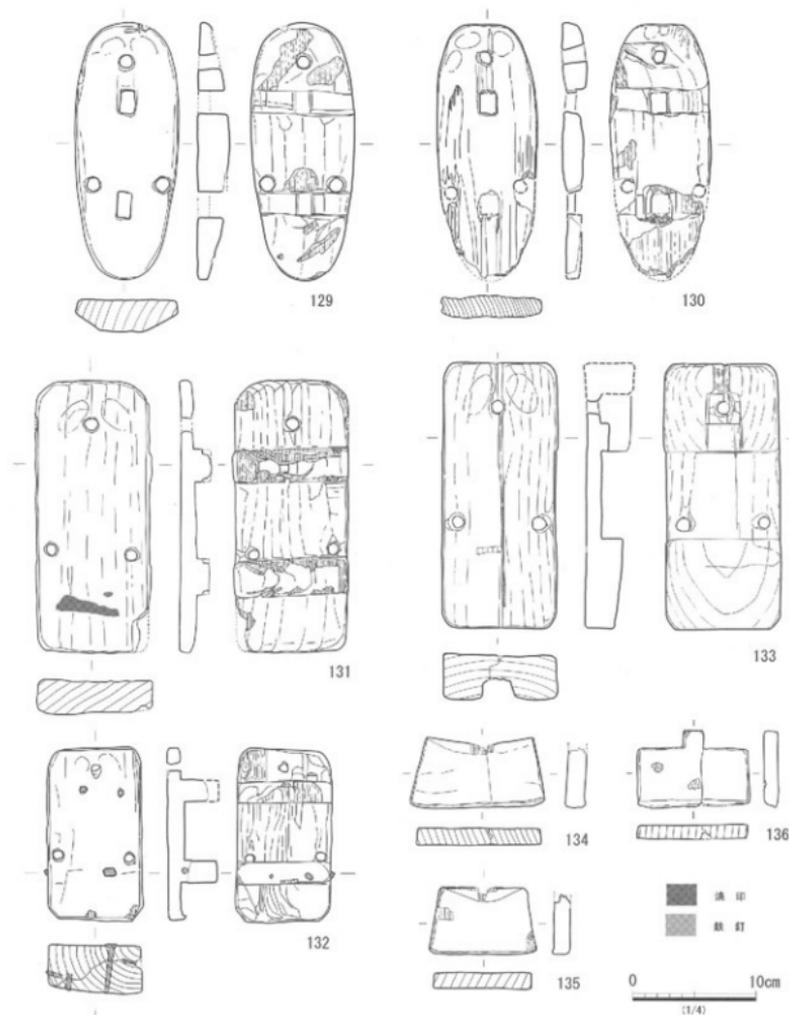
の栓と見られる。121は浅い皿状の木製品で、合子状の容器の蓋と思われる。

122～133には下駄をあげている。丸形のもの(122～126・129・130)と、角形のもの(128・131～133)がある。また、剃り下駄(122・133)、連歯下駄(123～128・131・132)、差歯下駄(129・130)がある。丸形の下駄は残りの悪いものも多いが、大部分は黒漆が塗られていたようである。よく使い込まれたものが多く、132では割れたものを鉄釘で接合して使用している。爪先に残る指の爪痕から左足用、右足用が判別できるものがあるが、形態的には区別できない。134～136は差歯下駄の歯である。下が拡がる



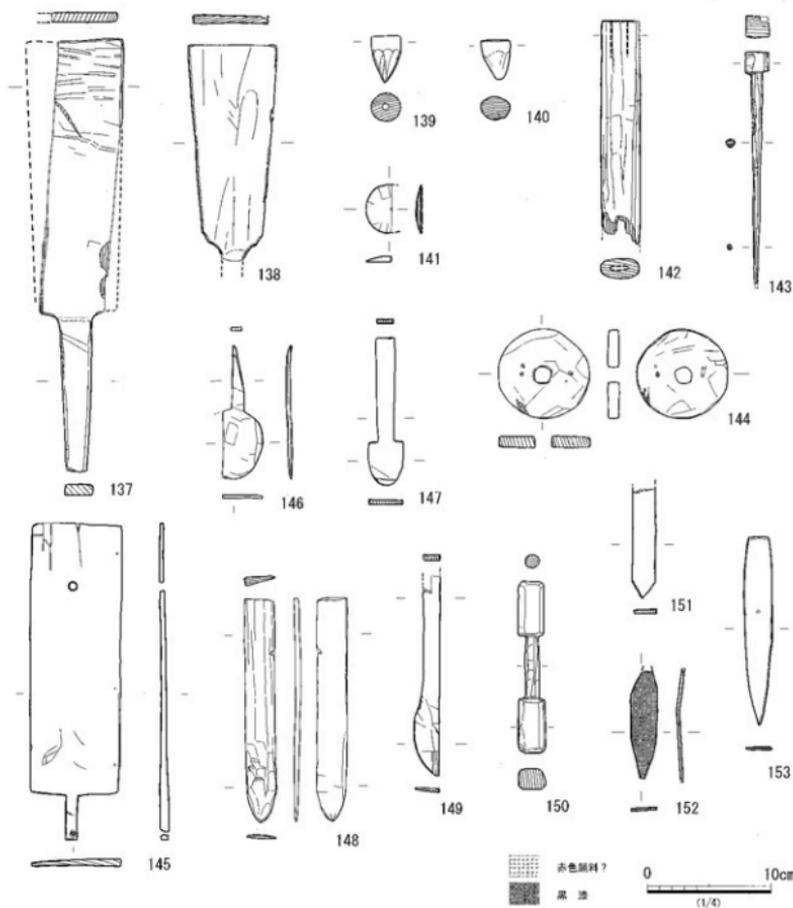
No.	種類	形状・断面	長さ(cm)	底厚(cm)	靴底・紐通等の特徴	備考
122	木製底	底面下駄	長さ 21.2/幅 7.5/高さ 5.7		丸形の縫製下駄。底面全面に漆塗を施す。底先削り曲り欠削。	
123	木製底	縫製下駄	長さ 21.1/幅 8.3/高さ 2.1		丸形の縫製下駄。上面中央に紐通穴。側面、裏面後部に漆塗を施すと思われる箇所。	
124	木製底	縫製下駄	長さ 21.3/幅 7.3/高さ 2.2		丸形の縫製下駄。上面中央に紐通穴。下面に紐通穴に繋ぎとられる糸状物。	
125	木製底	縫製下駄	長さ 19.6/幅 6.9/高さ 2.9		丸形の縫製下駄。上面中央に紐通穴。下面に漆塗とされる糸状物。	
126	木製底	縫製下駄	長さ 14.5/幅 6.9/高さ 5.7		小形丸形の縫製下駄。1/3中央部に漆塗を施す。底先削り曲り欠削。	
127	木製底	縫製下駄	長さ 15.8/幅 8.2/高さ 2.8		梨型内角形の縫製下駄。上面中央に紐通穴。端部が漆塗を施すと思われる。	
128	木製底	縫製下駄	長さ 12.1/幅 5.9/高さ 2.3		小形の丸形の内角形の縫製下駄。端部削り欠削。	

第155図 SD320出土遺物13(1/4)



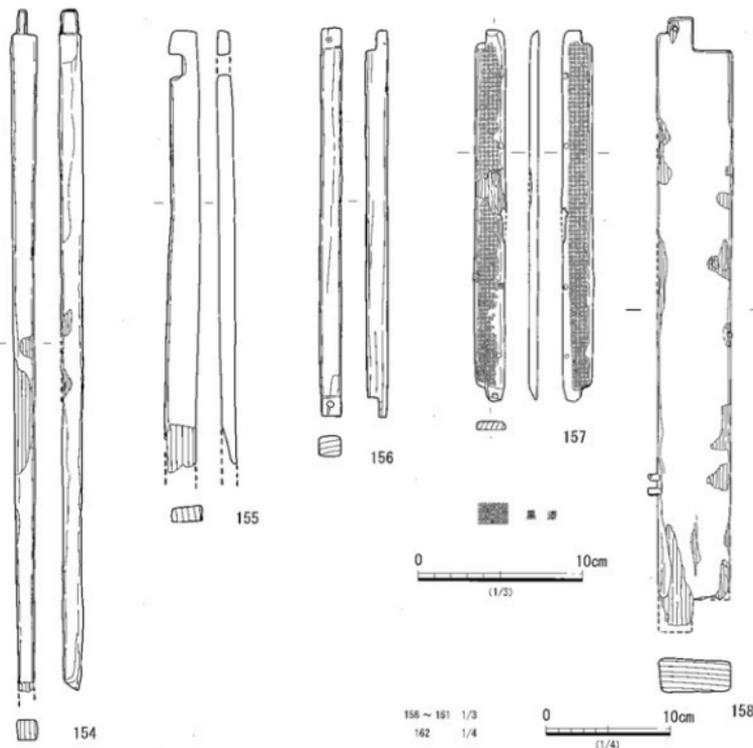
品	種類・部位	法 量(単位)	形制・構造的特徴	備 考
129	木製品	長さ 21.1/幅 8.4/厚さ 2.6	上部の凸部平臥。側面、上面のごく一部に漆塗残存。上面系に透印。	
130	木製品	残存長さ 7.7/幅 8.1/厚さ 3.9	上部の凸部平臥。上部に上を突起。残存状態不良。上面系に透印。	
131	木製品	長さ 22.8/幅 9.3/厚さ 2.9	右側の凸部平臥。上面系に透印。縦横に一寸の彫刻。	
132	木製品	長さ 14.3/幅 7.9/厚さ 3.9	右側の凸部平臥。上面系に透印。大きく開いたものを鉄釘で結合。	
133	木製品	長さ 21.6/幅 9.3/厚さ 3.7	右側の斜り平臥。上面系に透印。	
134	木製品	長さ 15.5/残存高さ 5.8/厚さ 1.7	凸部平臥の側。上部の突起欠失。下部は平臥。小孔、砂多。	
135	木製品	長さ 8.2/残存高さ 5.5/厚さ 1.7	凸部平臥の側。上部の突起欠失。下部は平臥。小孔、砂多。	
136	木製品	長さ 9.1/高さ 9.1/厚さ 1.2	凸部平臥の側。下部は平臥。砂多。	

第156図 SD320出土遺物14(1/4)



No.	種類	器種・部位	寸法(cm)	形状・特殊等の特徴	備考
137	木製品	羽子板	長さ 35.0/幅右端 5.5/厚さ 0.9	表面に無数の鋭利な突起による傷、傷痕部に赤色顔料付。	
138	木製品	羽子板	残存長17.6/幅 7.0/厚さ 0.7	柄欠損。	
139	木製品	輪蓋	長さ 3.8/厚さ 2.4	上部に窪み形状の小孔。	
140	木製品	輪蓋	長さ 3.5/厚さ 2.1		
141	木製品	不明	長さ 3.4/厚さ 0.5	薄く円盤状の木製品。1/4程度厚の板目。中央部に穿孔。	
142	木製品	柄	残存長18.9/幅 3.2/厚さ 1.7	羽物の木釘状の木製品。両面に縦筋あり。縁部は断面円形に加工。	
143	木製品	榫みせ	長さ 7.5/厚さ 1.6	中央部に1.3cm程度の孔のある板状品。その両端に各1個1つの小孔をあける。	
144	木製品	不明	長さ 26.0/幅 7.6/厚さ 0.7	中央部に窪み形状の突起のある板状品。両端部がやや深く、他の小孔がやや浅い。中央付近と両端の小孔に1つ小孔あり。	
145	木製品	不明	長さ 31.0/残存幅 3.2/厚さ 0.3	両端部が板材の一方に先端の孔を挿入の付くへつ状の木製品。	
146	木製品	へつ	長さ 12.1/幅 2.3/厚さ 0.4	片端部が湾曲したへつ状木製品。	
147	木製品	へつ	長さ 18.4/幅 2.8/厚さ 0.7	片端部が湾曲したへつ状木製品。	
148	木製品	へつ	残存長18.4/幅 2.1/厚さ 0.5	メス削のへつ状木製品。	
149	木製品	平筒	長さ 11.1/幅 2.3/厚さ 1.7	両端が丸く、中央部を細く絞る。側面の板材。	
150	木製品	不明	残存長 8.9/幅 1.8/厚さ 0.3	小口部を丸くする薄く板状品。	
151	木製品	平筒	長さ 18.5/幅 2.3/厚さ 0.2	中央部を丸くする薄く板状品。表面に黒漆を塗布。	
152	木製品	不明	残存長 8.9/幅 2.1/厚さ 0.2	小口部を丸くする薄く板状品。中央部に穿孔。	

第157図 SD320出土物15(1/4)



品	種類	材料・形状	寸法(㎝)	重量(g)	形態・技法等の特徴	備考	
154	木製品	杉材	両方全長 9.9	2.6/2.5	1.5	断面に断面比角形の突起を持つ部材。	
155	木製品	杉材	両方全長 27.0	1.9/厚さ 1.0	1.0	断面付近に浅キのある部材。	
156	木製品	杉材	長さ 23.7	厚さ 3.2	1.2	両端に小孔のある突起。	
157	木製品	杉材	長さ 22.8	厚さ 0.6	0.6	表面、断面に黒漆を塗布。木の皮に包んで釘状に刺す。	
158	木製品	杉材	両方全長 69.9	6.1/厚さ 2.9	2.9	両小孔間に突起を持つ部材。断面にリング状の金具が2個で釘付。金具の幅は2.0㎝。	

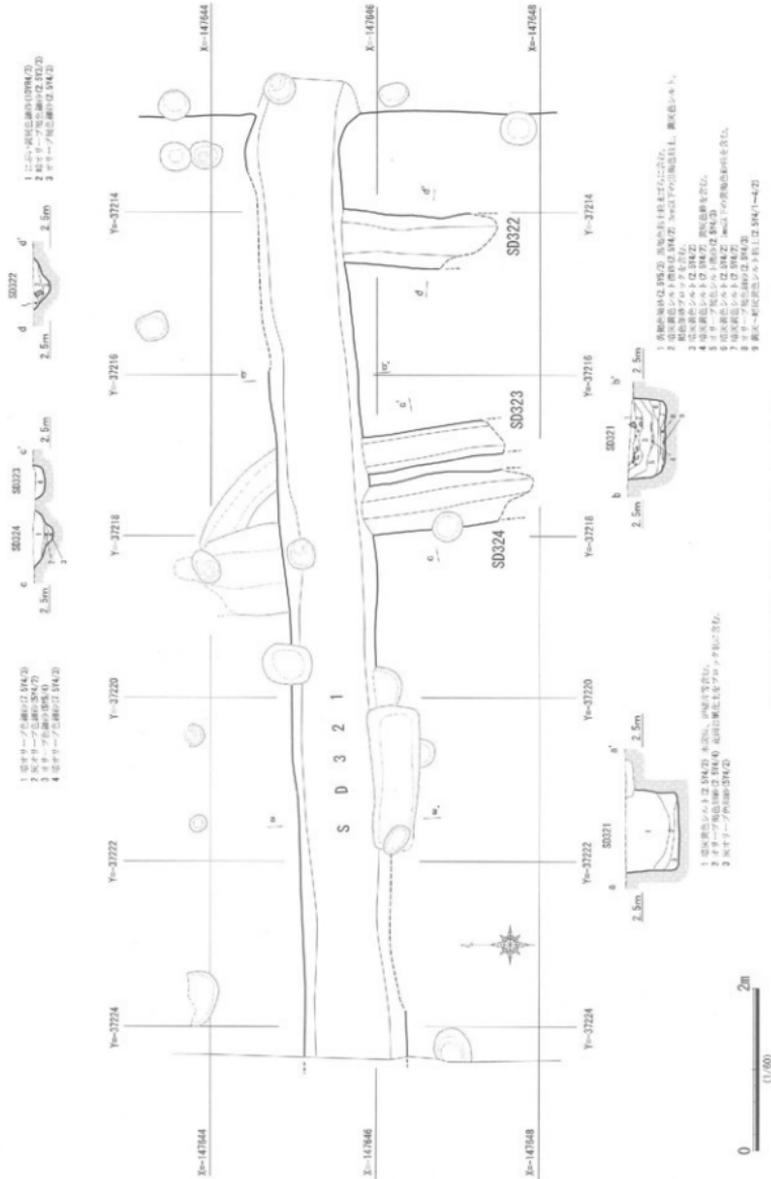
第158図 SD320出土遺物16(1/3・1/4)

ものと括がらないものがあり、下面がつぶれ、砂や小石が食い込んでいる。

137、138は羽子板、139、140は独楽と考えられる。139は元は軸があったのか、上面に小孔を持つ。142は包丁や工具類などの刃物の柄と見られる。144はやや厚手の円盤状の木製品で、紡錘車などの弾み車とみられる。146～149はヘラ状の製品である。用途は不明だが、148、149はヘラと考えてよいものと思われる。150は取っ手状の木製品である。151、153などは片方の端部を尖らせた薄い板材で、何かに取り付けていたような釘穴を持つものもある。文字などはないが札の類であろうか。

154～158は部材類である。154～157はほぼ同じような太さの細い角材で建具などの部材であろうか。157は表裏に黒漆を塗布しており、第153図に挙げたような箱状のものの部材の可能性もある。

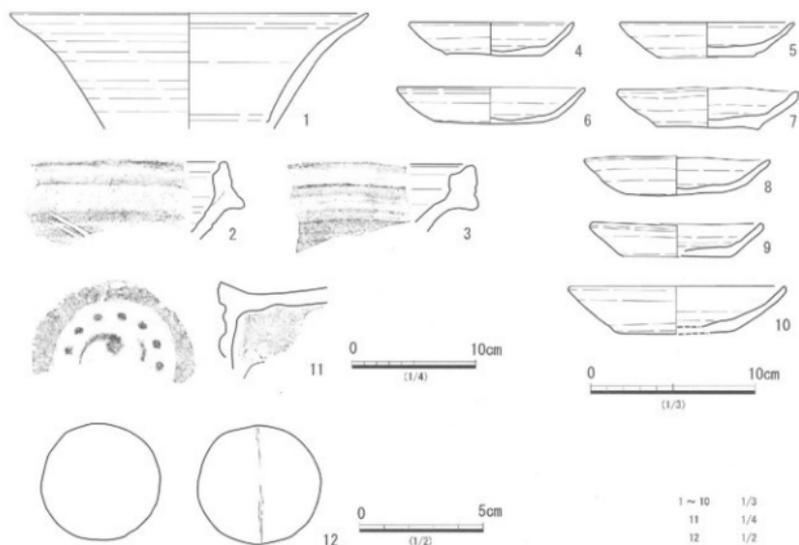
158は大形の板状の部材で、一方の長辺側の側面にリング状の金具を取り付ける。もとは三対付けられていたようで、もう一方の側面には釘がみえる。開閉可能なものの部材、あるいはばら下げて使用するようなものであろうか。なお、金具が側面に付いているため、開閉するものであれば、密閉状態



第159図 SD321・SD322・SD323・SD324 (1/60)

にはならない。

SD320の出土遺物は、肥前産陶器では砂目積みの陶器皿や白化粘土の刷毛目、「三島手」の皿など1610年代から1650年代に生産されたとされるものが目立つ。また、備前焼採鉢の特徴も十七世紀前半代に位置付けられるものである。SD320は縮小しながらも、最終的には1669年の藩学建設時の造成土で埋められており、出土遺物の状況もこれと矛盾しない。なお、SD320からはこのほか、アカニシ、ハマグリなどの貝殻、イヌ、鳥類などの獣骨類が出土している。有機質に富む粘質土が堆積する潜水状態で、食物残渣を含む多量のゴミが捨てられており、環境的にはかなり悪い状態であったことが想像される。



No.	種類	形状・部位	数量(個)	形態・技法等の特徴	粘土等の特徴	色調
1	肥前産陶器	鉢	1号 21.4	1/10程度の縮小。内面及底に刷毛目。	(図1)刷毛目(肥前産)	(内面)赤褐色(白化)粘土(1/3) (外面)黄土(1/3)
2	備前焼	採鉢	口径 125.0	口縁部のみ1/10程度の縮小。内面に砂目積みのスリ目。	(図2)砂目積みの刷毛目を含む(肥前産)	(外面)緑～黒褐色(1/3)黄褐色～黒褐色(1/3)黄土(1/3)(内面)刷毛目(1/3)
3	備前焼	採鉢	口径 125.0	口縁部のみ1/10程度の縮小。内面に砂目積みのスリ目。	(図3)砂目積みの刷毛目を含む(肥前産)	(外面)赤褐色(1/3)黄土(1/3)(内面)刷毛目(1/3)
4	土曜瓦土器	小皿	口径 5.4 高さ 2.1	内外面ともコマナズ。底面に糸織り状。	(図4)1.5cm以下の刷毛目を含む(肥前産)	(内外面)黄土(1/3)
5	土曜瓦土器	小皿	口径 10.5 高さ 2.2	内外面ともコマナズ。	(図5)1.5cm以下の刷毛目を含む(肥前産)	(内外面)黄土(1/3)
6	土曜瓦土器	小皿(肉理直)	口径 11.2 高さ 2.1	内外面ともコマナズ。底面に糸織り状。口縁部内面に横筋。	(図6)1.5cm以下の刷毛目を含む(肥前産)	(内外面)黄土(1/3)
7	土曜瓦土器	小皿	口径 10.7 高さ 2.3	内外面ともコマナズ。	(図7)1.5cm以下の刷毛目を含む(肥前産)	(内外面)黄土(1/3)
8	土曜瓦土器	小皿(肉理直)	口径 11.2 高さ 2.1	内外面ともコマナズ。底面に糸織り状。口縁部内面に横筋。	(図8)1.5cm以下の刷毛目を含む(肥前産)	(内外面)黄土(1/3)
9	土曜瓦土器	小皿	口径 10.2 高さ 2.1	内外面ともコマナズ。底面に糸織り状。	(図9)1.5cm以下の刷毛目を含む(肥前産)	(内外面)黄土(1/3)
10	土曜瓦土器	小皿	口径 13.0 高さ 2.9	内外面ともコマナズ。底面に糸織り状。	(図10)1.5cm以下の刷毛目を含む(肥前産)	(内外面)黄土(1/3)
11	瓦	軒瓦 瓦当	片数 12.9 文数 125.0	片数 2文。瓦当は横筋。瓦当内面にコマナズ。	(図11)1.5cm以下の刷毛目を含む(肥前産)	(内外面)黄土(1/3)
No.	種類	形状・部位	数量(個)	形態・技法等の特徴		備考
12	採石品	磁石	片数 5.9	特定の形状。型割りで目の痕跡あり。		

第160図 SD321出土遺物(1/2・1/3・1/4)

## SD321

SD320の西側には、これと直交してSD321が存在する(第159図)。X=147645.5mライン付近に、調査範囲の端からSD320までの約12mにわたって検出している。SD321は石組みなどを伴わない素堀の状態で、幅約1.0m、底は標高2.05~2.2mで、検出面から50~70cmほど垂直に掘り込まれている。埋土は黒褐色粘土、灰黄色シルト、褐色砂をブロック状に含む暗灰黄色シルト質土を主体としており、人為的に埋められた状況を示している。

出土遺物はさほど多くなく、陶磁器類、土師質土器、瓦類がある(第160図)。また、布状の塊(写真16)や混入したと見られる滓状のもの、炉壁片もわずかながら認められる。

1は肥前産染付磁器の鉢とみられる。見込端に圏線1条が見られる。2、3は備前焼播鉢である。口縁部付近の小破片だが、斜め方向にスリ目がほど超されていることが確認できる。図示していないが、陶磁器類にはほかに、肥前産陶器の甕や志野風の陶器などの小破片が認められる。4~10は土師質土器の小皿である。6、8には口縁部に煤が付着し灯明皿として使用されている。11など瓦類も若干出土している。12は直径4.9cmの鉄製の玉で、大筒の砲弾と考えられる。铸造品であり、型の合わせ目の痕跡が認められる。

布状塊は長さ27cm、厚さ3cm程度の板状の塊で、細かい布目が見え、それが何層にも折り重なって固まったものようである。写真の上面側はやや光沢のある黒色を呈する樹脂状のものが染みこみ、あるいは覆っており、所々に炭化した植物の枝が付着している。塊内部から写真の裏面側は浅黄褐色を呈しており、肌理の細かい泥土状のもので固まっているように見える。分析等を行っておらず、現状ではどのようなものか不明である。

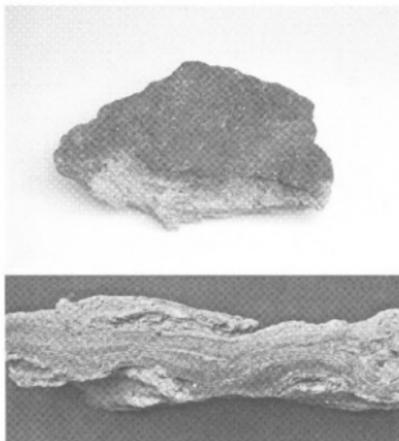
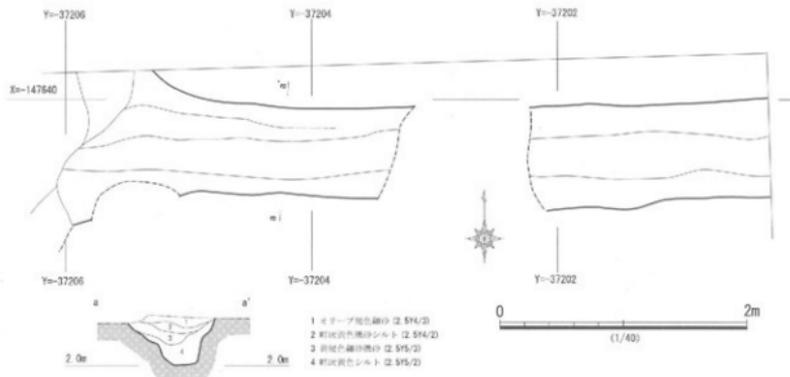
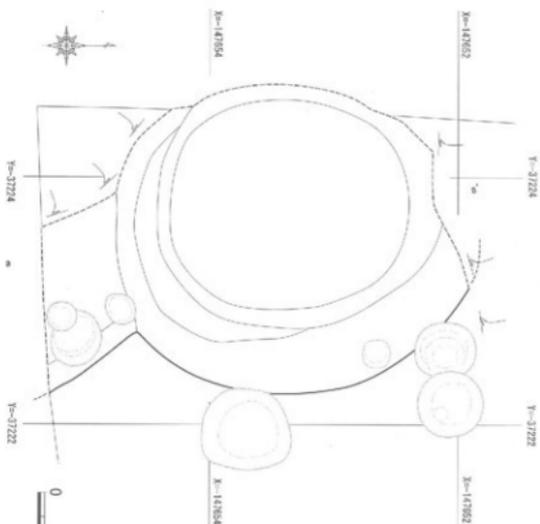


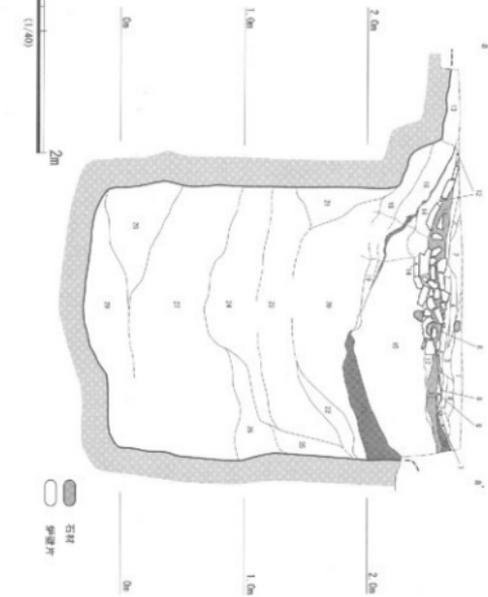
写真16 布状塊とその断面



第161図 SD470(1/40)

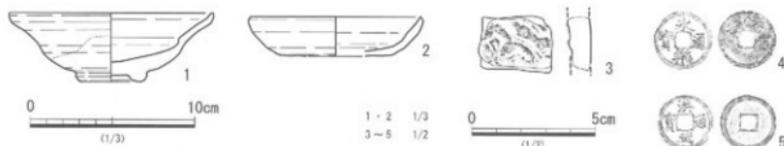


- |    |         |               |         |               |               |
|----|---------|---------------|---------|---------------|---------------|
| 1  | SF334上層 | 黒色粘土層(2.5M) 2 | SF334下層 | 黒色粘土層(2.5M) 1 |               |
| 2  | SF334上層 | 黒色粘土層(2.5M) 2 | 3       | SF334下層       | 黒色粘土層(2.5M) 1 |
| 3  | SF334上層 | 黒色粘土層(2.5M) 2 | 4       | SF334下層       | 黒色粘土層(2.5M) 1 |
| 4  | SF334上層 | 黒色粘土層(2.5M) 2 | 5       | SF334下層       | 黒色粘土層(2.5M) 1 |
| 5  | SF334上層 | 黒色粘土層(2.5M) 2 | 6       | SF334下層       | 黒色粘土層(2.5M) 1 |
| 6  | SF334上層 | 黒色粘土層(2.5M) 2 | 7       | SF334下層       | 黒色粘土層(2.5M) 1 |
| 7  | SF334上層 | 黒色粘土層(2.5M) 2 | 8       | SF334下層       | 黒色粘土層(2.5M) 1 |
| 8  | SF334上層 | 黒色粘土層(2.5M) 2 | 9       | SF334下層       | 黒色粘土層(2.5M) 1 |
| 9  | SF334上層 | 黒色粘土層(2.5M) 2 | 10      | SF334下層       | 黒色粘土層(2.5M) 1 |
| 10 | SF334上層 | 黒色粘土層(2.5M) 2 | 11      | SF334下層       | 黒色粘土層(2.5M) 1 |
| 11 | SF334上層 | 黒色粘土層(2.5M) 2 | 12      | SF334下層       | 黒色粘土層(2.5M) 1 |
| 12 | SF334上層 | 黒色粘土層(2.5M) 2 | 13      | SF334下層       | 黒色粘土層(2.5M) 1 |
| 13 | SF334上層 | 黒色粘土層(2.5M) 2 | 14      | SF334下層       | 黒色粘土層(2.5M) 1 |
| 14 | SF334上層 | 黒色粘土層(2.5M) 2 | 15      | SF334下層       | 黒色粘土層(2.5M) 1 |



- |    |         |               |    |         |               |
|----|---------|---------------|----|---------|---------------|
| 16 | SF334上層 | 黒色粘土層(2.5M) 2 | 17 | SF334下層 | 黒色粘土層(2.5M) 1 |
| 17 | SF334上層 | 黒色粘土層(2.5M) 2 | 18 | SF334下層 | 黒色粘土層(2.5M) 1 |
| 18 | SF334上層 | 黒色粘土層(2.5M) 2 | 19 | SF334下層 | 黒色粘土層(2.5M) 1 |
| 19 | SF334上層 | 黒色粘土層(2.5M) 2 | 20 | SF334下層 | 黒色粘土層(2.5M) 1 |
| 20 | SF334上層 | 黒色粘土層(2.5M) 2 | 21 | SF334下層 | 黒色粘土層(2.5M) 1 |
| 21 | SF334上層 | 黒色粘土層(2.5M) 2 | 22 | SF334下層 | 黒色粘土層(2.5M) 1 |
| 22 | SF334上層 | 黒色粘土層(2.5M) 2 | 23 | SF334下層 | 黒色粘土層(2.5M) 1 |
| 23 | SF334上層 | 黒色粘土層(2.5M) 2 | 24 | SF334下層 | 黒色粘土層(2.5M) 1 |
| 24 | SF334上層 | 黒色粘土層(2.5M) 2 | 25 | SF334下層 | 黒色粘土層(2.5M) 1 |
| 25 | SF334上層 | 黒色粘土層(2.5M) 2 | 26 | SF334下層 | 黒色粘土層(2.5M) 1 |
| 26 | SF334上層 | 黒色粘土層(2.5M) 2 | 27 | SF334下層 | 黒色粘土層(2.5M) 1 |
| 27 | SF334上層 | 黒色粘土層(2.5M) 2 | 28 | SF334下層 | 黒色粘土層(2.5M) 1 |
| 28 | SF334上層 | 黒色粘土層(2.5M) 2 | 29 | SF334下層 | 黒色粘土層(2.5M) 1 |

第162図 SF334 (1/40)



品	種類	種類・部位	寸法(mm)	形態・技法等の特徴	出土層の詳細	出 産
1	肥前産陶器	皿	直径 4.3 2.2 4.2 1.2	1/3層位の厚さ。高直縁。内面裏面に胎土目痕。	(胎土)胎土の痕跡を多く含む (陶器)良好	(層位)II-15(16677) (伊原-船山)に属する遺物(16677)
2	土師質土器	小皿	直径 4.3 3.1 10.3 3.1	1/3層位の厚さ。内外面ともツラム。底面に赤褐色の斑を多く含む。	(胎土)胎土の痕跡を多く含む (陶器)良好	(層位)II-15(16677) (伊原-船山)に属する遺物(16677)
3	土師器	平皿	径 3 0.9	表面に菱形の文様。唐草紋を印刷。表面の酸化層なし。	(胎土)胎土の痕跡を多く含む (陶器)良好	(層位)II-15(16677) (伊原-船山)に属する遺物(16677)

品	種類	種類・部位	寸法	形態・技法等の特徴	出 産
4	渡来銭	永樂通寶	径 23.6mm 厚さ 0.5mm		SP317層位
5	渡来銭	洪武通寶	径 22.9mm 厚さ 1.1mm		SP317層位

第163図 SP334出土遺物1(1/2・1/3)

SD321は出土遺物の特徴からも、SD320と一定の段階同時に存在した溝と見られ、武家塚敷地の区画溝、排水溝などと考えられる。なお、SD320には西側にSD343、東側にSD470が、SD321にはSD322、SD323、SD324といった溝状遺構が取り付いており、同様の区画溝や排水溝などと考えられる。

## SD470

SD470はSD320の東側に直交して、X=147640.5mライン付近に検出した溝状遺構である(第161図)。SD320から調査範囲内約6mにわたって検出しており、調査区外へと続いている。幅約70cm、底は標高約2.0mを測る。出土遺物はほとんどない。SD320側でやや幅が拡がり、深さも若干深くなっており、これもSD320に合流する城下の区画溝と考えられる。

## SP334

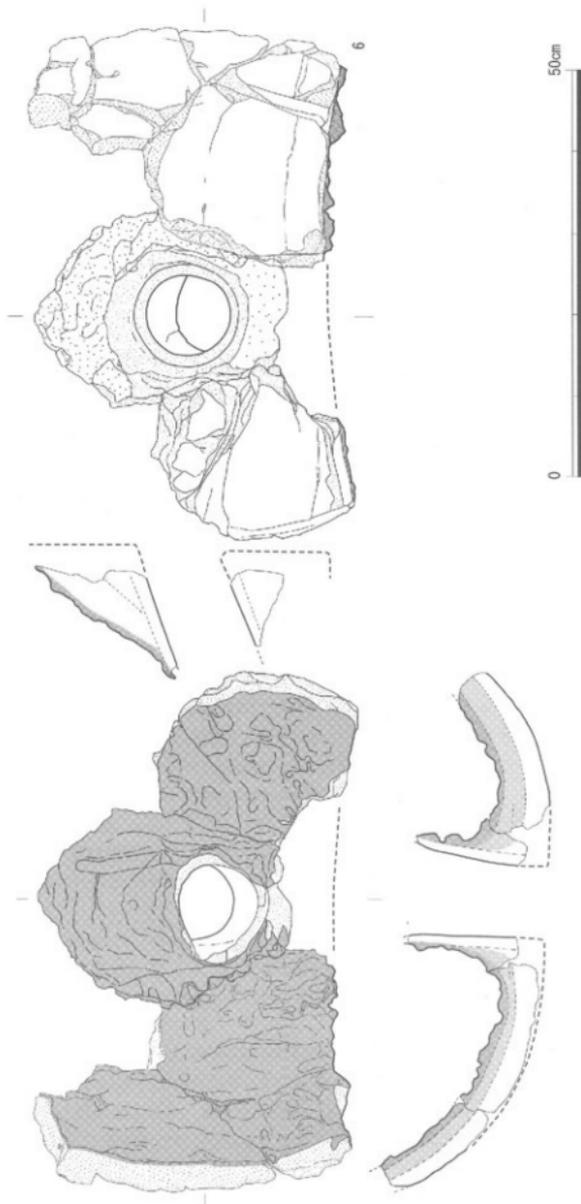
SP334は調査範囲の南西端、X=147653.0m、Y=37224.0m付近に検出した大形の土坑である(第162図)。直径約3mのほぼ円形で、底面は標高-0.3m、検出面からほぼ垂直に約3m掘り込んでいる。石組みなどはなく素掘りの井戸状ではあるが、径が井戸としては大きく性格は不明である。埋土は標高1.8m付近までの下層は黒色粘土、灰色粘土、オリーブ灰色粘土、黄灰色シルトをブロック状に多量に含んでおり、人的に埋められている(第162図18～29層)。その上に炭化物層(16層)、炭化物、焼土塊を多量に含む層(17層)がのり、さらに黒褐色シルト、黄灰色粘土シルト、灰オリーブ色シルト、灰色シルトなどのブロックからなる層(15層)で埋められている。上層には炭化物や焼土塊の他、炉壁や滓状の物質が多量に含まれている(11、12層)。埋土や周辺の土層は焼けたり熱を受けた様子はなく、これらの炉壁は投棄された状況と見られる。

出土遺物はごくわずかに肥前産陶器、土師質土器片などが数点出土しているにすぎない(第163図)。

1は肥前産の陶器皿で見込に胎土目痕を残す。3は表面に菱形の文様、唐草紋(?)を陰刻した板状の土製品で、SD320出土の第149図68、69と同種のものと思われる。4、5は渡来銭で、明の永樂通寶(4)と洪武通寶(5)である。

炉壁はコンテナ20箱ほどの量が出土しており、胎土の特徴に二種類が存在する(第164～166図)。

6、7は8mm以下の石英、長石粒を多量に含む胎土を持つもので、器壁の厚さは約4cm、破片の円弧の状況から内径60cmほどの円形の炉となるものと思われる。破片の量は次にあげる胎土のものよりやや多い。8は胎土に炭化した初炭を多量に含むもので、器壁の厚さは約6cm、内径約60cmの円形の炉であると考えられる。いずれも内面が強い熱を受け、胎土中の石英、長石が浮き出したようになり、ガラス質の滓状の物質が付着する。



形状部分

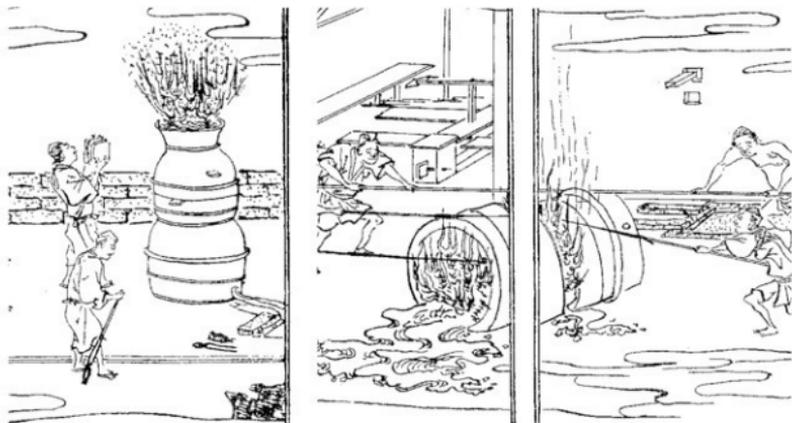
装綴部分

編 号	種 名	素材・形状	測 量 (cm)	製法・装綴部の特徴	出土層の位置	色 澤
6 (1/8)	土器	土器片 口縁部 口径約 10.5 高約 1.5	口径約 10.5 高約 1.5	口縁部は比較的平直で、内面には凹みがあり、口縁部には装綴部がある。装綴部は口縁部から内面に沿って付着している。口縁部には装綴部がある。装綴部は口縁部から内面に沿って付着している。	第164図 SF334出土遺物2 (片断) (1/6)	灰褐色 装綴部は黒褐色

第164図 SF334出土遺物2 (片断) (1/6)







第167図 絵図に見える精錬炉(天保六年江戸橋場精錬座絵図より)

へ厚く約6cmを測る。9～13は送風孔部分の破片で、胎土は6、7と同じ特徴を持つ。

14、15はふいごの羽口と考えられる破片である。外径は約9cm程度で、炉壁の送風口の径にほぼ一致する。

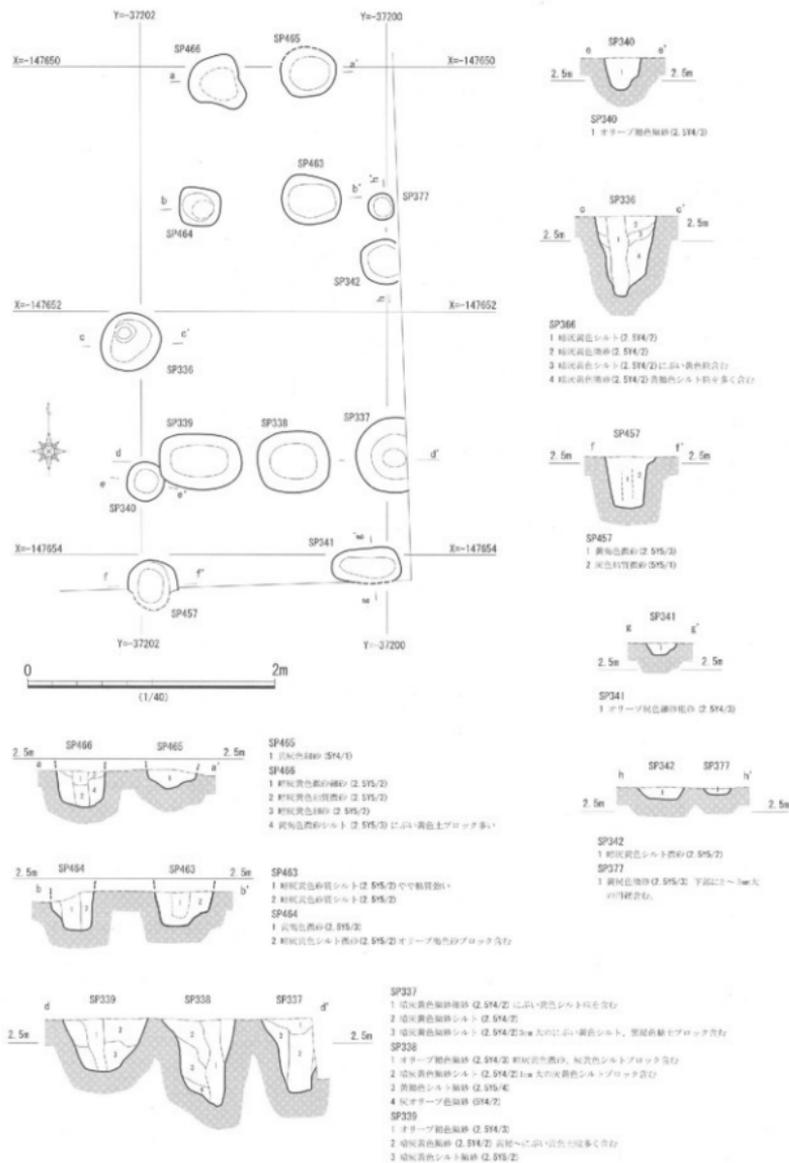
16～18はるつぼとみられる土製品の破片である。18の外面下部に滓状の付着物がある以外は使用された痕跡はない。また、炉壁や羽口には鉄製品が付着するものが複数見られる。残存状態が悪く、炉壁などを壊さないと取り出せないものも多いため、形態が分かるものはほとんどないが、19はその内の1点である。長さ6.6cm、幅2.6cmを測る鉄製の楔であり、先述の金輪や金属板を締めたり、羽口を受ける円筒状の土製品を固定するために挿入されたものとみられる。

これらの炉壁は分析等を行っていないため定かではないが、滓状部分には所々緑青が浮き出した部分があり、銅の精錬炉である可能性が高い。全形を復元するのは困難だが、8のような底が丸いものの上に、6、7のような送風口を持つものが漆喰で接合され、さらに何段か筒状のものを重ね、外側を細い鉄板と金輪で絞めたものと考えられる。6、7と8は胎土が異なり別個体の可能性もあるが、一基の炉を構成するものと思われる。なお、第167図は『大日本貨幣史』付図に収録された天保六年江戸橋場精錬座絵図の一部である<sup>(1)</sup>。天保通寶の製作工程を解説した絵図であり、大吹所の場面に精錬炉が見える。いわゆる瓶炉と呼ばれるものであり、出土した炉壁はこうした形態のものと思われる。

SP334は炉壁が多量に投棄された特徴的な遺構ではあるが、それ以外の出土遺物が少なく時期を限定することが困難である。しかしながら、胎土目の肥前陶器は十六世紀末から1610年代に生産されたものとされ、1点のみの出土ではあるが、岡山城三之外曲輪造成当初の段階に遡る遺構である可能性がある。また、直接精錬が行われた部分などは調査範囲からは検出されていないが、炉壁が多量に投棄された状況からも付近に、おそらく銅の精錬関係の構造物があったものと見られ、三之外曲輪の造成や城内の整備段階にそれに資材を供給する工房などである可能性が考えられる。

### SP336 ほか柱穴群

調査範囲の南西部付近からは、SP336などの柱穴を集中的に検出している(第168図)。やや径も小さく、浅いSP377、SP340、SP341、SP342を除くと、柱根痕が観察できる。SP337、SP338、SP339が約80cm間隔で並ぶように見え、SP463、SP464、SP465、SP466もそれぞれの間隔が約80cmと共通しており、これら



第 168 図 SP336 ほか柱穴群 (1/40)

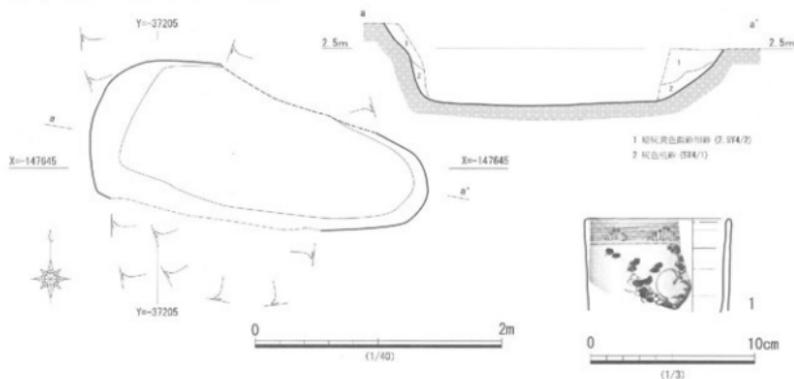
の柱穴で掘立柱建物となる可能性がある。小規模な庇付きの建物が想定されるが、約80cmという柱間は建物の柱間としてはやや狭いように思われ、柱穴の深さも様々である。調査範囲外にどのように続くのかも分からず、建物であるかどうか断定することはできない。

出土遺物はほとんどないが、SP465からは茶人とみられる小片が出土している(第169図)。これは口径3.4cm程に復元できるごく小さなもので、内外面に鉄軸をかける。瀬戸あるいは美濃産の陶器とみられる。

## SP363

SP363はX=-147645.0、Y=-37204.0付近に検出した長楕円形の土坑である。中央部を上層遺構によって失っているが、長径約2.7m、短径約1.3m、底面は標高2.0m付近で遺構面から約70cm程度掘り込まれている。埋土は暗灰黄色～灰色の砂質土である。形態的にはゴミの廃棄土坑状であるが、遺物はさほど多くなく、埋土の状況からもその可能性は低い。

遺物は肥前産の染付磁器片、土師質土器片が少量出土している。いずれもごく小破片である。1はそのうち最も大きな破片で、肥前染付磁器の碗である。口縁部の1/4周程度の破片であり、口縁部外面に雷文、外面に花卉文を施している。

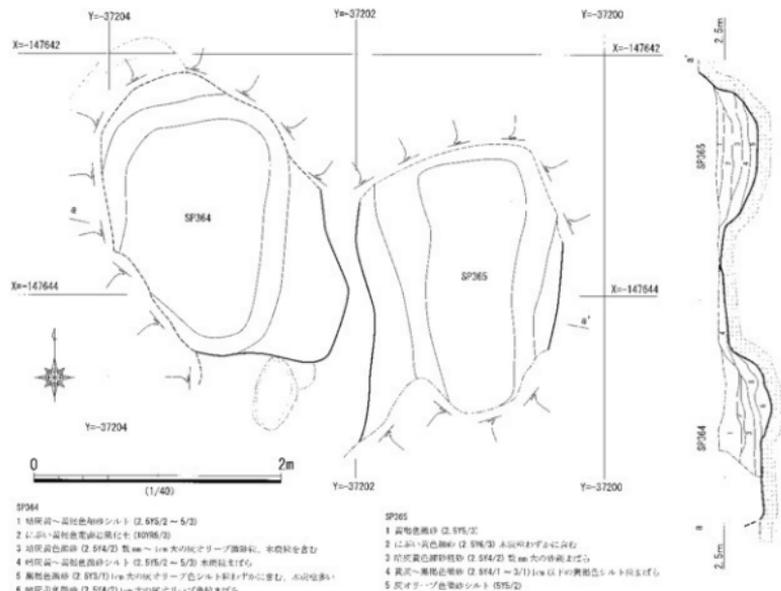


No.	種類	形状・形位	寸法(cm)	形態・装束等の特徴	出土層の特徴	色 調
1	肥前染付磁器	碗	口径 3.4	口縁部1/4周破片、外面に雷文、口縁部外面に雷文。	(図) 3層目 (図) 3層目	(図) 3層目(暗灰黄色～灰色) (表) 肥前産(17104.7)

第170図 SP363(1/40)と出土遺物(1/3)

## SP364・SP365

SP364はX=-147643.5、Y=-37203.5付近、SP365はX=-147644.0、Y=-37201.0付近に隣接して検出された土坑である。どちらも南北を旧西校舎基礎によって失っており、正確な規模は分からないが、長径2～3m、短径1.5～2m程度の楕円形ないし隅丸方形で、底は標高2.1～2.2mを測る。両者は浅い掘り込みでつながったような状態になっており、切り合い等は観察できなかった。埋土はどちらも黄褐色～暗灰黄色の砂質土を主体にしており、埋土下部には黒褐色微砂質土(第171図)SP364第5層、SP365第



第171図 SP364・SP365(1/40)

4層)がある。黒褐色上層を中心に瓦片や陶磁器類など遺物を含んでいるものの、その量は決して多くない。SP363と同じく、形態的にはゴミの廃棄土坑状であるが、黒褐色土層もゴミなどの廃棄のために形成されたものとは考えられず、その可能性は低い。SP363とは位置も隣接しており、同じような性格の土坑群とみられるが、その性格は不明である。

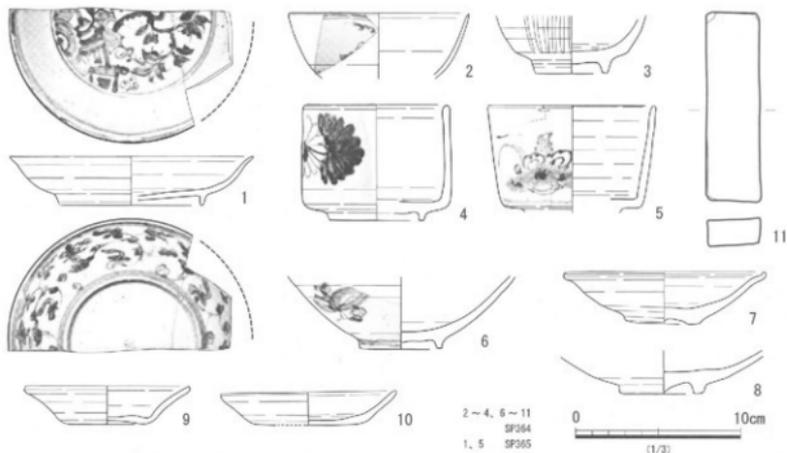
出土遺物には陶磁器類、土師質土器のほか、砾石、瓦類がある(第172図)。1、2は中国(景德鎮)製とみられる染付磁器である。非常に薄手のつくりで、1の高台部には丁寧な釉剥ぎが認められる。3～6は肥前産の染付磁器である。3、4、6の高台部には砂が付着しており、砂目積みの製品であることが分かる。7、8は肥前産の陶器皿である。7には口縁部に煤が付着しており、灯明皿として使用されたと見られる。

#### c) 小結—藩学以前の調査区周辺—

近世遺構面3はこれまで述べてきたとおり、岡山城三之外曲輪が造成される慶長6～7年(1601～1602)から岡山藩藩学が開校する寛文9年(1669)の間の六十数年間の遺構面である。検出された遺構は溝を中心とするもので、決して十分な内容とはいえないが、絵図類を参考に調査区で検出された遺構群の性格、変遷について若干触れておきたい。

#### 城下図と調査範囲

岡山城の城下図のうち、藩学開校以前のものには池田家文庫(岡山大学付属図書館蔵)中の「岡山古岡



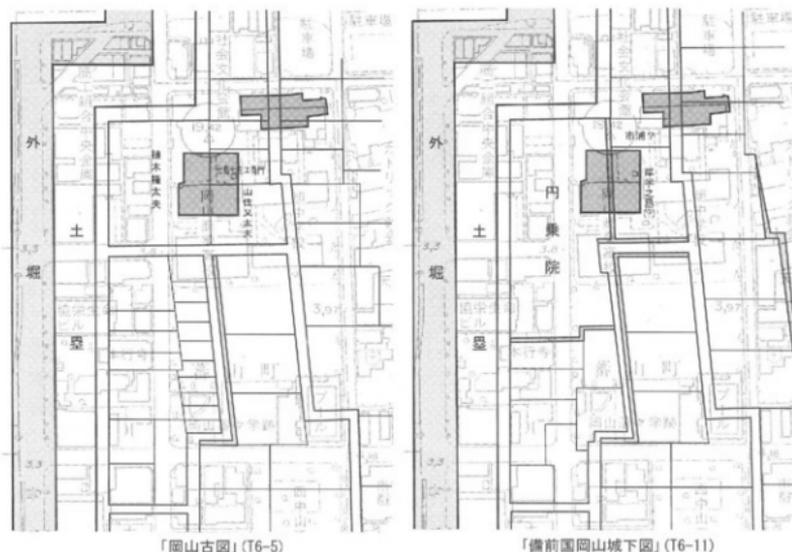
No.	器種	器種・部位	寸法 (cm)	形態・技法等の特徴	胎土等の特徴	色 澤
1	中層板付鉢型 （器底付）	口縁	11.5 9.5	高台部輪張り、外面に唐草文、口縁部外周には、流台外周に3本の圓形、内周に3本の圓形、流、唐草、口縁部内周に見出しに2本の圓形。	(胎)土質白 （釉）黄緑	(胎)流台付鉢-明徳院(C. 9639/1) （器底付）(9639)
2	中層板付鉢型 （器底付）	口縁	10.5	口縁程度の流汗、外面に流、草文、口縁部外周に2本の圓形。	(胎)土質白 （釉）黄緑	(胎)流台付鉢-明徳院(C. 9639/1) （器底付）(9639)
3	肥前焼型 鉢	口縁	10.5	口縁程度の流汗、高台部付に口縁部、外面に流の筋線。	(胎)土質白 （釉）黄緑	(胎)流台付鉢-明徳院(C. 9639/1) （器底付）(9639)
4	肥前焼型 鉢	口縁	10.5	口縁程度の流汗、高台部輪張り、流汗付唐草文、外面に流筋。	(胎)土質白 （釉）黄緑	(胎)流台付鉢-明徳院(C. 9639/1) （器底付）(9639)
5	肥前焼型 鉢	口縁	10.5	口縁程度の流汗、高台部付に口縁部、外面に流の筋線。	(胎)土質白 （釉）黄緑	(胎)流台付鉢-明徳院(C. 9639/1) （器底付）(9639)
6	肥前焼型 鉢	口縁	10.5	口縁程度の流汗、高台部付に口縁部、外面に流の筋線。	(胎)土質白 （釉）黄緑	(胎)流台付鉢-明徳院(C. 9639/1) （器底付）(9639)
7	肥前焼型 鉢	口縁	10.5	口縁程度の流汗、高台部付に口縁部、外面に流の筋線。	(胎)土質白 （釉）黄緑	(胎)流台付鉢-明徳院(C. 9639/1) （器底付）(9639)
8	肥前焼型 鉢	口縁	10.5	口縁程度の流汗、高台部付に口縁部、外面に流の筋線。	(胎)土質白 （釉）黄緑	(胎)流台付鉢-明徳院(C. 9639/1) （器底付）(9639)
9	肥前焼型 鉢	口縁	10.5	口縁程度の流汗、高台部付に口縁部、外面に流の筋線。	(胎)土質白 （釉）黄緑	(胎)流台付鉢-明徳院(C. 9639/1) （器底付）(9639)
10	肥前焼型 鉢	口縁	10.5	口縁程度の流汗、高台部付に口縁部、外面に流の筋線。	(胎)土質白 （釉）黄緑	(胎)流台付鉢-明徳院(C. 9639/1) （器底付）(9639)
11	肥前焼型 鉢	口縁	10.5	口縁程度の流汗、高台部付に口縁部、外面に流の筋線。	(胎)土質白 （釉）黄緑	(胎)流台付鉢-明徳院(C. 9639/1) （器底付）(9639)

第172図 SP364・365出土遺物(1/3)

J(T6-5)と「備前国岡山城下図」(T6-8～11)が知られている。

「岡山古図」は寛永9年(1632)以前の城下図である。寛永9年は備前岡山藩主池田忠雄の死去に伴い、その子光仲と因幡島取藩の池田光政で国替えが行われた年にあたる。絵図には国替えによる屋敷地の変更が張り紙で表記されている。「備前国岡山城下図」は四枚で城下全体をカバーする絵図で、年号などは記されていないが、慶安年間(1648～1651)のものである。この岡図から、そこに記された寸法、区画整理前の道路配置などを参考に、調査区周辺の状況を現在の地図上に復元したものが第173図である。

「岡山古図」では調査範囲周辺は武家屋敷地であり、調査区のほぼ中央を南北に屋敷地が通っている。「備前国岡山城下図」では西側が円乗院となり、調査区の中央には水路の表現がある。円乗院は天台宗東叡山寛永寺の末寺で<sup>(2)</sup>、『池田家履歴略記』<sup>(3)</sup>には「円乗院は奥国公(池田利隆)の御時より有りし寺にや但し宮内少輔殿(池田忠雄)の時に建てられしか祥ならずいつれに久しき寺にはありて池田の御家より定められし祈禱寺なる」<sup>(4)</sup>とある。寛永7年(1667)、池田光政の宗教政策の一環で祈禱の差し止め、廃寺となっている。



第173図 藩学開校以前の調査区周辺 (1/2,500)

## 城下図と検出遺構

さて、調査区では溝を中心に多数の遺構を検出しているが、出土遺物などからは十七世紀前半代という以上に細分することは困難である。

調査区ではほぼ中央にSD320を検出している。これは「備前国岡山城下図」にみえる水路に相当するとみられる。円乗院歴転の経緯や時期からすれば、SD320上層の石組みを伴う段階がこの絵図の情景にふさわしい。「岡山古図」では水路の表現が調査区より南で止まっており、調査区付近は屋敷境を示す線のみであるが、SD320自体は「岡山古図」の段階まで遡る可能性が高く、屋敷の裏手部分はしっかりした構造物で区画されておらず、潜水した沼のような状態であったと思われる。一方、SD320から分かれているSD321、SD470などはどうであろうか。上の復元がどこまで正確かは分らないが、SD470の付近には「岡山古図」ではちょうど屋敷境がきている。SD321に相当する表現はどちらの絵図にも見えないが、絵図では数十年の間かなり屋敷割りに変化しており、「岡山古図」の前後の段階で西側の広い屋敷地がさらに分割されていた可能性はある。なお、SD320などの出土遺物、特に木製品が、藩学段階のものより非常に多岐にわたっている。絶対量が多いこともあるだろうが、藩学関係の遺構では木札、曲物や塗物など容器類、白木箸がほとんどであったのに対し、羽子板や独楽、下駄のほか様々なものがある。中でも小柄(第149図74)、火銃銃の銃弾(第149図75、76)、大筒の砲弾(第160図12)などは武家屋敷ならではの出土品といえるだろう。特に銃弾類の出土は、絵図からは窺うことができないが、鉄砲や大筒を扱う役職の人物がこの周辺に居住していたことを示している可能性がある。

円乗院に関しては、寺院の存在を窺わせる遺構や出土遺物はほとんどない。強いて挙げれば、SP291から出土している「祭」の文字を彫った木札(第137図1)は、通常の武家屋敷よりは寺院に関わるものである可能性はある。

## 岡山城三之外曲輪の造成と検出遺構

岡山城三之外曲輪は小早川秀秋が慶長6年(1601)に岡山城に入城し、慶長7年(1602)に死去するまでの二年足らずの間に整備されたものといわれている。なかでも外堀はわずか二十日間で掘削されたとされ、「二十日堀」とも呼称される。しかし、先に挙げた「岡山占図」以前の状況を示す史料はほとんどない。

今回の調査では、三之外曲輪の整備される初期の段階に遡る可能性がある遺構はSP334のみである。これもわずかな出土遺物からの類推にすぎず、断定できるものではない。しかしながら、SP334には銅の精錬炉とみられる炉壁が多量に廃棄されており、通常の武家屋敷地の遺構とは性格を異にすることは明らかである。今回、直接精錬などを行ったとみられる遺構は検出していないが、SP334自体、直径、深さとも3m程もある素掘り井戸状の遺構であり、精錬関係の特殊な遺構である可能性がある。報告部分でも述べたが、二之外曲輪の造成や城内の整備段階にそれに資材を供給する工房などである可能性が考えられる。岡山城三之外曲輪、特にその初期に遡る可能性のある遺構が検出されたのは今回が初めてであり、いまだ片鱗にすぎないが、二之外曲輪の開発に直接関係する可能性のある遺構であることは注目される。

なお、本調査では三之外曲輪の造成土と見られる土層を確認している(第70図第XI層)。岡山城二の丸域では花崗岩風化土の造成土が厚く確認されているのに対し、黄褐色砂質土を主体とする純然たる沖積地の土層である。造成土の供給元としては外堀などを掘削した残土が第一に考えられるが、土塁の造成や三之外曲輪の面積を考えると、外堀の残土のみでは到底足りると思えず、周辺の微高地や河道内などからかなりの量の土が供給されているものと思われる。いずれにしても、二の丸域との造成土の差は、二の丸域が主に上級武士の屋敷地であるのに対し、三之外曲輪が主に下級武士の屋敷地として用いられていることや、伝承をそのまま信用するわけにはいかないものの、かなりの突貫工事で造成されていることを反映している可能性がある。

## 注

- (1) 吉田賢輔 1925『大日本貨幣史』大蔵省 付図(佐野英山『銅貨図録』)
- (2) 岡山市史編纂委員会編 1968『岡山市史』宗教・教育編 岡山市
- (3) 齊藤一興 寛政頃?『池田家履歴略記』巻之十一(複製・日本文芸出版 1963『池田家履歴略記』上巻)
- (4) 円樂院は「岡山占図」には見えず、少なくともこの地には光政の代になってから移されたものと見られる。記録がなく『池田家履歴略記』の書かれた寛政頃には分からなくなっていたものであろうか。

## 5 古代遺構面

## a) 遺構面の概要

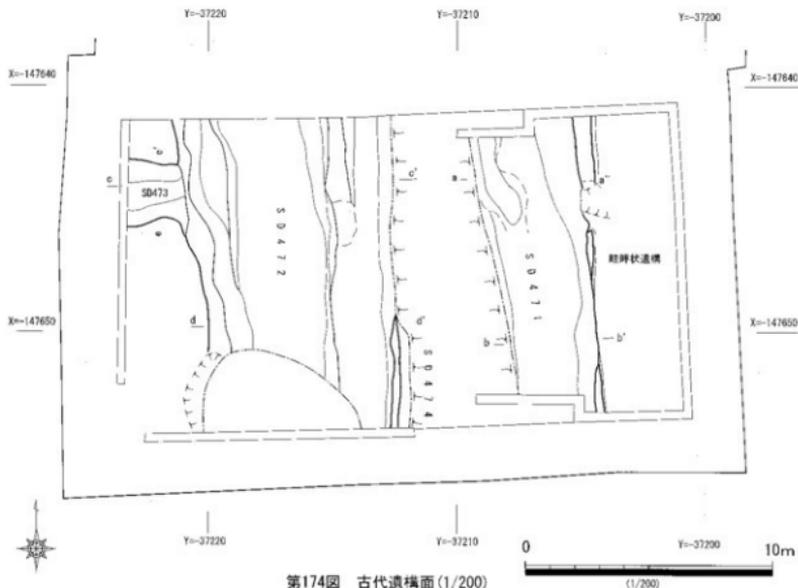
古代遺構面は、洪水砂層とみられる第XIV層の下面にあたり、標高2.0～2.1mを測る。遺構面の基盤となっている第XV層(第XV-②層)は水田耕土とみられる黄褐～オリーブ褐色微砂質土である。検出遺構は、SD471、SD272、SD473などの溝状遺構であり、調査範囲の中央部大半を占めている。SD471の東側には畦畔とみられる帯状の盛土を検出している。

## b) 遺構と出土遺物

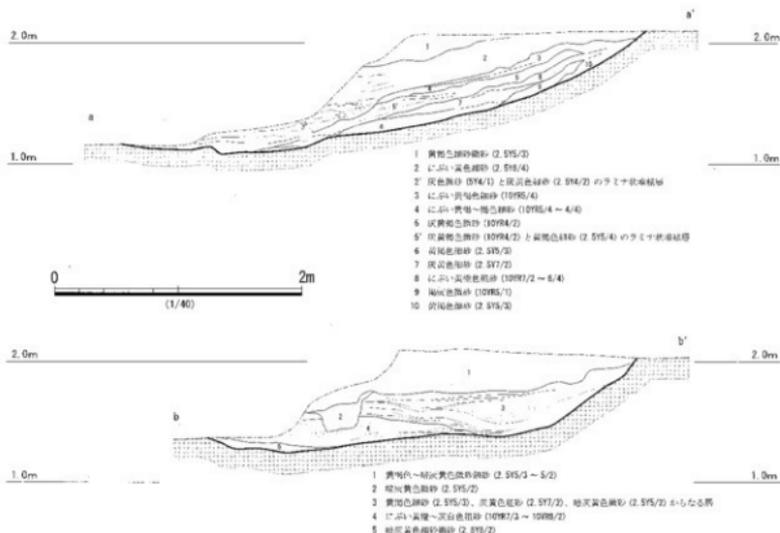
## SD471

SD471は調査区の東より、ほぼ南北方向に検出した溝状の遺構である。底は標高1.0～1.3mであり、深さ0.7～1.1mを測る。西側をSD320により覆されているが、現状で幅3.5～4.2m程であり、もとは幅6m程度の規模であったと見られる。東側の肩には畦畔状遺構が検出されている。溝の斜面は緩やかで皿状の断面を呈している。埋土は黄褐色細砂と灰黄褐色微砂からなるラミナ層を中心とするもので、流水による堆積と判断できる。少なくとも調査区内では南北方向に流れることや、畦畔を伴うことから用水路と考えられるが、斜面の状況や溝断面の形状などあまり人為的な掘方には感じられない。

出土遺物は下層遺構面に由来する弥生土器や古墳時代の土師器の破片が大半を占め、SD471の時期を窺わせるようなものはない。また、SD472などとの層序関係を観察できる部分もないが、埋土の状況な



第174図 古代遺構面 (1/200)



第175図 SD471土層断面(1/40)

だから、SD472などとさほど隔たった時期のものとは思われず、ほぼ同時に存在したものとみてよいだろう。

#### 畦畔状遺構

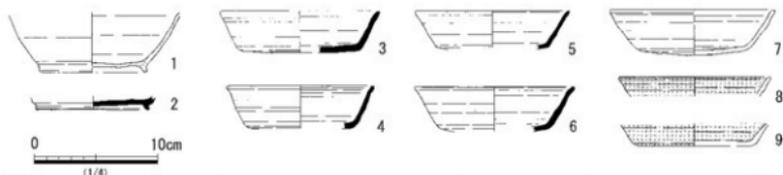
SD471の東側肩に検出した帯状の盛土である。黒褐色シルト質土からなる盛土(第70図XV-①層)であり、周辺の水田耕土と大きく異なっている。盛土の高さは、上面が上層の第XIII層により削平されていると見られるが、現状で約5cm程度である。幅は最大で90cmほどだが、大部分はSD471により削り取られたようになっている。SD471に削られながらもほぼ平行すること、最終的には同じ洪水砂(第XIV層)によって埋没していることなどから、SD471と同時に存在した水田畦畔と考えられる。X=147645、Y=37204付近に盛土のとぎれる水口状の部分があるが、少なくとも調査範囲内にはSD471に堰や杭列などの遺構は残っておらず、取排水のための水口か、洪水などのために盛土が失われた部分かは判断できない。

#### SD472

SD472は調査区のほぼ中央に南北方向に検出した溝状の遺構である。底は標高0.8～0.9mであり、深さ1.1～1.2mを測る。幅は7～9m程であり、東側に幅約2m、標高約1.6mの段状の部分がある。西側にはSD472に直交して、SD473が合流している。埋土は黄褐色細砂、灰黄色砂、にぶい黄色粗砂、暗灰色微砂などからなるラミナ層を中心とするもので、流水による堆積と判断できる。ほぼ南北方向に流れることやSD473が直交することから用水路と考えられるが、やはり斜面の状況や溝断面の形状などあまり人為的な掘方には感じられない。

出土遺物は多くないが、須恵器環や丹塗りの土師器などが出土している(第177図)。これらの土器類は九世紀前半頃のものと考えられ、SD472の時期の一端を示すものと考えられる。





No.	種類	器種・部位	寸法(cm)	形態・装飾等の特徴	出土層の特徴	出 土 地 点
1	土師器	杯	口径内 4.3 底径 3.8	口縁部欠損。内外面ともコナダ。	表土10cm以下の砂状を多く含む (表土) 0.1	(内面) 東側(107B/3) (外面) 北側(107B/3)
2	土師器	杯	口径内 5.7 底径 4.2	幅口の1/2程度の破片。内外面ともコナダ。	(表土) 10cm以下の砂状を少量含む (表土) 0.1	(内面) 東側(106/3) (外面) 南側(106/3-2/3)
3	土師器	杯	口径 12.0 底径 5.1	1/2程度の破片。内外面ともコナダ。底面ナダシ。	(表土) 5cm以下の砂状を多く含む (表土) 0.1	(内面) 西側(107/1-7/1) (外面) 南側(107/1-7/1)
4	土師器	杯	口径 11.0 底径 5.0	1/2程度の破片。内外面ともコナダ。底面ナダシ。	(表土) 10cm以下の砂状を多く含む (表土) 0.1	(内面) 東側(106/3-1/3) (外面) 南側(106/3)
5	土師器	杯	口径 12.0 底径 5.1	口縁部欠損。内外面ともコナダ。底面ナダシ。	(表土) 10cm以下の砂状を多く含む (表土) 0.1	(内面) 東側(107/1-3/1) (外面) 南側(107/1-3/1)
6	土師器	杯	口径 12.0 底径 5.1	1/2程度の破片。内外面ともコナダ。底面ナダシ。	(表土) 10cm以下の砂状を多く含む (表土) 0.1	(内面) 東側(107/1-4/1) (外面) 南側(107/1-4/1)
7	土師器	杯	口径 13.3 底径 5.8	1/2程度の破片。内外面ともコナダ。底面ナダシ。	(表土) 10cm以下の砂状を多く含む (表土) 0.1	(内面) 東側(107/1-5/1) (外面) 南側(107/1-5/1)
8	土師器	杯	口径 12.0	口縁部の1/2程度の破片。内外面ともコナダ。内外面に赤褐色土を施す。	(表土) 5cm以下の砂状を多く含む (表土) 0.1	(内面) 東側(107/1-6/1) (外面) 南側(107/1-6/1)
9	土師器	杯	口径 0.1	幅口の1/2程度の破片。内外面ともコナダ。内外面に赤褐色土を施す。	(表土) 10cm以下の砂状を多く含む (表土) 0.1	(内面) 東側(107/1-7/1) (外面) 南側(107/1-7/1)

第177図 SD472出土遺物(1/4)

## SD473

SD473はSD472の内側に直交する溝状遺構である。幅2.2～2.8m、底は標高1.8～1.9mで、深さ10～20cm程度の浅い溝状遺構である。上層断面(第176図c-c'断面)で見ると、SD472とSD473の埋土に切り合い関係はなく、同時に存在、機能した溝と考えられる。

## SD474

SD472の東側に存在する溝状の遺構である。SD320のため、幅40cmほど、深さ10cm程度の部分が残るのみである。埋土はSD471、SD472の上層部分や第XIV層と共通する黄褐色砂質土である。極めて部分的な検出であるため詳細は不明。SD471の西側の肩である可能性も残される。

## c) 小結

古代遺構面は第1次調査区(北校舎調査区)のIV層上面付近に対応していると考えられる。第1次調査区では、第2次調査区(特別教室棟調査区)の第XIV層に対応する洪水砂は顕著でなく、一部に鋤床状の酸化鉄の沈着が著しい部分があるものの水田耕土とみられる灰黄色粘質土が直接乗っているようである。1次調査のIV層上面は標高2m前後の高さであり、地形的には大きな変化はないようである。1次調査では、この時期に相当する遺構として、溝13、溝15、溝16の溝状遺構が検出されている。これらは、規模などSD471、SD472によく類似しており、出土遺物もほぼ同じのものであるが、いずれも北東から南西の斜めの方向に流れている。それに対し、第2次調査ではSD471、SD472などはいずれも南北方向の溝として検出しており、一見条里に伴う溝や区画とみえる。これらの溝群が同一のものであるか否かは不明といわざるを得ないが、ほぼ同時期の溝群が近接した場所に存在する溝群であり、SD471などの溝群も北側調査区では地形に沿う形で方向が変わっている可能性が高い。

## 6 弥生・古墳時代遺構面

## a) 遺構面の概要

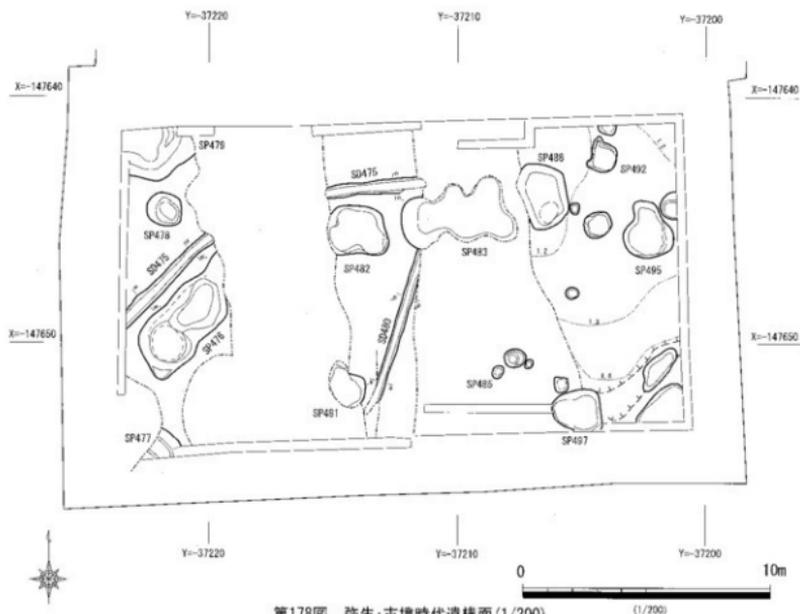
弥生・古墳時代遺構面は主に微高地基盤層である第XVIII層上面にあたる。微高地基盤上面は西側から南側にかけては標高約1.6mの高さがあるが、北東部で谷状に低くなり、標高1.2m程度となっている。谷状部分には低湿地堆積層と見られる暗灰黄色～灰オリブ色粘質土(第XVI層)が堆積しており、一部の遺構はこの第XVI層上面から掘り込まれているようである。

検出遺構は弥生時代後期前半のSD475、SD480の細い溝状遺構のほか、SP476などの不定形の大形土坑が多数認められる。なお、出土遺物は概して少なく、遺構に伴う遺物はすべて弥生後期前半のものだが、遺構検出時などには僅かながら古墳時代とみられる土器片も出土しており、第XVI層上面から掘り込まれている遺構なども古墳時代に下る可能性が高い。

## b) 遺構と出土遺物

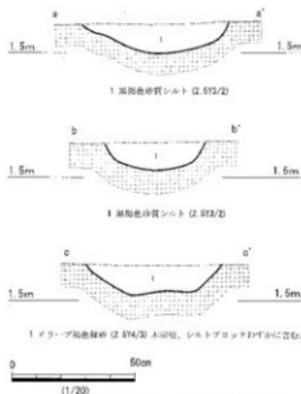
## SD475

SD475は調査区西側から中央部付近にかけて検出した溝状遺構である(第179図)。上層のSD472により一部が失われているが、 $X=-147643.5$ 、 $Y=-37211.5$ 付近から $X=-147649.0$ 、 $Y=-37223.0$ 付近にかけ、緩やかに弧を描きながら存在する。幅40～60cmほどの細い溝であり、底は標高1.5～1.55mと深さも10～15cm程度を測るにすぎない。出土遺物はほとんどなく、弥生土器と見られる微細な破片数点が出土

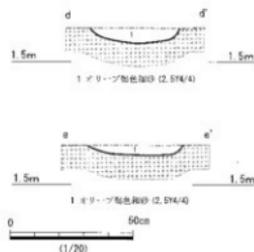


第178図 弥生・古墳時代遺構面(1/200)

(1/200)



第179図 SD475 土層断面 (1/20)



第180図 SD480 土層断面 (1/20)

短頸壺である。口縁部から胴部上半の破片で、外面を斜め方向の細かいハケメとし、内面は横方向のヘラケズリが施される。2、3と4、5は壺形土器であり、接合しないがそれぞれ同一個体とみられる。これらの土器はその特徴から弥生時代後期前半、後期Ⅱ<sup>(1)</sup>に相当すると見られる。

## SP477

SP477は調査範囲の南西角付近に検出した土坑である。上層のSP334と一部調査区外となるが、短径1.5m程の楕円形の土坑のようである。断面形は掘方端部から緩やかに下った後ほぼ垂直に標高0.8m付近まで掘られており、検出面からの深さは約85cmを測る。埋土は0.5～2cm大の灰黄色シルト粒を多く含む黒褐色～灰色粘質土であり、埋め戻された状況とみられる。出土遺物はほとんどない。

## SP478

SP478は調査範囲の西部、X=-147644.5、Y=-37222.0付近に検出したほぼ円形の土坑である(第182図)。直径約1.3m、断面形は掘方端部から緩やかに下った後ほぼ垂直に標高0.75m付近、検出面から約85cmの深さに掘られている。底面はほぼ平らで、完形の壺形土器1点が入れられていた。埋土は、特に上半部は薄い黄灰色シルト質土やオリーブ黒色シルト質土が重なっており、凹みに流入した自然堆積層に見える。少なくとも深さ50cmほどの凹みとして放置されていた可能性が高い。

出土遺物はほぼ底面から出土した完形の壺形土器のみである(第182図1)。外面は縦方向のハケメの

しているのみである。時期は限定できないが、この溝に沿ってSP476、SP482、SP483などが掘られているように見え、何らかの関連がある可能性がある。

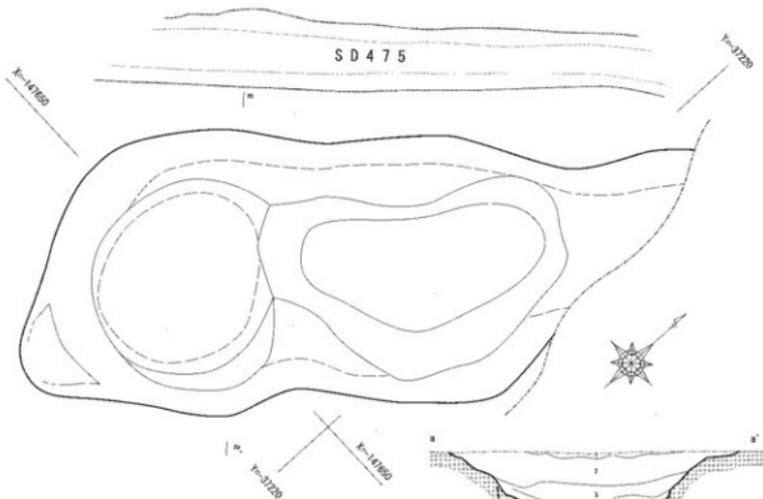
## SD480

SD480は調査区のほぼ中央で北東から南西方向に検出した溝状遺構である(第180図)。幅30～40cm、深さは5～6cmとごく細く、浅い。出土遺物も土器の小片が数点出土しているのみである。

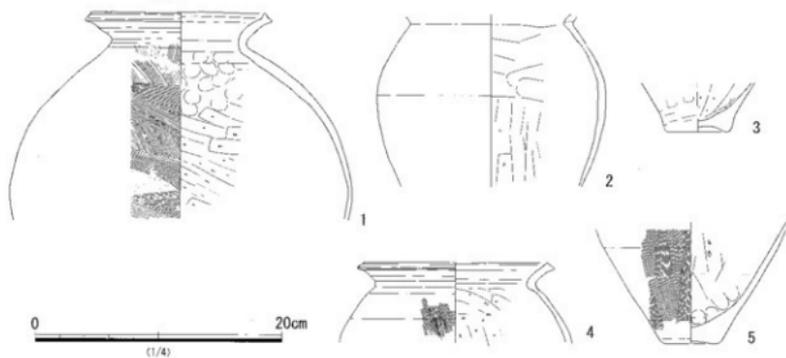
## SP476

SP476はSD475に沿うように検出された、北東から南西に長い不定形の土坑である(第181図)。北東側は上層のSD472に切られているが、長径約5m、短径約2mを測る。土坑の南西部が直径約1.5mの円形に下部の拡がるフラスコ状に深くなっており、一見複数の土坑が重なっているように見えるが、埋土の違いや切り合い等は確認できなかった。底はほぼ平らとなっており、標高約0.7m、検出面からの深さ約95cmを測る。埋土は1～5mm大の黄灰色シルトや黒褐色シルト粒からなる層や1～5mm大の黄灰色シルト粒を多量に含む黒褐色シルトからなっており、埋め戻された埋土とみられる。なお、第181図a-a'断面は埋土掘削前に設定したこともあり、土坑最深部に掛からず、土坑の壁面の一部が掛かってしまっている。

出土遺物は弥生土器が数点出土している。1は弥生土器の



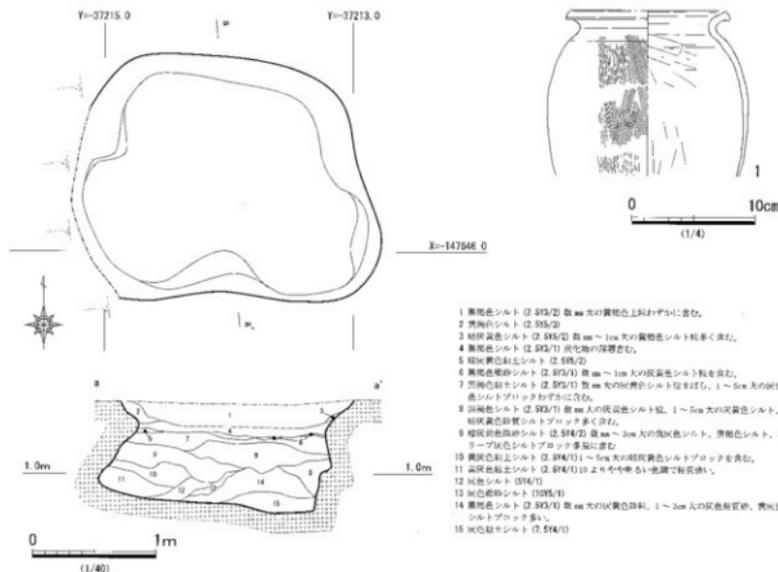
- 1 黄褐色砂シト (375/2)
- 2 褐色黄砂質シト (374/2)
- 3 赤褐色シト (372/1) 5cm 程度の黄褐色シト和を多く含む。
- 4 黄褐色細砂シト (373/1)
- 5 黒褐色シト (372/1) ~ 5cm 程度の黄褐色土層多量。
- 6 黄褐色シト (376/2) ~ 5cm 程度の赤褐色シト和を多く含む。



No.	種類	形状・部位	法量 (cm)	形状・装飾等の特徴	出土層の特徴	色 調
1	弥生土器	甕 一様形一胴型	口径 14.1 最大径 22.6	内面割の方向のハケメ (36和/㎡), 口縁部一様形マナナナ, 内止縁一計の内側のハケメ等。内面割部は黄褐色土質。	(地中) 1.5cm以下の砂粒を多く含む (装束) 良好	(内) 内面割山一両面 (371/1~2, 376/2) (取) 取部白一両面 (371/1~2, 376/2)
2	弥生土器	甕 略形	最大径 18.5	胴部の内面割の進行。内面割は黄褐色土質。内面一両面マナナナ。内面割部は黄褐色土質。	(地中) 1.5cm以下の砂粒を多く含む (装束) 良好	(内) 内面割山一両面 (371/1~2, 376/2) (取) 取部白一両面 (371/1~2, 376/2)
3	弥生土器	甕 略形	口径 5.0	1/2内面割の破片。内面上部マナナナ。内面ハケメ等。口縁部は黄褐色土質。	(地中) 1.5cm以下の砂粒を多く含む (装束) 良好	(内) 内面割山一両面 (371/1~2, 376/2) (取) 取部白一両面 (371/1~2, 376/2)
4	弥生土器	甕 口縁部一両面	口径 (14.8)	1/2内面割の破片。内面割部は黄褐色土質。内面ハケメ等。口縁部は黄褐色土質。	(地中) 1.5cm以下の砂粒を多く含む (装束) 良好	(内) 内面割山一両面 (371/1~2, 376/2) (取) 取部白一両面 (371/1~2, 376/2)
5	弥生土器	甕 略形	最大 5.1	内面割部は黄褐色土質。内面割部は黄褐色土質。内面ハケメ等。口縁部は黄褐色土質。	(地中) 1.5cm以下の砂粒を多く含む (装束) 良好	(内) 内面割山一両面 (371/1~2, 376/2) (取) 取部白一両面 (371/1~2, 376/2)

第 181 図 SP476 (1/40) と出土遺物 (1/4)





- 1 黒褐色シルト (J. 513/2) 数 cm 大の黄褐色土粒がわずかに含む。
- 2 黒褐色シルト (J. 515/2)
- 3 暗灰黄色シルト (J. 515/2) 数 cm ～ 1cm 大の黄褐色シルト粒多く含む。
- 4 黒褐色シルト (J. 513/1) 炭化物の塊を含む。
- 5 暗灰黄色粘シルト (J. 515/2)
- 6 黄褐色粘シルト (J. 513/1) 数 cm ～ 1cm 大の暗灰色シルト粒を含む。
- 7 灰白色粘シルト (J. 513/1) 数 cm 大の黄褐色シルト粒も及び、1 ～ 5cm 大の暗灰色シルトブロック状に含む。
- 8 暗灰色粘シルト (J. 513/1) 数 cm 大の暗灰色シルト粒、1 ～ 5cm 大の黄褐色シルト、暗灰黄色粘質シルトブロック状に含む。
- 9 暗灰黄色粘シルト (J. 514/2) 数 cm ～ 3cm 大の灰白色シルト、黒褐色シルト、グレー灰色シルトブロック状に含む。
- 10 暗灰色粘シルト (J. 514/1) 数 cm 大の暗灰色シルト、1 ～ 5cm 大の黄褐色シルトブロックを含む。
- 11 黄褐色粘シルト (J. 514/1) 数 cm 大の黄褐色シルト、1 ～ 3cm 大の暗灰色粘質、黄褐色シルトブロック多い。
- 12 灰白色シルト (514/1)
- 13 灰白色粘シルト (515/1)
- 14 黄褐色シルト (J. 513/1) 数 cm 大の黄褐色シルト、1 ～ 3cm 大の暗灰色粘質、黄褐色シルトブロック多い。
- 15 灰白色粘シルト (J. 514/1)

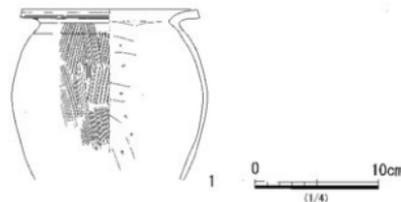
No.	種類	層位・部位	法量 (m)	形跡・埋込等の特徴	出土等の特徴	色 票
1	赤土層	埋込層	1.0m	1/4埋込層の破片、赤土層のハタケ、下縁部はコナヤナ。	(埋込層) 下の赤土層に多く含む (埋込層) 直下	(赤土層) に近い層 (513/1) (内層) 黄褐色 (513/2) (赤土層) に近い層 (513/3)

第 184 図 SP482(1/40) と出土遺物 (1/4)

り込まれている。埋上は下層が灰色シルト、暗灰黄色シルト、黒褐色シルト、灰オリーブ色シルトをブロック状に含む黒褐色から灰色のシルト質土であり(第183図6～8層)、埋め戻された状況を示す。上層は薄い層が重なる、あるいは炭化物をラミナ状に含む部分があるなど固みに流入した堆積土とみられる。なお、遺物は出土していない。

## SP482

SP482は調査範囲のほぼ中央、X=147645.5、Y=37214.0付近に検出した、ほぼ楕円形の土坑である(第184図)。長径約2.5m、短径約1.9mを測り、底面は標高0.7m付近で検出面からほぼ垂直、または大



No.	種類	層位・部位	法量 (m)	形跡・埋込等の特徴	出土等の特徴	色 票
1	赤土層	埋込層	1.0m	1/4埋込層の破片、赤土層のハタケ、下縁部はコナヤナ。	(埋込層) 下の赤土層に多く含む (埋込層) 直下	(赤土層) に近い層 (513/1) (内層) 黄褐色 (513/2) (赤土層) に近い層 (513/3)

第 185 図 SP483 出土遺物 (1/4)

きく下に拡がりながら約90cm掘り込まれている。埋土は下部が黄灰色シルト、黒褐色シルト、暗灰黄色シルトなどをブロック状に含む黒褐色から灰色のシルト質土、粘土シルトであり(第184図7～15層)、埋め戻された状況と見られる。上部は比較的薄い層が堆積しており、炭化物の薄層を含むなど流入上とみられる。

出土遺物は少なく、壺形土器(第184図1)と壺形土器の胴部破片が出土している。1は口縁部～胴部上半の破片で弥生時代後期前半、後期Ⅱに位置付けられる。



に位置付けられる。

### SP484

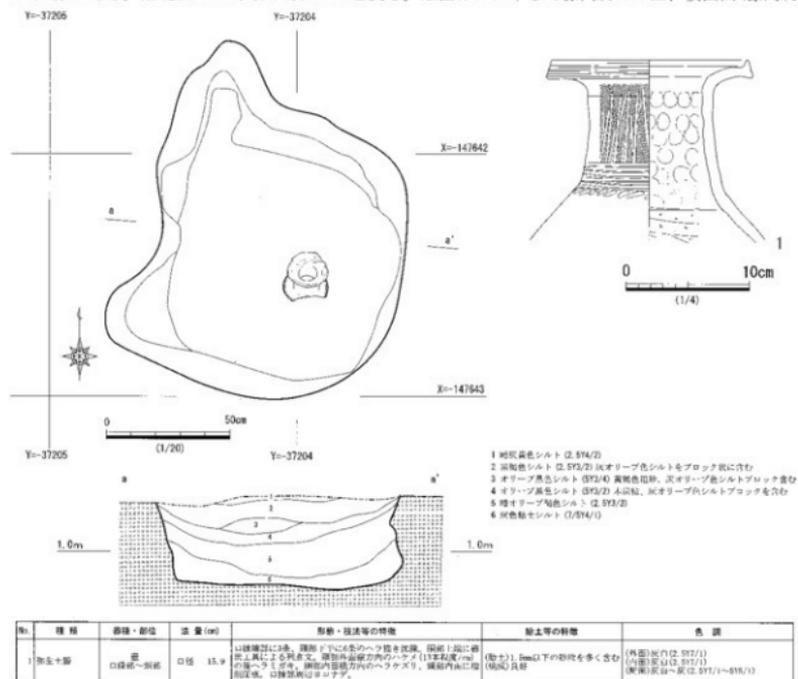
X=-147651.2, Y=-37208.4付近に所在する小形の土坑である(第187図)。上層のSD320の範囲にあたり、土坑上部は失われているようである。直径40～50cmを測り、底は標高0.9m付近である。内部に完形の壺形土器1点を入れていた。

この壺は口縁部がほぼ直立する直口壺で、胴部に焼成後の穿孔がある。胴部の中程から下部にかけて煤が付着しており、火にかけられて使用されたものと見られる。

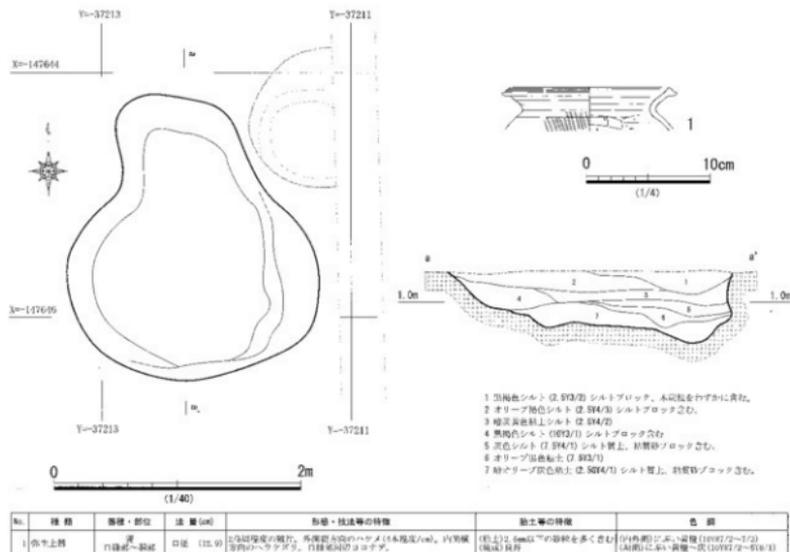
SP484はほかの大形土坑と異なり、入れられた直口壺1点程度の大きさしかないことから、土器埋納用の土坑とみられる。しかしながら、SD320などにより上部が失われているため、近接して存在するSP485、SP486などととも大形土坑の底部の一部である可能性も捨てきれない。しかしながら、ほかの大形土坑の底部はほぼ平らであり、一方SP484、SP485はそれぞれ40～60cmほどの深さがあり、その可能性は低いものと考えられる。

### SP492

SP492は調査範囲北東部の谷状の低地部、X=-147642.5, Y=-37204.0付近に所在する不定形の上坑である(第188図)。南北約1.4m、東西約1.2mを測る。底面はほぼ平らで標高約0.85m、検出面(標高約



第188図 SP492(1/20)と出土遺物(1/4)



第189図 SP495 (1/40) と出土遺物 (1/4)

1.2mから垂直に近い傾斜で35cm程度掘り込まれている。埋土はおおむね黒褐色～オリーブ黒色のシルト質土で砂質土やシルト質土のブロックを含んでいる。

出土遺物は少なく、底面付近から大形の壺形土器片のほか壺形土器の小片が数点出土している(第188図1)。壺形土器は広口の長頸壺で口縁部～肩部付近の破片である。口縁部と頸部下側にへら描き沈線、胴部上端に櫛状工具による列点文を施す。弥生時代後期前半(後期Ⅱ)に位置付けられるものである。

## SP495

SP495は調査範囲東部の谷状の低地部、X=14764.5、Y=37202.5付近に所在する不定形の上坑である(第189図)。南北約2.3m、東西約2.0mを測り、底は標高0.65～0.8m付近、検出面(標高1.25m付近)から40～60cmほど掘り込まれている。埋土はオリーブ灰色～黒褐色のシルト質土、粘質土で砂質土、シルト質土ブロックを含んでいる。

出土遺物は壺形土器などの小片が出土している。第189図1はそのうち口縁部の2/5周程度に復元できるものである。やはり弥生後期前半(後期Ⅱ)に位置付けられる。

なお、記述したものの以外のうちSP491、SP494、SP497などは底面のレベルが標高0.7～0.8m、垂直に近い傾斜で掘られていること、埋土の下部は埋め戻された土層の特徴、上部は流入した土層の特徴を持つこと、遺物などはほとんど含んでいないことなど記述してきた大形土坑と共通する。また、性格不明ながら、SP490、SP493、SP498など径0.5～1m程度の小形の土坑も存在する。

## c) 小結—大形土坑の性格—

第2次調査区で検出された大形土坑は、先述のとおり形態や埋土の特徴、底面のレベルなどで共通しており、同じ性格の土坑群ととらえられる。これらは下が広がる形態や集落周辺の低位部に近い地点に存在することなど貯蔵穴に類似するが、内部には何も残されておらず、その可能性は低い。底面のレベルである標高0.7m付近が微高地基盤層が粘土質の部分(XVII-③～⑥層)から砂質の強い部分(XVII-⑦層)に変わる境界付近にあっていることから、これらの土坑は粘土採掘坑と考えられる。

本調査地点の北約400mに所在する南方遺跡(広島高哉岡山支部・岡山地家簡儀庁舎地点)では粘土採掘坑とされる袋状土坑が233基検出されている<sup>(3)</sup>。これらの土坑は弥生時代後期後半(後期IV)を中心とする時期のもので、今回の調査で検出した土坑群(後期II)より若干新しい時期のものである。これらは「不整形形、楕円状」の平面形、垂直に近い傾斜や下方が広がる断面形態、平坦な底部、底面が特定のレベル(標高50～90cm)に集中すること、規模、土坑底面の土層が砂層となっていること、下層が人為的な埋め戻し土、上層が流入土という埋土の状況など本調査で検出した大形土坑に酷似している。また、径0.5～1m程度の小形の土坑についても同様に扱っている。なお、南方遺跡の調査者は同様の土坑が粘土採掘坑として報告されている例を挙げながらも、最終的には木製品の出土状況などをあげ「木器に関わる何らかの遺構」と推定している<sup>(2)</sup>。木製品は土坑の底面か最下層中、最下層上面から出土しており、「埋め戻し前か埋め戻し途中に廃棄もしくは何らかの意図を持って置かれたもの」と考えられている<sup>(4)</sup>。こうした木製品の出土状況が粘土採掘坑であることを疑問視する材料となるかは理解しがたいが、逆に、これらの木製品は掘り棒、鋤、鍬など掘削用具に集中しており、破損品などを廃棄したものと考えられ、粘土採掘坑のしかも「埋め戻し土」中から出土するものとして極めてふさわしいものといえる。また、下層が人為的な埋め戻し土、上層が流入土という埋土の状況も、掘削時に発生した残土を埋め戻し、残った凹みはそのまま放置されたことを示していると考えられる。このことは土坑が穴の形態として機能するものではなく、また掘削後は無用のものであったことを示していると考えられ、やはり粘土の採掘—掘るという行為が目的の土坑である可能性が高い。

## 注

(1) 弥生土器の編年、時期区分の表記については岡山県教育委員会で使用されているものに準拠した。

江見正己 1980「時期区分について」(江見正己ほか 1980「白間川原尾島遺跡1」旭川放水路(白間川)改修工事に伴う発掘調査 I『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』39 建設省岡山河川工事事務所・岡山県教育委員会)

正岡謙夫 1995「時期区分について」(中野雅美ほか 1995「津寺遺跡2」山陽自動車道建設に伴う発掘調査10『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』98 日本道路公団広島建設局岡山工事事務所・岡山県教育委員会)

(2) 岡田 博・下澤公明・小松原基弘・水田貴士 2006「南方遺跡—広島高哉岡山支部・岡山地家簡儀庁舎建て替えに伴う調査—」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告200』岡山県教育委員会

(3) 下澤公明 2006「袋状土坑について」(注2)文獻

(4) 小松原基弘 2006「袋状土坑出土の木器について」(注2)文獻



検出遺構 覧

遺構番号	検出遺構名	位置		遺構の性格等	時期	遺構の先後関係	備 考
		X	Y				
0 6 9	遺構 1	-17600.2	37011.4	不明土坑			
0 7 0	遺構 1	-17629.9	37011.9	掘石基礎 Ⅲ			
0 7 1	遺構 1	-17629.9	-37212.6	掘石基礎 A3		SP073 → SP071	
0 7 2	遺構 1	-17627.6	-37212.6	石井		SP073 → SP029	
0 7 3	遺構 1	-17629.6	-37212.6	柱穴?		SP072 → SP011 → SP072	
0 7 4	遺構 1	-17629.6	-37212.4	不明土坑?			SK204 の一画?
0 7 5	遺構 1	-17629.4	-37212.6	礎石跡 Ⅲ			
0 7 6	遺構 1	17629.6	-37219.6	礎石跡			
0 7 7	遺構 1	-17632.2	-37217.0	礎石跡		SP077 → SP076	
0 7 8	遺構 1	-17632.2	-37216.8	礎石?		SP077 → SP078	
0 7 9	遺構 1	-17633.0	-37212.4	礎石跡 Ⅲ			
0 8 0	遺構 1	-17633.2	-37211.6	柱穴?		SP081 → SP080 → SP082	
0 8 1	遺構 1	-17633.2	-37212.2	礎石基礎 A1	17C 後半	SP081 → SP080 → SP082	埋納 1
0 8 2	遺構 1	17631.6	-37219.6	礎石・石井			
0 8 3	遺構 2	-17636.8	37011.2	掘石基礎 Ⅲ?			
0 8 4	遺構 1	-17636.8	-37211.2	掘石跡 Ⅲ			
0 8 5	遺構 1	-17636.4	-37211.2	掘石基礎 Ⅲ?		SP031 → SP032 → SP080	
0 8 6	遺構 1	-17636.4	-37209.8	掘石基礎 Ⅲ?		SP032 → SP081 → SP080	
0 8 7	遺構 1	-17636.8	-37209.2	掘石基礎 A3		SP088 → SP087 → SP086	
0 8 8	遺構 1	-17636.6	-37208.1	礎石	17C 前半	SP088 → SP087 → SP086	埋納 1
0 8 9	遺構 1	-17635.6	-37212.1	礎石・礎石基礎 A3			SP087 → SP089
0 8 9	遺構 1	-17635.6	-37212.1	礎石・礎石基礎 A3			
0 9 0	遺構 1	-17635.6	-37212.1	礎石・礎石基礎 A3			
0 9 1	遺構 1	-17635.7	-37211.2	不明小穴?			
0 9 2	遺構 1	-17636.8	-37213.0	不詳			
0 9 3	遺構 1	-17639.9	-37213.6	不詳			
0 9 4	遺構 1	-17639.6	-37209.1	礎石・礎石基礎 A2?	17C 後半	SP091 → SP091	埋納 1
0 9 5	遺構 1	-17639.6	-37209.6	礎石基礎 A2	17C 後半		
0 9 6	遺構 1	17631.9	-37201.6	礎石の痕跡			礎石等の埋納否か?
0 9 7							注
0 9 8	遺構 1	17633.2	-37207.6	礎石基礎?			
0 9 9	遺構 1	17633.0	-37208.0	礎石基礎?			
1 0 0	遺構 1	-17633.0	37207.0	礎石			
1 0 1	遺構 1	-17636.6	-37212.6	礎石?			川原掘作
1 0 2	遺構 1	-17633.4	-37204.0	柱穴			
1 0 3	遺構 1	-17633.4	-37204.0	柱穴			SP100 の一画
1 0 4	遺構 1	-17633.8	-37205.4	礎石基礎 Ⅲ			
1 0 5	遺構 1	17634.0	-37203.8	礎石・石井			
1 0 6	遺構 1						SP101 土壌面
1 0 7	遺構 1	-17636.1	-37202.0	石井跡 土?			
1 0 8	遺構 1	-17637.1	-37206.6	礎石 (礎石土台)?	17C 後半		埋納 1?
1 0 9	遺構 1	-17637.2	-37202.2	礎石 (礎石土台)?	17C 後半		埋納 1?
1 1 0		-17637.1	37199.2				注
1 1 1	遺構 1	-17636.9	-37198.6	不明石段			
1 1 2	遺構 1	-17631.2	-37208.2	礎石?			
1 1 3	遺構 1	-17636.2	-37210.0	柱穴?			
1 1 4	遺構 1	-17635.6	-37212.4	礎石跡?			
1 1 5	遺構 1	17636.1	-37205.1	礎石 (埋納土台)?	17C 後半		埋納 1?
1 1 6	遺構 1	-17636.1	-37206.2	礎石?			
1 1 7	遺構 1	-17636.9	-37205.2	礎石?	17C 後半		
1 1 8	遺構 2	-17637.4	-37201.0	掘石基礎 A2	17C 後半		埋納 1
1 1 9	遺構 2	-17637.0	-37200.4	掘石跡 Ⅲ			
1 2 0	遺構 2	-17635.6	-37199.4	掘石基礎 A1	17C 後半		埋納 1
1 2 1	遺構 2	-17636.9	-37201.6	掘石跡 Ⅲ		SP128 → SP121 → SK102	
1 2 2	遺構 2	-17636.0	-37202.0	掘石基礎 A1	17C 後半	SP122 → SK107	埋納 1
1 2 3	遺構 2	-17636.8	-37203.0	掘石跡 Ⅲ			埋納 1
1 2 4	遺構 2	17636.1	-37205.4	礎石基礎 A3	17C 後半		
1 2 5	遺構 2	-17637.4	37203.4	礎石基礎 A2	17C 後半		埋納 1
1 2 6	遺構 2	-17637.8	-37204.6	礎石跡 Ⅲ		SP127 → SP126	
1 2 7	遺構 2	-17637.8	-37204.2	礎石跡 Ⅲ		SP127 → SP126	
1 2 8	遺構 2	-17636.1	-37201.2	掘石基礎 A2	17C 後半	SP128 → SP122 → SK102	埋納 1
1 2 9	遺構 2	-17636.6	-37207.0	柱穴?		SP060 → SP129	
1 3 0	遺構 2	-17636.6	-37207.4	柱穴?			
1 3 1	遺構 2	-17637.0	-37208.0	礎石跡 Ⅲ			< 注 6 7 >
1 3 2	遺構 2	17636.8	-37206.4	礎石基礎 A2	17C 後半		埋納 1
1 3 3	遺構 2	-17634.9	-37208.2	礎石?		SP134 → SP133	
1 3 4	遺構 2	-17634.9	-37208.8	礎石?		SP134 → SP133	
1 3 5	遺構 2	-17634.9	-37208.7	礎石基礎 Ⅲ?		SP136 → SP135	
1 3 6	遺構 2	-17634.1	37201.4	掘石跡 Ⅲ		SP136 → SP136	
1 3 7	遺構 2	-17634.6	37203.1	掘石跡 Ⅲ			
1 3 8	遺構 2	-17635.0	37202.6	掘石基礎 Ⅲ		SP138 → SP089	
1 3 9	遺構 2	-17634.0	-37204.4	柱穴?		SP139 → SP179	
1 4 0	遺構 2	-17633.8	-37201.0	掘石基礎 Ⅲ		SP139 → SP139	
1 4 1	遺構 2	-17634.6	-37199.2	礎石基礎 Ⅲ	17C 後半		埋納 1
1 4 2	遺構 2	17637.3	-37209.0	石井			
1 4 3	遺構 2	-17633.0	-37199.2	掘石基礎 A2	17C 後半		埋納 1
1 4 4	遺構 2	-17630.0	-37199.9	掘石基礎 A2	17C 後半		埋納 1
1 4 5	遺構 2	-17633.2	-37201.4	掘石跡 Ⅲ			
1 4 6	遺構 2	-17633.0	-37202.0	掘石跡 Ⅲ			
1 4 7	遺構 2	-17632.9	-37203.4	掘石跡 Ⅲ			
1 4 8	遺構 2	-17633.1	-37204.0	柱穴?			
1 4 9	遺構 2	-17631.4	-37201.4	掘石基礎 A3	17C 後半		埋納 1
1 5 0	遺構 2	-17631.6	-37203.1	掘石基礎 A2	17C 後半		埋納 1
1 5 1	遺構 2	-17631.1	-37204.0	掘石基礎 A2	17C 後半	SP142 → SP141	
1 5 2	遺構 2	-17629.9	-37201.5	掘石跡 Ⅲ		SP142 → SP142 → SP066 → SK153	
1 5 3	遺構 2	-17629.2	-37201.3	礎石遺構		SP142 → SP142 → SP066 → SK153	SP066 に付属?
1 5 4	遺構 2	-17628.9	-37201.1	掘石跡 Ⅲ		SP141 → SP141	
1 5 5	遺構 2	-17627.1	-37206.1	掘石基礎 Ⅲ?	17C 後半	SP146 → SP146	埋納 1?
1 5 6	遺構 2	-17627.1	-37209.6	掘石基礎 Ⅲ?		SP146 → SP146	
1 5 7	遺構 2	-17633.1	-37206.1	掘石基礎 Ⅲ	17C 後半		埋納 1、掘石跡におおむねの残存

通課番号	種別・通課名	位置	通課の名称等	時期	通課の先後関係	備 考
		X Y				
1.3.8	遊芸2	-17936.0	-97211.6	吹奏?		
1.3.9	遊芸2	-17936.7	-97211.2	吹奏?		
1.4.0	遊芸2	-17937.0	-97212.5	吹奏?		
1.4.1	遊芸2	-17936.4	-97212.9	吹奏?		
1.4.2	遊芸2	-17933.8	-97213.9	吹奏・吹奏?		
1.4.3	遊芸2	-17935.9	-97213.3	吹奏?		
1.4.4	遊芸2	-17933.5	-97213.8	吹奏?		
1.4.5	遊芸2	-17933.1	-97213.8	吹奏?		
1.4.6	遊芸2	-17932.1	-97213.5	吹奏?		
1.4.7	遊芸2	-17933.4	-97211.1	吹奏?		
1.4.8	遊芸2	-17932.5	-97211.5	吹奏?		
1.4.9	遊芸2	-17933.4	-97208.1	吹奏?		
1.7.0	吹奏2	-17932.2	-97208.4	管A吹奏?		
1.7.1	吹奏2	-17930.0	-97205.6	吹奏?	SP17 → SP21 → SP26	
1.7.2	吹奏2	-17929.0	-97208.1	管A吹奏 70?		
1.7.3	吹奏2	-17930.7	-97210.2	管A吹奏 70?		
1.7.4	吹奏2	-17929.7	-97211.6	管A吹奏 70?		
1.7.5	吹奏2	-17929.0	-97215.0	管A吹奏 70?		
1.7.6	吹奏1?7	-17949.0	-97221.0	吹奏上級?		演、基礎部分、特に舞踏、中級以上を教く、
1.7.7	吹奏2	-17932.7	-97217.3	管A吹奏 70?		
1.7.8	吹奏2					
1.7.9	1-2005基					
1.9.0	遊芸2	-17932.2	-97208.3	吹奏?		
1.9.1	遊芸2	-17932.0	-97212.2	管A吹奏 A?	1TC 後半	建物1
1.9.2	遊芸2	12621.0	-97211.0	吹奏・吹奏 20?		
1.9.3	遊芸2	12621.0	-97212.8	管A吹奏 70?		
1.9.4	吹奏2	-17933.2	-97213.0	管A吹奏 70?		吹奏(吹奏?)・吹奏?
1.9.5	吹奏2	-17931.4	-97213.3	管A吹奏 70?		
1.9.6	吹奏2	-17931.5	-97213.3	管A吹奏 70?		
1.9.7	吹奏2	-17931.0	-97216.2	管A吹奏 70?		
1.9.8	吹奏1	-17931.6	-97217.2	吹奏?		
1.9.9	吹奏1	-17932.8	-97217.3	管A吹奏 70?		
2.0.0	吹奏2	-17935.0	-97215.0	管A吹奏 70?		
2.0.1	吹奏2	-17930.1	-97216.3	管A吹奏 70?		
2.0.2	吹奏2	-17928.3	-97216.2	管A吹奏 70?		
2.0.3	吹奏2	-17928.2	-97214.1	管A吹奏 70?	SP17 → SP20	SP17の一部分
2.0.4	吹奏2	-17929.0	-97214.2	管A吹奏 70?		
2.0.5	吹奏2	-17929.0	-97214.2	管A吹奏 70?	SP20 → SP25	
2.0.6	吹奏2	12620.0	-97211.9	管A吹奏 A?	1TC 後半	建物1
2.0.7	吹奏2	-17934.0	-97214.0	管A吹奏 A?	SP20 → SP23	建物1
2.0.8	吹奏2	-17932.4	-97204.0	管A吹奏 A?	1TC 後半	SP20より2階、6.1.1.1吹奏の吹き出し
2.0.9	吹奏2	-17930.7	-97217.3	管A吹奏 70?		建物1?
2.1.0	吹奏2	-17929.0	-97205.0	吹奏?		
2.1.1	吹奏2	-17929.7	-97201.7	吹奏・管A吹奏 A?	SP15 → SP21	
2.1.2	吹奏2	-17930.8	-97204.0	管A吹奏 70?	SP22 → SP31	
2.1.3	吹奏2	-17929.5	-97205.5	吹奏?		
2.1.4	吹奏1	-17928.4	-97188.9	吹奏?		授業では1階に吹奏の1階のみが、舞・吹奏を7.1.1.1吹奏の吹き出し
2.1.5	吹奏2	-17928.2	-97188.2	管A吹奏 70?		
2.1.6	吹奏2	-17928.1	-97213.5	吹奏?		
2.1.7	吹奏2	-17928.4	-97212.8	吹奏?	SP17 → SP20	
2.1.8	吹奏2	-17921.0	-97218.0	吹奏?		
2.1.9	吹奏2	-17921.3	-97211.3	吹奏?		
2.2.0						
2.2.1	吹奏2	-17928.0	-97213.0	吹奏?		吹奏
2.2.2	吹奏2	-17928.0	-97213.0	吹奏?		吹奏
2.2.3	吹奏2	12620.7	-97213.7	吹奏?		吹奏
2.2.4	吹奏2	-17931.7	-97211.7	管A吹奏 70?		
2.2.5	吹奏2	-17928.5	-97212.0	管A吹奏 70?	1TC 後半	建物1
2.2.6	吹奏2	-17930.2	-97207.8	吹奏?		
2.2.7	吹奏2	-17927.8	-97213.1	吹奏?		
2.2.8	吹奏2	-17927.8	-97218.0	管A吹奏 70?+A?		
2.2.9	吹奏1	-17928.1	-97217.7	管A吹奏 70?		
2.3.0	吹奏1	-17928.6	-97217.8	管A吹奏 70?		
2.3.1	吹奏1	-17931.9	-97217.6	管A吹奏 70?		
2.3.2	吹奏1	-17931.2	-97215.3	管A吹奏 70?		
2.3.3	吹奏1	-17931.1	-97215.0	管A吹奏 70?		
2.3.4	吹奏1	-17932.4	-97218.4	吹奏?		
2.3.5	吹奏1	-17933.5	-97217.6	管A吹奏 70?		
2.3.6	吹奏1	-17935.9	-97218.5	吹奏?		
2.3.7	吹奏1	-17936.8	-97218.0	管A吹奏 70?		
2.3.8	吹奏1	-17936.8	-97218.0	管A吹奏 70?		
2.3.9	吹奏1	-17935.2	-97218.0	管A吹奏 70?		
2.4.0	吹奏2	-17934.0	-97218.0		1TC 後半	SP12 → SP21・SP26
2.4.1	吹奏2	-17928.0	-97217.7		1TC 後半	SP12 → SP21・SP26
2.4.2	吹奏2	-17928.0	-97218.0		1TC 後半	SP12 → SP21・SP26
2.4.3	吹奏2	-17932.2	-97218.8	吹奏?		
2.4.4	吹奏2?	-17930.8	-97218.7	吹奏?		
2.4.5	吹奏2?	-17930.9	-97220.5	管A吹奏 70?		
2.4.6	吹奏2	-17929.9	-97221.2	管A吹奏 70?		
2.4.7	吹奏2	-17931.5	-97218.7	吹奏?		
2.4.8						
2.4.9						
2.5.0	吹奏1・2	-17961.5	-97223.6	管A吹奏 70?	1TC 後半	
2.5.1	吹奏1・2	-17962.5	-97222.0	管A吹奏 (反がま)	1TC 後半	
2.5.2						吹奏2の教員から特別と同一。

換出連携一覧

連携番号	発出連携先	値		連携の性格等	時 期	連携の先後関係	備 考
		X	Y				
233							
234	近鉄1-2	-17992.0	-2723.8	不明			株元
235	近鉄1-2	-17954.0	-2721.0	不明			18 近鉄西条?
236	近鉄1-2	-17951.0	-2721.9	不明			
237	近鉄1-2	-17945.0	-2722.7	不明			近鉄多々(遠鉄連携)
238	近鉄1-2	-17945.7	-2722.6	不明			
239	近鉄1-2	-17946.3	-2721.6	不明			
240	近鉄1-2	-17945.0	-2721.8	不明			
241	近鉄1-2	-17946.0	-2721.9	不明			
242	近鉄1-2	-17953.0	-2721.0	不明			明の台 ~ 女子編成/緑線種
243	近鉄1-2	-17953.0	-2721.6	不明			明の台 ~ 17 年製の十両編成車上
244	近鉄1-2	-17952.3	-2721.1	不明			
245	近鉄1-2	-17952.3	-2721.1	不明			
246	近鉄1-2	-17953.0	-2720.3	遠鉄連携			18C 株元
247	近鉄1-2	-17946.0	-2720.0	遠鉄連携			
248	近鉄1-2	-17946.0	-2721.7	不明			
249	近鉄1-2	-17946.1	-2721.7	不明			
270	近鉄1-2	-17946.0	2720.8	不明(新車)			17C 株元
271	近鉄1-2	-17953.2	-2721.0	不明(新車)			
272	近鉄1-2	-17953.2	-2721.2	不明(新車)			近鉄10 → SP21
273	近鉄1-2	-17953.2	-2721.2	不明(新車)			近鉄10 → SP22
274	近鉄1-2	-17952.0	2720.8	不明(新車)			株元
275	近鉄1-2	-17953.0	-2720.2	不明(新車)			近鉄株元?
276	近鉄1-2	-17952.5	-2721.1	不明			18C 株元
277	近鉄1-2	-17953.2	-2720.8	不明			
278	近鉄1-2	-17953.0	-2720.8	不明			
279	近鉄1-2	-17953.1	-2720.1	不明			SP21 → SP20
280	近鉄1-2	-17953.0	-2720.2	不明			SP20 → SP20
281	近鉄1-2	-17953.2	-2720.0	不明			
282	近鉄1-2	-17951.0	-2720.0	不明			18C上 → 18C 株元
283	近鉄1-2	-17951.0	-2720.1	不明(新車)			タナメロ西条
284	近鉄1-2	-17948.0	-2720.0	不明(新車)			18C 株元
285	近鉄1-2	-17944.3	-2720.2	不明			
286	近鉄1-2	-17944.0	2720.1	不明			
287	近鉄1-2	-17945.3	2720.9	不明			
288	近鉄1-2	-17952.2	-2720.7	不明			
289	近鉄1-2	-17944.0	-2720.1	不明			SP20 → SP20
290	近鉄1-2	-17946.1	-2721.5	遠鉄連携			17C 株元
291	近鉄3	17950.0	-2721.7	不明(新車)			17C 株元
292	近鉄3	-17948.0	-2721.1	不明			17C 株元
293	近鉄1-2	-17943.7	-2723.0	不明			不明
294	近鉄1-2	-17939.0	-2720.6	不明(新車)			18C 株元
295	近鉄1-2	-17942.0	-2722.8	不明			SP20 → SP21 → SP20
296	近鉄1-2	-17942.0	2720.8	不明			
297	近鉄1-2	-17941.0	2720.2	不明			
298	近鉄1-2	-17941.0	-2721.6	不明			
299	近鉄1-2	-17939.0	-2721.3	不明			17C 株元?
300	近鉄1-2	-17939.0	-2721.6	不明			17C 株元?
301	近鉄1-2	17938.0	-2721.6	不明			17C 株元?
302	近鉄1-2	-17941.0	2721.2	不明			17C 株元?
303	近鉄1-2	-17942.0	2721.0	不明			17C 株元?
304	近鉄1-2	-17943.1	2721.9	不明			株元
305	近鉄1-2	-17942.2	-2721.6	不明			17C 株元?
306	近鉄1-2	-17943.1	-2721.1	不明			株元
307	近鉄1-2	-17943.8	-2721.2	不明			17C 株元?
308	近鉄1-2	-17941.8	-2721.7	不明			
309	近鉄1-2	17945.0	-2720.0	不明			18C 株元
310	近鉄1-2	-17944.7	-2720.7	不明			
311	近鉄1-2	-17944.0	2720.1	不明			
312	近鉄1-2	-17944.0	2720.2	不明			
313	近鉄1-2	-17944.0	2720.8	不明(新車)			SP21 → SP20
314	近鉄1-2	-17943.8	2720.5	不明			
315	近鉄1-2	-17945.0	-2721.3	不明			17C 株元?
316	近鉄1-2	-17938.0	-2721.2	不明			株元
317	近鉄1-2	-17938.0	-2720.1	不明(新車)			SP21 → SP21, SP21
318	近鉄1-2	-17938.0	-2720.7	不明(新車)			SP21 → SP21, SP20
319	近鉄2	-17938.0	-2720.7	不明			株元?
320	近鉄3	17940.0	-2721.0	不明			17C 株元
321	近鉄3	17941.0	-2721.0	不明			
322	近鉄3	-17936.0	2721.1	遠鉄連携			SP21 → SP20(1階)
323	近鉄3	-17947.0	2721.8	遠鉄連携			SP22 → SP23
324	近鉄3	-17947.0	-2721.5	遠鉄連携			SP21 → SP21
325	近鉄3	-17943.0	-2721.9	不明			SP21 → SP25
326	近鉄3	-17943.0	-2721.6	不明			17C 株元
327	近鉄3	-17944.0	-2720.6	不明			SP22 → SP25
328	近鉄3	17946.2	-2721.0	不明			17C 株元
329	近鉄3	17946.2	-2721.7	不明			SP21 → SP28 → SP22
330	近鉄3	17947.0	-2722.4	不明			17C 株元
331	近鉄3	17948.2	-2722.0	遠鉄連携?			
332	近鉄3	17949.0	-2722.1	遠鉄連携			
333	近鉄3	17949.0	-2722.1	遠鉄連携			17C 株元
334	近鉄1-2	-17946.1	-2721.5	不明			SP31 → SP33
335	近鉄3	-17943.1	-2721.0	不明			17C 株元?
336	近鉄3	-17943.0	-2721.1	不明			17C 株元
337	近鉄3	-17943.2	-2721.9	不明			17C 株元